

辻 町 遺 跡

— 2次調査地 —

1995

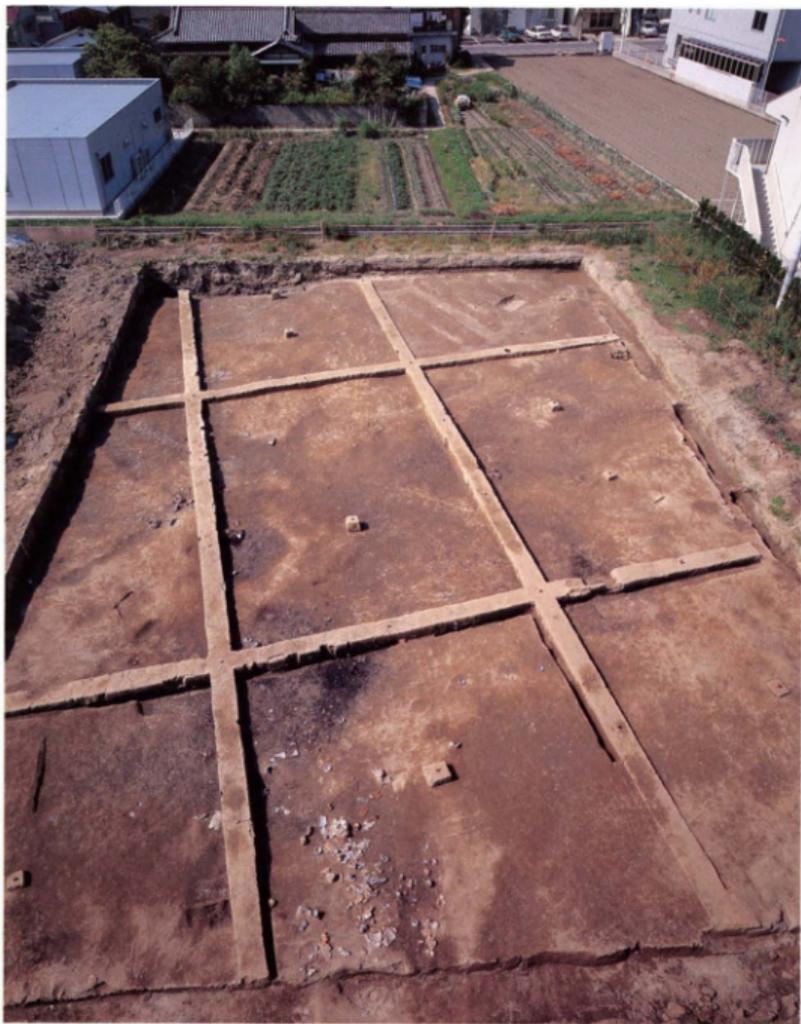
松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

辻 町 遺 跡

— 2次調査地 —

1995

松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター



A区第Ⅸ層上面検出遺構（南より）



S X I (南東より)



B区北壁土層 (南より)



S X I 出土遺物

序

松山平野の西地域にある大峰ヶ台丘陵とその周辺部には、古墳時代前期の灌漑施設である「井堰」が発見された古無遺跡をはじめとして、弥生時代中期の高地性集落や多くの古墳の分布が確認されているほか、丘陵周辺には弥生時代から中・近世にいたる集落関連の遺跡が数多くあります。

平成5年度に宅地開発に伴って事前調査しました辻町遺跡第2次調査地はその大峰ヶ台の東に所在し、古墳時代の竪穴式住居や祭祀に関連する遺構が発見され、多量の遺物が出土しました。また、中世に至っては井戸跡、土坑墓、掘立柱建物跡、耕作痕跡などを確認し、この地域における古墳時代の集落の存在や祭祀形態の一端を明らかにすると共に、中世の人々の生活を知るうえでの貴重な資料を得ることができました。

こうした成果をあげ、報告書を刊行できますのも、埋蔵文化財に対するご理解と多大のご協力をいただきました地権者、並びに関係各位のお陰と厚くお礼申し上げます次第です。

なお、本書が、埋蔵文化財調査研究の一助となり、多方面にわたり広くご活用していただけることを心から願っております。

平成7年11月1日

財団法人 松山市生涯学習振興財団

理事長 田 中 誠 一

例 言

1. 本書は、松山市教育委員会文化教育課と財団法人松山市生涯学習振興財団 埋蔵文化財センターが平成5年4月から同年8月までの間、松山市南江戸5丁目729・730で実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 遺物の実測・製図、遺構の製図は、相原浩二、河野史知、山邊進也、向井人作、日田忠幸、篠崎正記、久保浩二、前田伸也、金子育代、高尾久子、仙波千秋、仙波ミリ子、宮田里美、猪野美喜子、乗松和枝が行った。
3. 遺物実測図は、土師器、須恵器、石器では1/4の縮分を原則とした。なお、遺物実測図と遺構測量図のスケール下には縮分値を付記した。
4. 遺構は呼称を略号化して記述した。住居址：S B、土坑：S K、性格不明遺構（祭祀遺構）：S X、溝：S D、井戸：S Eとし、中世の遺構は番号の頭に0を付け01、02とには番号を1から付記した。
5. 遺構の撮影は大西朋子、相原浩二、河野史知が、遺物の撮影は大西朋子が行った。
6. 使用した方位は、すべて磁北である。
7. 本書にかかわる遺物・記録類は、松山市立埋蔵文化財センターに収蔵・保管している。
8. 本書の執筆・編集は、河野史知（中世）、相原浩二（古墳時代）が行い、田城武志、梅木謙一、水口あいを、大西朋子の協力を得た。
9. 屋外調査においては下條信行（愛媛大学）、屋内調査にあたっては松井章（奈良国立文化財研究所）の各先生にご指導をいただいた。

本文目次

第I章	はじめに	
1.	調査に至る経緯	(相原) 1
2.	調査組織	(相原) 1
第II章	遺跡の概要	
1.	遺跡の立地	(相原) 2
2.	歴史的環境	(相原) 3
第III章	調査の概要	
1.	調査の経過	(相原) 6
2.	層位	(相原) 8
3.	遺構と遺物	12
(1)	中世	
(1)	第V層の調査	(河野) 12
(2)	第VI層の調査	(河野) 16
	掘立柱建物跡	(河野) 16
	土坑	(河野) 16
	井戸跡	(河野) 18
	その他の遺構・遺物	(河野) 20
(2)	古墳時代	
(1)	第IX層上面の調査	(相原) 24
	祭祀跡	(相原) 24
	土坑	(相原) 48
	焼土跡	(相原) 49
(2)	第IX層中の調査	
	祭祀跡	(相原) 51
	第IX層出土遺物	(相原) 58
(3)	第X層の調査	(相原) 64
(4)	第Ⅺ層の調査	(相原) 66
	竪穴式住居	(相原) 66
	その他の遺構・遺物	(相原) 75
第IV章	結 び	(相原・河野) 76

挿 図 目 次

第1図	松山平野の地形分類図(縮尺1/75,000).....	2
第2図	周辺の遺跡分布図(縮尺1/25,000).....	5
第3図	調査地位位置図(縮尺1/2,500).....	7
第4図	調査地区割り図(縮尺1/400).....	7
第5図	A区北壁土層図(縮尺1/40).....	9
第6図	E・Fグリッド間南北ベルト土層図(縮尺1/40).....	10
第7図	B区北壁土層図(縮尺1/40).....	11
第8図	B区第V層出土遺物実測図①(縮尺1/4).....	12
第9図	B区第V層出土遺物実測図②(縮尺1/4).....	13
第10図	B区第V層出土遺物実測図③(縮尺1/4).....	14
第11図	B区第V層出土遺物実測図④(縮尺1/4・1/2).....	15
第12図	第VI層上面遺構配置図(縮尺1/300).....	17
第13図	A区SB01測量図(縮尺1/50).....	18
第14図	A区SB01出土遺物実測図(縮尺1/4).....	18
第15図	B区SK01測量図(縮尺1/20).....	19
第16図	B区SK01出土遺物実測図①(縮尺1/2).....	19
第17図	B区SK01出土遺物実測図②(縮尺1/4).....	20
第18図	B区SF01測量図(縮尺1/20).....	21
第19図	B区SE01出土遺物実測図①(縮尺1/4).....	22
第20図	B区SE01出土遺物実測図②(縮尺1/4・1/6).....	23
第21図	第IX層上面～中層遺構配置図(縮尺1/300).....	25
第22図	SX1測量図(縮尺1/40).....	27
第23図	SX1出土遺物実測図①(縮尺1/4).....	29
第24図	SX1出土遺物実測図②(縮尺1/4).....	30
第25図	SX1出土遺物実測図③(縮尺1/4).....	31
第26図	SX1出土遺物実測図④(縮尺1/4).....	32
第27図	SX1出土遺物実測図⑤(縮尺1/4).....	33
第28図	SX2測量図(縮尺1/20).....	35
第29図	SX2出土遺物実測図①(縮尺1/4).....	38
第30図	SX2出土遺物実測図②(縮尺1/4).....	39
第31図	SX2出土遺物実測図③(縮尺1/4).....	40
第32図	SX3測量図(縮尺1/20).....	41

第33図	S X 3 出土遺物実測図① (縮尺 1/4)	42
第34図	S X 3 出土遺物実測図② (縮尺 1/4)	43
第35図	S X 4 測量図 (縮尺 1/10)	44
第36図	S X 4 出土遺物実測図 (縮尺 1/4)	45
第37図	S X 7 測量図 (縮尺 1/20)	46
第38図	S X 7 出土遺物実測図 (縮尺 1/4)	47
第39図	S K 1 測量図 (縮尺 1/40)	48
第40図	S K 2 測量図 (縮尺 1/40)	48
第41図	焼土 1 測量図 (縮尺 1/40)	49
第42図	焼土 2 測量図 (縮尺 1/40)	49
第43図	焼土 2 出土遺物実測図 (縮尺 1/4)	49
第44図	焼土 3 測量図 (縮尺 1/40)	50
第45図	焼土 4 測量図 (縮尺 1/40)	50
第46図	焼土 4 出土遺物実測図 (縮尺 1/4)	50
第47図	S X 5 測量図 (縮尺 1/10)	52
第48図	S X 5 出土遺物実測図① (縮尺 1/4)	53
第49図	S X 5 出土遺物実測図② (縮尺 1/4)	54
第50図	S X 6 測量図 (縮尺 1/10)	56
第51図	S X 6 出土遺物実測図 (縮尺 1/4)	57
第52図	第IX層出土遺物実測図① (縮尺 1/4)	59
第53図	第IX層出土遺物実測図② (縮尺 1/4)	60
第54図	第IX層出土遺物実測図③ (縮尺 1/4)	61
第55図	第IX層出土遺物実測図④ (縮尺 1/4)	62
第56図	第IX層出土遺物実測図⑤ (縮尺 1/4・1/2)	63
第57図	第X層出土遺物実測図 (縮尺 1/4)	65
第58図	第Ⅺ層上面遺構配置図 (縮尺 1/300)	67
第59図	S B 1 測量図 (縮尺 1/60)	68
第60図	S B 1 出土遺物実測図 (縮尺 1/4)	69
第61図	S B 1 カマド測量図 (縮尺 1/20)	70
第62図	S B 1 カマド出土遺物実測図 (縮尺 1/4)	70
第63図	S B 2 測量図 (縮尺 1/60)	71
第64図	S B 2 出土遺物実測図 (縮尺 1/4)	72
第65図	S B 2 カマド測量図 (縮尺 1/20)	73
第66図	S B 2 カマド出土遺物実測図 (縮尺 1/4)	74

第67図	S B 3 測量図 (縮尺 1/40)	75
第68図	S B 3 出土遺物実測図 (縮尺 1/4)	75

図版目次

図版 1	1. 調査前全景 (北東より)	2. A区北壁土層 (南より)
図版 2	1. A区南壁土層 (北より)	2. B区南壁土層 (北より)
図版 3	1. A区掘立柱建物 S B 0 1 (南より)	2. B区第Ⅵ層上面遺構検出状況(東より)
図版 4	1. S K 0 1 木棺墓 (南より)	2. S E 0 1 遺物出土状況 (東より)
図版 5	1. S E 0 1 (東より)	2. S X 0 1 (西より)
図版 6	1. A区第Ⅸ層上面遺構検出状況(南より)	2. S X 1 検出状況 (南東より)
図版 7	1. S X 1 遺物出土状況 (東より)	2. S X 2・S X 3 (東より)
図版 8	1. S X 2 遺物出土状況 (西より)	2. S X 3 遺物出土状況 (東より)
図版 9	1. S X 3 出土遺物 (西より)	2. S X 4 遺物出土状況 (東より)
図版 10	1. S K 1 (西より)	2. S K 2 (北より)
図版 11	1. S X 5 遺物出土状況 (南西より)	2. S X 6 遺物出土状況 (東より)
図版 12	1. S B 1 拡張前 (西より)	2. S B 1 カマド拡張後 (南より)
図版 13	1. S B 2 (北西より)	2. S B 2 出土遺物 (西より)
図版 14	1. S B 2 カマド (北より)	2. A区北側第Ⅷ層上面遺構(北より)
図版 15	1. 第Ⅴ層出土遺物①	
図版 16	1. 第Ⅴ層出土遺物②	
図版 17	1. S B 0 1、S K 0 1、S E 0 1 出土遺物	
図版 18	1. S E 0 1 出土遺物 (木製品)	
図版 19	1. S X 1 出土遺物① (集合)	
図版 20	1. S X 1 出土遺物② (A. タイ類上顎骨)	
図版 21	1. S X 1 出土遺物③	
図版 22	1. S X 1 出土遺物④	
図版 23	1. S X 1 出土遺物⑤	
図版 24	1. S X 1 出土遺物⑥	
図版 25	1. S X 1 出土遺物⑦	
図版 26	1. S X 2 出土遺物① (集合)	2. S X 2 出土遺物②
図版 27	1. S X 2 出土遺物③	
図版 28	1. S X 2 出土遺物④	
図版 29	1. S X 3 出土遺物①	

図版30	1. SX3 出土遺物②	
図版31	1. SX4 出土遺物	
図版32	1. SX7 出土遺物	2. SK1 出土骨片(B)
図版33	1. 焼土2 出土遺物	2. 焼土4 出土遺物
図版34	1. SX5 出土遺物	
図版35	1. SX6 出土遺物	
図版36	1. 第IX層出土遺物①	
図版37	1. 第IX層出土遺物②	
図版38	1. 第IX層出土遺物③	
図版39	1. 第IX層出土遺物④	
図版40	1. 第IX層出土遺物⑤	
図版41	1. 第X層出土遺物	
図版42	1. SB1 出土遺物	
図版43	1. SB1 カマド出土遺物	2. SB2 出土遺物①
図版44	1. SB2 出土遺物②	2. SB2 カマド出土遺物

表 目 次

表1. B区第V層出土遺物観察表(土製品).....	80
表2. B区第V層出土遺物観察表(石製品).....	82
表3. A区SB01出土遺物観察表(土製品).....	82
表4. B区SK01出土遺物観察表(鉄製品).....	82
表5. B区SK01出土遺物観察表(土製品).....	82
表6. B区SE01出土遺物観察表(土製品).....	83
表7. B区SE01出土遺物観察表(木製品).....	83
表8. SX1出土遺物観察表(土製品).....	84
表9. SX2出土遺物観察表(土製品).....	87
表10. SX3出土遺物観察表(土製品).....	88
表11. SX3出土遺物観察表(石製品).....	89
表12. SX4出土遺物観察表(土製品).....	89
表13. SX7出土遺物観察表(土製品).....	90
表14. 焼土2出土遺物観察表(土製品).....	90
表15. 焼土4出土遺物観察表(土製品).....	90
表16. 焼土4出土遺物観察表(石製品).....	91

表17. S X 5 出土遺物觀察表 (土製品)	91
表18. S X 5 出土遺物觀察表 (石製品)	92
表19. S X 6 出土遺物觀察表 (土製品)	92
表20. 第IX層出土遺物觀察表 (土製品)	93
表21. 第IX層出土遺物觀察表 (石製品)	97
表22. 第X層出土遺物觀察表 (土製品)	97
表23. S B 1 出土遺物觀察表 (土製品)	98
表24. S B 1 出土遺物觀察表 (石製品)	99
表25. S B 1 カマド出土遺物觀察表 (土製品)	99
表26. S B 2 出土遺物觀察表 (土製品)	99
表27. S B 2 カマド出土遺物觀察表 (土製品)	100
表28. S B 3 出土遺物觀察表 (土製品)	100

第I章 はじめに

1. 調査に至る経緯

1993（平成5）年1月、栗林豊美氏より、松山市南江戸5丁目729番・730番の開発にあたって、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。当該地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の『34朝美遺物包含地』内に当たり、周知の遺跡として知られている。同包含地内では、平成3年に辻町遺跡1次調査が行われており、古墳時代から中世にいたる遺構や遺物が見つかっている。文化教育課は、当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲やその性格を確認するため、(財)松山市生涯学習振興財団 埋蔵文化財センター（以下、埋蔵文化財センター）に調査を委託した。

これを受け埋蔵文化財センターは同年2月1日から2日までの間、試掘調査を実施した。その結果、土層は安定した堆積状況を示しており遺構面3面と遺物包含層を3層検出した。遺物は青白磁、土師器、須恵器が出土し、古墳時代～中世の遺跡があることを確認した。

この結果を受け、文化教育課と埋蔵文化財センターならびに栗林豊美氏の三者は遺跡の取り扱いについて協議を行い、開発によって失われる遺跡について、記録保存のため発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、古墳時代から中世における当該地周辺地域の集落構造解明を目的とし、特に辻町遺跡1次調査地の祭祀遺構の広がりを確認するため、埋蔵文化財センターが主体となり、栗林豊美氏の協力のもと、1993年4月12日に開始した。

2. 調査組織 [平成5年4月1日現在]

松山市教育委員会	教育長	池田 尚輝
生涯教育部	部長	渡辺 和彦
	次長	三好 俊彦
文化教育課	課長	松平 泰定
(財)松山市生涯学習振興財団	理事長	田中 誠一
	事務局長	渡辺 和彦
	事務次長	一色 正士
埋蔵文化財センター	所長	河口 雄三
	次長	田所 延行
	調査係長	田城 武志
	調査主任	栗田 正芳（文化教育課職員）
調査担当	調査員	相原 浩二・河野 史知

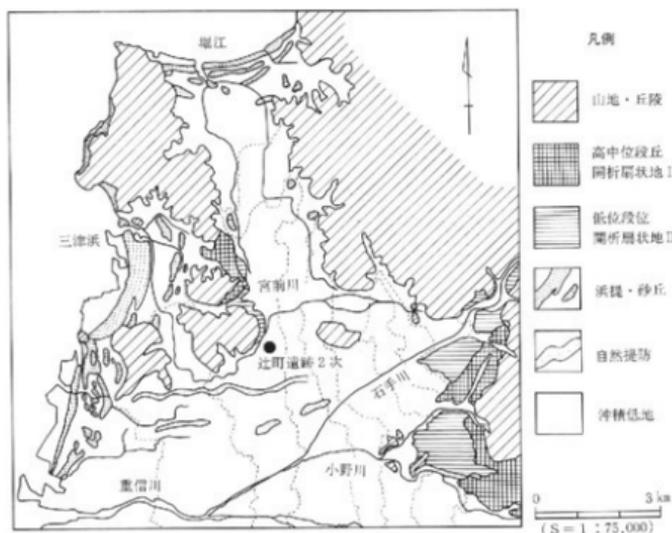
第II章 遺跡の概要

1. 遺跡の立地

松山平野は、西部瀬戸内の伊予灘と中部瀬戸内の澁灘とを二分するように北に突き出した高縄半島の西側付け根部分に位置する。高縄半島中央部には、半島最高峰の東三方ヶ森を始め、北三方ヶ森、伊之子山、高縄山からなる高縄山地が形成されている。この高縄山地に源を発した河川によって形成された沖積平野が松山平野である。辻町遺跡2次調査地は、この沖積平野のやや西側の海抜13.6mの氾濫原に位置し、西には大峰ヶ台、丸山、岩子山、弁天山等の分離独立丘陵がある。

松山平野を流れる河川のうち、平野の南よりのところに東の山地から西に向かって流れる重信川があり、北東から南西方向に平野を斜めに横切って流れる石手川は途中小野川を合わせて、重信川に合流する。

本遺跡の西方約300mには、石手川から分流した宮前川が流れている。宮前川は、道後城北地区を流れて大峰ヶ台丘陵の東麓を北から南、そして西へと流れ、さらに北へとむきを変え、その後分岐し北・西の2条の流れとなって伊予灘に注いでいる。



第1図 松山平野の地形分類図

2. 歴史的環境

辻町遺跡2次調査地周辺には、古照遺跡をはじめ数多くの遺跡が分布しており、これらの遺跡について最近の調査結果から時代別に述べていくことにする。

縄文時代

調査地周辺には、いまだ明確な縄文時代の遺跡は調査されていない。大峰ヶ台東丘陵裾部の朝美澤遺跡2次調査地、松環美沢遺跡からは後・晩期の土器、また古照遺跡の砂礫堆積層からは前期末から晩期にいたる土器が出土している。

弥生時代

(前期) 朝美澤遺跡2次調査地からは前期前半の包含層を確認し土器が出土している。また、弁天山丘陵の東小丘陵上の齊院烏山遺跡からは前期末の漆を検出している。このほか同丘陵中央東麓の宮前川左岸の後背湿地に立地する宮前川別府遺跡からは前期末から中期初頭の遺物が包含層中より多数出土している。

(中期) 大峰ヶ台丘陵山頂部の大峰ヶ台遺跡では中期中葉の竪穴住居址など集落関連遺構と遺物が検出されているほか、同丘陵東裾部の浮遺跡や辻遺跡では、包含層中より中期中葉の遺物の出土が見られる。

(後期) 遺跡の分布は広がり、朝美澤遺跡からは壱棺墓や竪穴住居址などを検出している。弁天山丘陵の東麓緩斜面に位置する津田鳥越遺跡からは、竪穴住居址群などを検出したほか、多量の遺物が出土している。また、朝美遺跡、松環古照遺跡においても遺構や遺物を検出している。

古墳時代

古墳時代には、大峰ヶ台や岩子山、弁天山などの各丘陵において多数の古墳が確認されている。

古墳時代初頭では、宮前川下流の宮前川北齊院遺跡から焼失住居址を含む竪穴住居址群が検出されている。また、巨木のクスノキ周辺(直径20m)からは古墳時代初頭の土器などが多量に出土している。この他に宮前川周辺の遺跡群からは、弥生時代末～古墳時代初頭にかけての遺物が多量に出土しており、それらの中には骨角器や土占に使用された鹿の肩胛骨、注口土器、動物型土製品、絵画土器などがある。さらに山陰系土器や畿内系土器等の外系土器も出土しており、当時の流通・交易の経路を考える上で貴重な資料の出土がみられる。

前期古墳は、大峰ヶ台丘陵ノ北西尾根部に朝口谷2号墳がある。主体部内からは2面の舶載鏡と40点を越える銅鉄・鉄のほか直刀・ガラス玉などが出土し、墳兵くびれ部からは壺形土器が出土している。

中期末から後期にかけては、各丘陵に群集墳が出現する。大峰ヶ台丘陵には客谷古墳群が、岩子山丘陵には岩子山古墳群、齊院茶臼山古墳、御産所11号墳、御産所権現山1号墳があり、

弁天山丘陵には弁天山古墳群がある。このうち弁天山古墳群の中には前期古墳と思われる弁天山0号墳がある。

古墳以外には、古照遺跡や松塚古照遺跡、古照ゴウラ遺跡からは古墳時代の土器が出土している。また、大峰ヶ台丘陵の東側、宮前川左岸にある辻町遺跡からは後期の祭祀関連遺物が出土し、同丘陵東麓の緩斜面にある辻遺跡2次調査、松塚大峰ヶ台遺跡からは掘立柱建物跡が検出されている。

中・近世

中世の遺跡は比較的多く、古照遺跡及び同2～5次調査では包含層中より多数の中世土器の出上がある。澤遺跡では平安時代の掘立柱建物跡が検出され、古照遺跡の北、南江戸岡日遺跡からは平安時代から鎌倉時代の集落関連遺構と大量の土師器が出土している。また、北斎院地内遺跡では室町時代から江戸時代にかけての掘立柱建物跡や土坑墓を、南江戸桑田遺跡では江戸時代の桶棺墓が多数検出されている。

【参考文献】

- 梅本謙一・宮内慎一 1992 「朝美澤遺跡2次調査」「辻町遺跡」「朝美澤遺跡・辻町遺跡」。(財)松山市生涯学習振興財団 埋蔵文化財センター
- 栗田正芳編 1994 「古照遺跡7次調査地」松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団 埋蔵文化財センター
- 岡田敦彦編 1993 「一般国道196号松山環状線埋蔵文化財発掘調査報告書 I—松塚古照遺跡」。(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 松山市 1986 「松山市史料集第2巻 考古編II」松山市史編集委員会
- 愛媛県 1982 「愛媛県史—原始・古代I」愛媛県史編さん委員会
- 西尾寺則編 1986 「宮前川遺跡調査報告書」松山市教育委員会
- 栗田茂敏 1989 「大峰ヶ台遺跡」「辻遺跡」「客谷地区古墳群」松山市埋蔵文化財調査年報II 松山市教育委員会
- 松村 淳 1989 「辻遺跡」松山市埋蔵文化財調査年報II 松山市教育委員会
- 栗田正芳 1991 「辻遺跡2次調査」「松山市埋蔵文化財調査年報III」松山市教育委員会
- 栗田茂敏 1991 「御産所植根遺跡」「松山市埋蔵文化財調査年報III」松山市教育委員会
- 上田 真 編 1991 「南江戸岡日遺跡」松山市立埋蔵文化財センター
- 重松住久 1989 「南江戸桑田遺跡」松山市埋蔵文化財調査年報II 松山市教育委員会
- 梅本謙一・武正良浩 1993 「北斎院地内遺跡」「松山市埋蔵文化財調査年報V」。(財)松山市生涯学習振興財団 埋蔵文化財センター



第2図 周辺の遺跡分布図 (縮尺1/25,000)

- | | | |
|-------------|-------------|---------------|
| 1. 辻町遺跡1次 | 10. 花見山城跡 | 19. 御産所権現山1号墳 |
| 2. 松環美沢遺跡 | 11. 朝日谷2号墳 | 20. 北斎院地内1・2次 |
| 3. 新和園前遺跡 | 12. 客谷古墳群 | 21. 津田島林遺跡 |
| 4. 朝美澤遺跡2次 | 13. 大宝寺 | 22. 齊院岡山遺跡 |
| 5. 澤遺跡 | 14. 古畑ゴウラ遺跡 | 23. 宮前川北斎院遺跡 |
| 6. 辻遺跡2次 | 15. 古畑遺跡 | 24. 宮前川別府遺跡 |
| 7. 松環大崎ヶ台遺跡 | 16. 齊院茶臼山古墳 | 25. 宮前川二本柳遺跡 |
| 8. 辻遺跡 | 17. 岩子山古墳群 | 26. 野津子山遺跡 |
| 9. 大塚ヶ台遺跡 | 18. 御産所11号墳 | |

第Ⅲ章 調査の概要

1. 調査の経過

調査地の現況は休耕田となっており、確認調査の結果をもとに調査区及び、排土置き場の設定をし調査を行った。調査対象面積は2,223㎡、調査実施面積は約900㎡である。

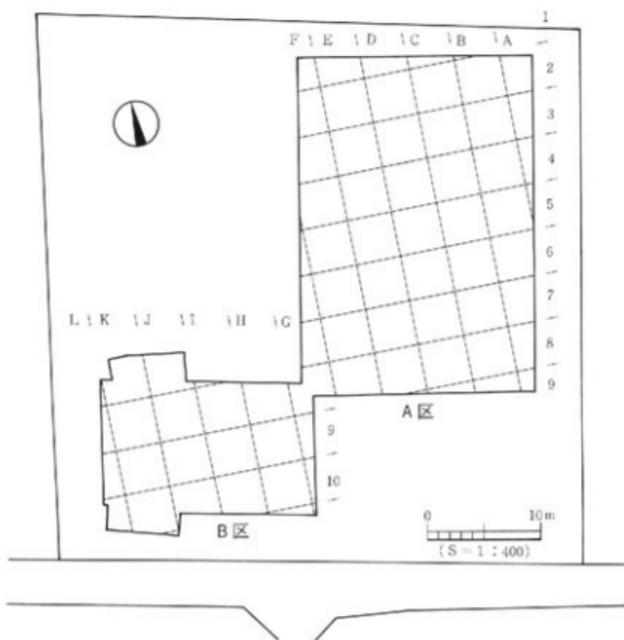
この年の梅雨は平年に比べ降雨多量で、調査区も4回ほど完全に水没し、現状復旧にも困難を極めた。しかも、6月末になると地下水位が上昇したため、A区西側とB区では湧水し、調査区壁面・ベルトの崩落など調査及び、調査工程に影響をきたした。以下、調査工程を略述する。

- 4月12日 調査地の縄張り及び、調査地の測量図作成作業を行う。その他、諸準備を行う。
- 4月19日 重機により第Ⅴ層上面～第Ⅴ層相当面まで掘削を開始する。
- 4月20日 調査地の壁面の精査。
- 4月26日 調査区内にグリッド杭打ちを行う。第Ⅴ層中世遺物包含層の掘り下げを行う。
- 4月27日 第Ⅵ層上面での遺構検出作業を行う。
- 5月12日 中世遺構完掘
- 5月13日 重機により第Ⅶ層下面まで掘り下げる。以下、人力により掘り下げを行う。この時点で須恵器、土師器の出土量が多くなる。第Ⅸ層上面に遺存する土器群の一部が出土。第Ⅵ、第Ⅶ層で掘り込み等の遺構の検出作業を行ったが、遺構は検出しなかった。
- 5月20日 第Ⅷ層を完掘し、第Ⅸ層の調査を行う。第Ⅸ層上面より土器群（SX1・SX2・SX3・SX4・SX7）や、焼土などを検出したため、遺構検出作業に入る。
- 6月4日 B区では第Ⅸ層上面で遺構は検出しなかったため、第Ⅸ層の掘り下げを行う。第Ⅸ層中で土器群（SX5・SX6）を検出。
- 6月12日 愛媛大学法文学部教授下條信行先生に調査指導を乞う。
- 6月24日 B区第Ⅸ層完掘。第Ⅹ層の調査を行う。
- 7月15日 B区第Ⅹ層完掘。第Ⅺ層上面の遺構検出作業を行う。竪穴式住居を検出する。竪穴式住居検出に伴い、調査区を拡張する。
- 7月23日 A区第Ⅸ層上面の調査を終了。A区北側より第Ⅸ層の掘り下げを行う。第Ⅹ層が存在しないため、第Ⅺ層上面での遺構検出作業を行う。
- 8月4日 B区竪穴式住居の調査を終了する。
- 8月6日 野外調査を終了する。

調査地位置図



第3図 調査地位置図 (S=1:2,500)



第4図 調査地区割り図

2. 層位

本調査地の基本層位は第Ⅰ層耕作土(15~20cm)、第Ⅱ層赤褐色土(3~8cm)、第Ⅲ層灰褐色土(10cm)、第Ⅳ層明黄褐色土、第Ⅴ層褐灰色土(3~10cm)、第Ⅵ層黄色土(10~30cm)、第Ⅶ層黄灰色土(5~20cm)、第Ⅷ層黄白色砂質土(3~10cm)、第Ⅸ層茶褐色土(5~20cm)、第Ⅹ層暗緑灰色土(15~20cm)、第Ⅺ層灰白色砂質土である。辻町遺跡1次調査地とはほぼ同様な堆積状況を示している。ただし、本調査地の南東部は耕作土直下に厚い砂礫層がみられ自然堤防状を示している。以下、各層について略述する。

第Ⅰ層：現代の耕作土である。

第Ⅱ層：水田床土である。

第Ⅲ層：時代は特定できないがⅢ耕作土と思われる。

第Ⅳ層：第Ⅲ層に伴う水田床土。

第Ⅴ層：遺物包含層である。A区では西側に、B区では全体に堆積している。青磁、瓦器、土師器の破片が出土している。

第Ⅵ層：上面で遺構を検出している。東から西へ徐々に厚くなって堆積して行く。遺物は土師器、須恵器の小片が数点出土しているが、図化できるものはない。調査地南東部では見られない。

第Ⅶ層：第Ⅵ層に比べ粒子が粗粒で、色調もやや暗くなる。堆積状況、遺物出土状況は第Ⅵ層と同様である。

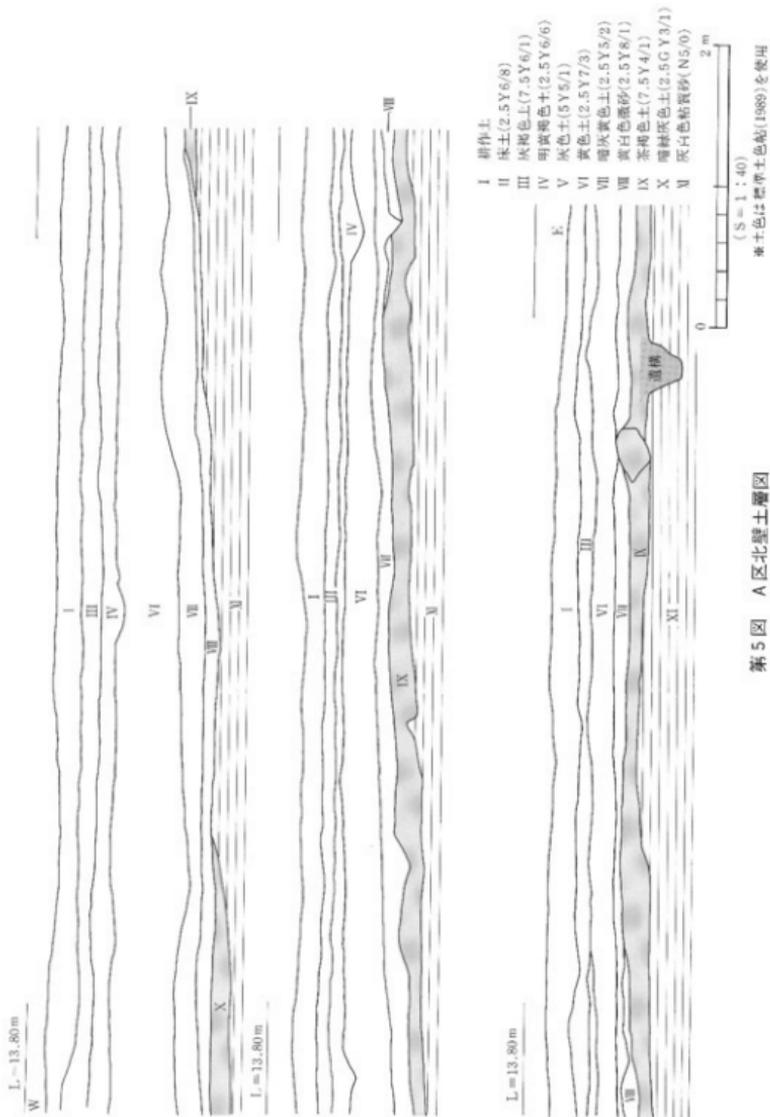
第Ⅷ層：調査地全体に薄く堆積する。西に行くほど粘質が強くなる。辻町遺跡1次調査のA層に対応するものと思われる。

第Ⅸ層：遺物包含層である。東から西へ徐々に厚く堆積し、西に行くにしたがって、粘性を強める。遺構は上面と中位部で検出する。辻町遺跡1次調査地の第Ⅷ層に対応するものと思われる。

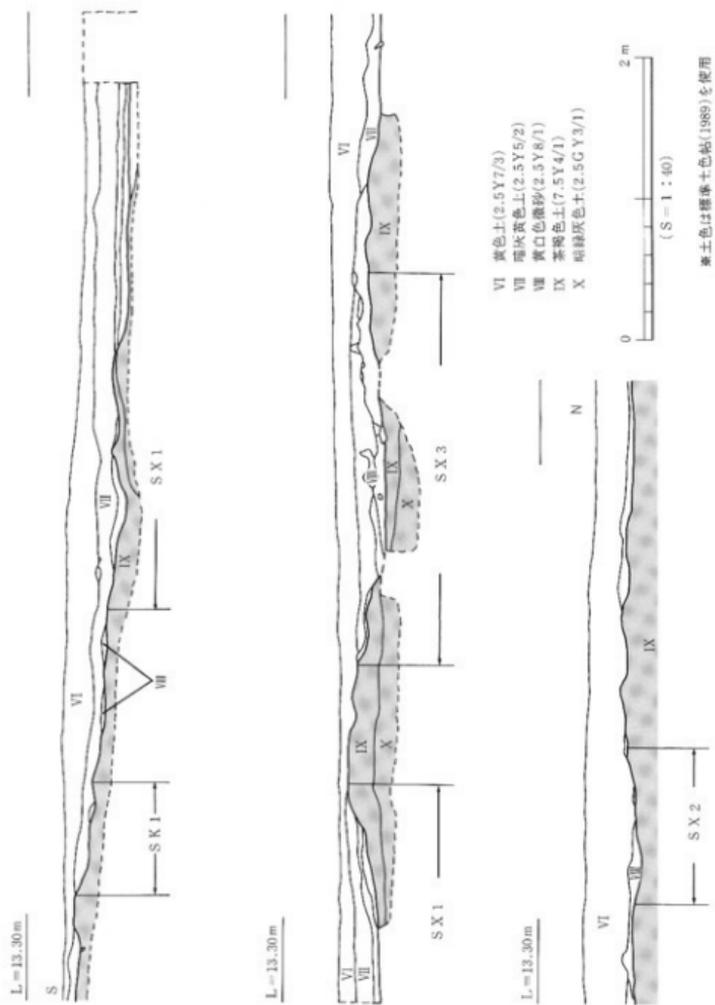
第Ⅹ層：遺物包含層である。A区中央部から始まり西へ堆積する。粘性が強く部分的に砂が混じる。遺物出土状況は第Ⅸ層に比べ須恵器の出土量が少なくなる。

第Ⅺ層：上面で遺構を検出している。層中からの遺物の出土は見られない。

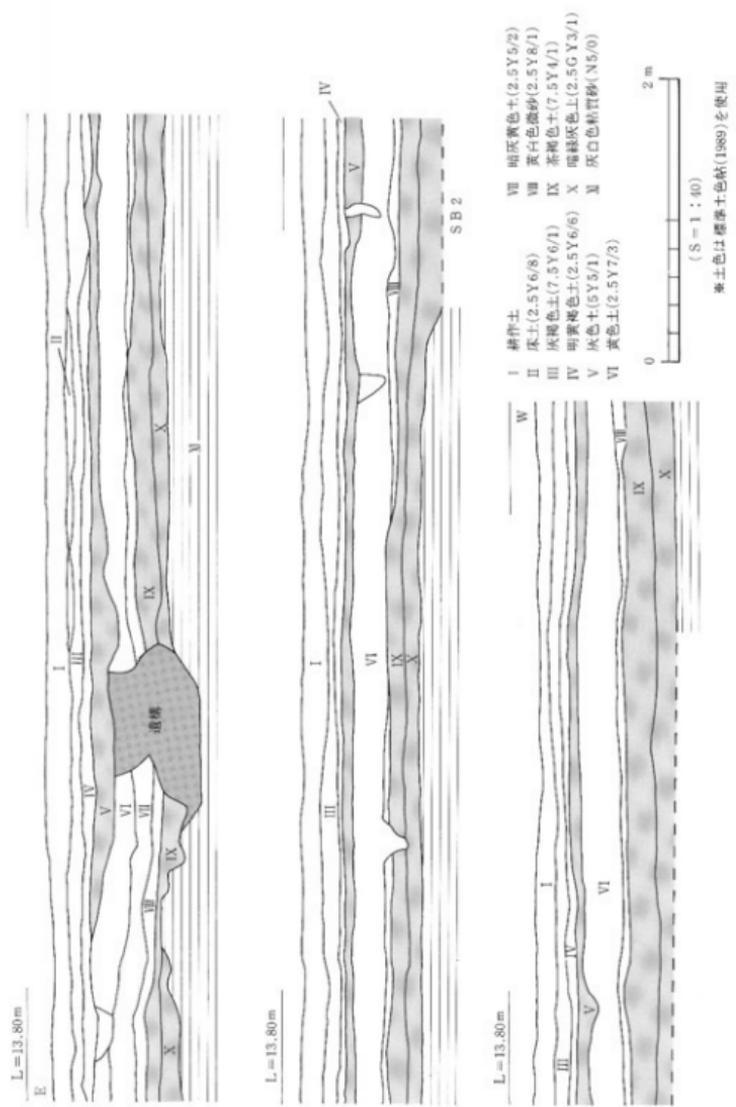
出土遺物より判断すると、第Ⅴ層は中世以後に、第Ⅵ、第Ⅶ層は古墳時代~中世、第Ⅷ、第Ⅸ、第Ⅹ層は古墳時代に堆積したものと判断される。第Ⅸ層上面と層中との出土遺物には時期差がさほど認められず、第Ⅸ層は短時間の堆積土壌であると考ええる。また、第Ⅸ層と第Ⅹ層の出土遺物には、その出土状況をも含め、多少の時間差が存在すると思われるものである。



第5図 A区北壁土層図



第6図 E・Fグリッド間南北ベルト土層図



第7図 B区北壁土層図

3. 遺構と遺物

〔1〕中世

(1) 第V層の調査

第V層上面での遺構は未検出である。第V層はB区の北東の一角を除いた全域においてみられる。土師器、瓦器、陶磁器、東播系の須恵器、土鍋を主とする土師器類や、石製品を含有する層厚約10cm前後の遺物包含層である。

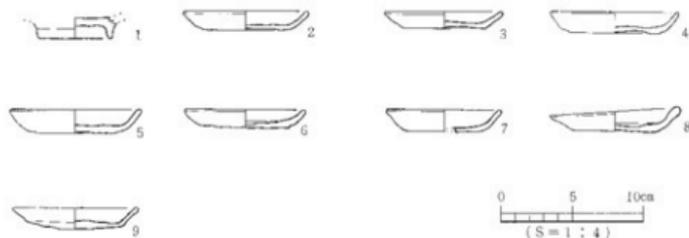
第V層出土遺物（第8図～第11図、図版15・16）

土師器塊（1） 1は断面四角形状の貼り付け輪高台で、土師器塊の高台としては高めの高台である。

土師器皿（2～8） 2～8は底部が回転糸切りによる切り離し技法が使われている。8は全体が煤けているが、特に内面の煤けが強いことから灯明皿が考えられる。6は底部に板圧痕がみられる。7は摩滅により、底部切り離し技法は不明である。9は底部から屈曲し口縁部が外反しており、底部に指頭痕がみられ、2次的な焼成がみられる。

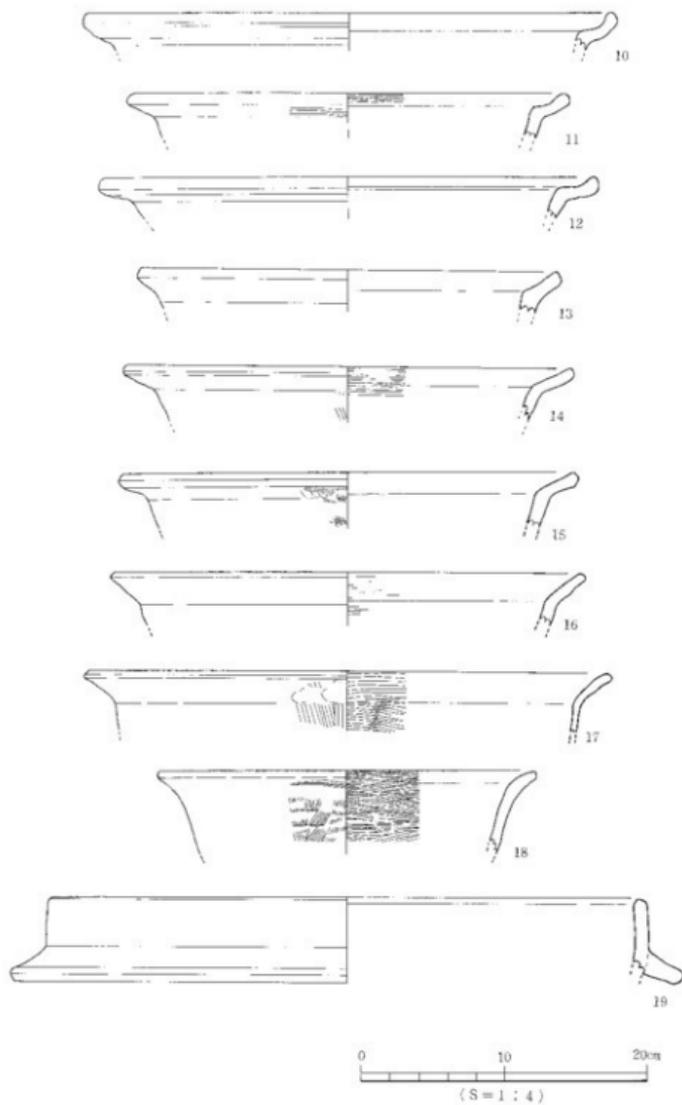
土師質土鍋（10～18） 10・11は口縁部が外傾したのち屈曲し外上方にたちあがる短い口縁部で、10は口縁端部が丸く、11は平らに仕上げられる。12は口縁部が外傾し、屈曲部より平らな面をなし口縁内面に稜がつき端部が軽く上方向に延び平らに仕上げられている。13・14は「く」字形の口縁部より直線的に外方向に延び口縁端部は平らな面をなす。15は「く」字形の口縁部より直線的に外方向に延び口縁端面に稜がつく。16・17は「く」字形の口縁部より僅かに外反しており、口縁端部ちかくで外面がやや肥厚されており端部は平らに仕上げられている。18は口縁部が外反し、端部を平らに仕上げている。

土師質羽釜（19） 19は直立気味の口縁部より下がった部位に垂れ気味の鈎が貼り付けられている。



第8図 B区第V層出土遺物実測図①

遺構と遺物



第9図 B区第V層出土遺物実測図②

調査の概要

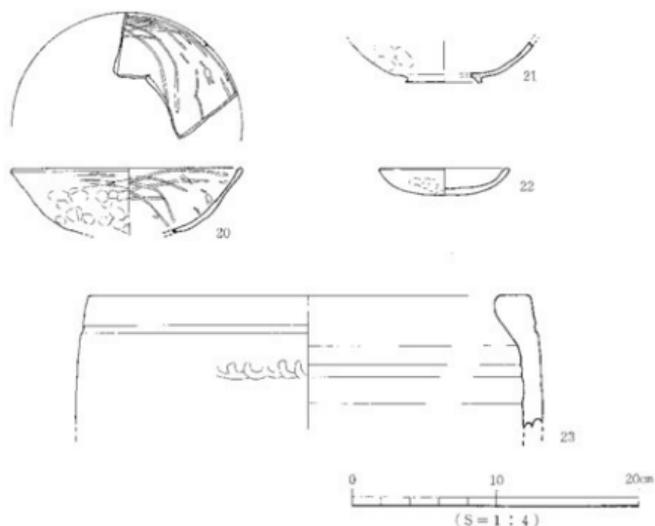
瓦器 (20・21・22) 20は体部が内湾気味に立ち上がっており、外面口縁部付近にへら磨き、内面にへら磨きが施されている。底部は欠損しているが、21は断面進台形状の高台が外方向に張り出しており、内湾する体部に指頭痕がみられる。22は小型の皿で底部から口縁部にかけて、屈曲がなく一定の湾曲を示しており体部から底部にかけて指頭痕がみられる。

瓦器火鉢 (23) 23は瓦質の火鉢の口縁部付近である。口縁部付近は肥厚され、端面は平らで水平な面をなしている。外面口縁部が斜めにカットされていて、その下に1条の凹線、その下方に薄く模様を巡らせており、内外面共に横ナデ調整を施している。

須恵器こね鉢 (24~26) 24は口縁断面は丸みのある四角形を呈している。25は口縁部外面に稜をもち、口縁部が上方に尖り気味である。26は口縁部外面に稜をもち、内面がやや凹んでおり口縁部が25より上方に延びる。24~26は束播系のもので、内外面とも横ナデが施されている。

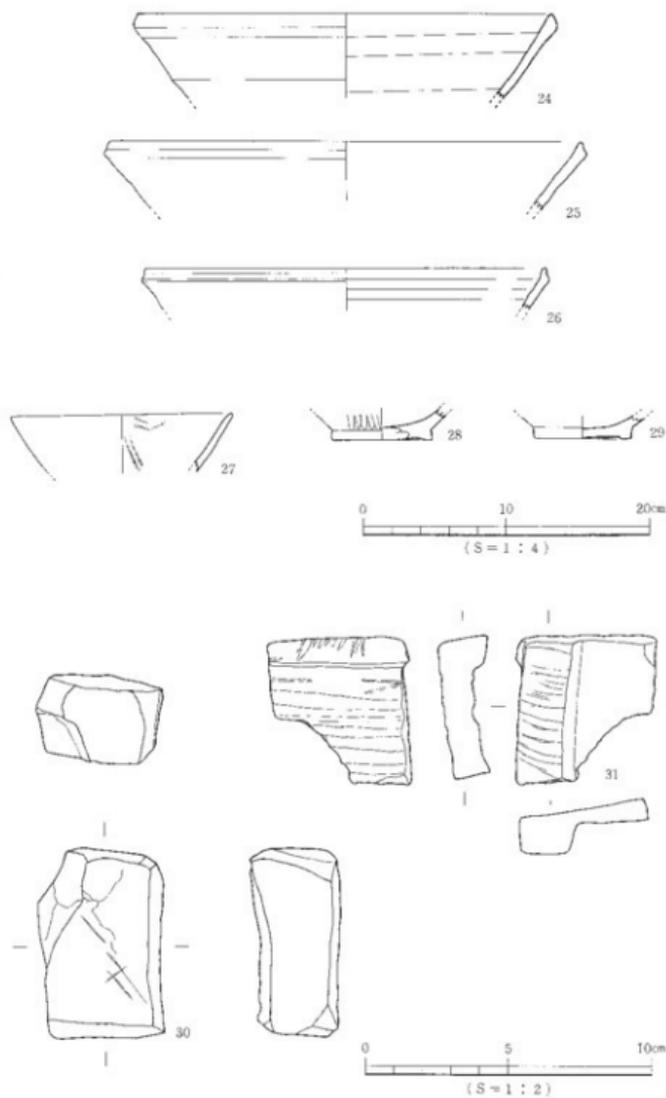
青磁碗 (27) 27は口縁部である。体部から口縁部にかけて直線的に延びる。体部内面に片彫りの文様が描かれている。内外面には灰オリーブ色の釉が施される。

白磁碗 (28・29) 28・29は底部である。28は高台の外面を直に、内面を斜めに削り出されたものである。体部外面下半は縦方向にへら削り調整をしている。内面見込み部に施釉が見られる。29は高台を外面を直に、内面を斜めに削り出されたものである。体部外面下半は



第10図 B区第V層出土遺物実測図③

遺構と遺物



第11圖 B区第V層出土遺物実測図④

回転へう削り調整をしている。内面見込み部に施釉が見られる。

石鍋 (31) 31は口縁部である。滑石製で、口縁端部は平らな面をなし、口縁～底部にかけて1条の凸帯が巡る。内面及び凸帯部が加工されていることより、石鍋を転用したことが考えられるが用途は不明である。

砥石 (30) 30は凝灰岩製の砥石であり、底面は平らで安定しており、湾曲した上面に斜め方向の使用痕がみられる。

(2) 第VI層の調査 (第12図、図版3-1・2)

第VI層上面において検出した遺構は、掘立柱建物1棟、土坑状遺構2基、柱穴状遺構38基、性格不明遺構3基、禽跡と考えられる浅い小溝群を検出した。

掘立柱建物跡

S B 0 1 (第13図、図版3-1)

A区での検出で調査区の西端南寄りのE-G・5～6グリッドに所在している。主軸方向がN-2°30'-Wで、2×3間の東西棟である。梁行4.3m、桁行7.4m、柱穴は円形と楕円形で直径0.2～0.72m、検出面よりの深さ0.13～0.47mを測る。平面形はP2・3は円形、P4～11は楕円形をしており、全柱穴とも埋土は灰色土で柱痕は確認されなかったが、柱痕と考えられる窪みが底面より検出された。出土遺物は柱穴P10において和泉型の瓦器椀や土鍋片を出土している。

S B 0 1 出土遺物 (第14図、図版17)

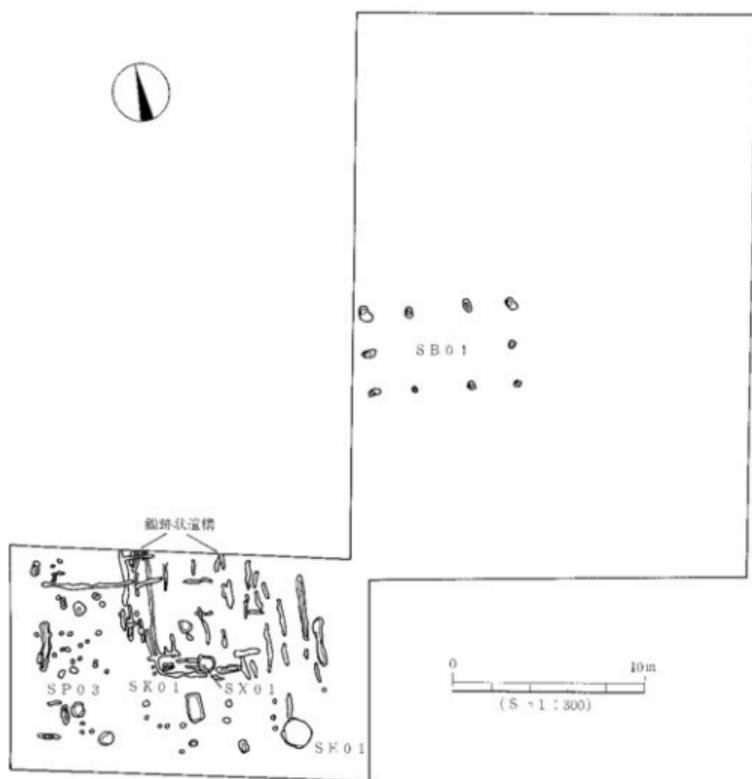
32はP10からの出土遺物である。高台の断面形状が三角形で、体部は内湾している。口縁部外面に施されている横ナデ調整が1/2を占めており下部は指頭痕がみられる。内面の調整は摩減の為、不明である。

土 坑

B区では土坑2基を検出した。そのうち1基は木棺墓である。

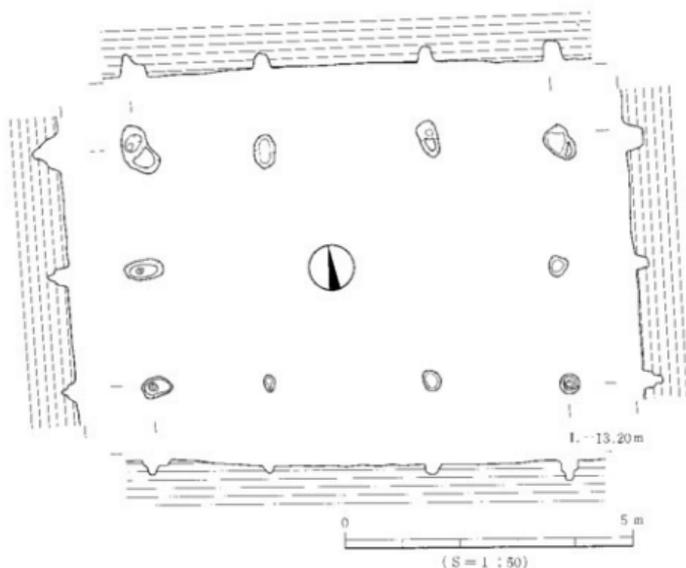
S K 0 1 木棺墓 (第15図、図版4-1)

I-J・9～10グリッドに所在し、長軸1.5m、短軸0.7m、検出面よりの深さ0.2mで、平面形は長方形を呈する木棺墓である。人骨、木棺とも遺存状況はあまり良くなく、僅かに残った頭蓋骨、脊椎、大腿骨、脛骨より横臥屈葬の東向き北枕が窺える。性別、年齢は不明であるが、骨の規模から成人が考えられる。木棺は底板が薄く残っていただけである。副葬品は、棺右下の足元付近より全長約25cmの刀子が1点出土したが、埋葬に伴う土器は出土していない。その他の遺物は、埋土中上層より流れ込んだと考えられる瓦器・土師器・白磁細片が出土している。

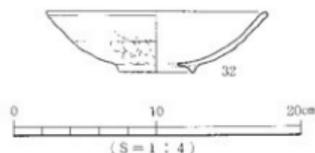


第12図 第VI層上面遺構配置図

調査の概要



第13図 A区SB0 | 測量図



第14図 A区SB0 | 出土遺物実測図

出土遺物 (第16図・第17図、図版17)

刀子 (33) 鹿角装の刀子であり、茎端部を欠くがほぼ完形に近い。残存全長23.4cm、刀身部長21.0cm、最大幅2.6cm、厚さ0.9cmを測る。

瓦器塊 (34) 和泉型の瓦器塊の口縁部である。口縁部は内湾しながら立ち上がり内外面に暗文が施され、外面には指頭痕がみられる。SK01上層での出土で埋葬に伴うものではないとみられる。

井戸跡

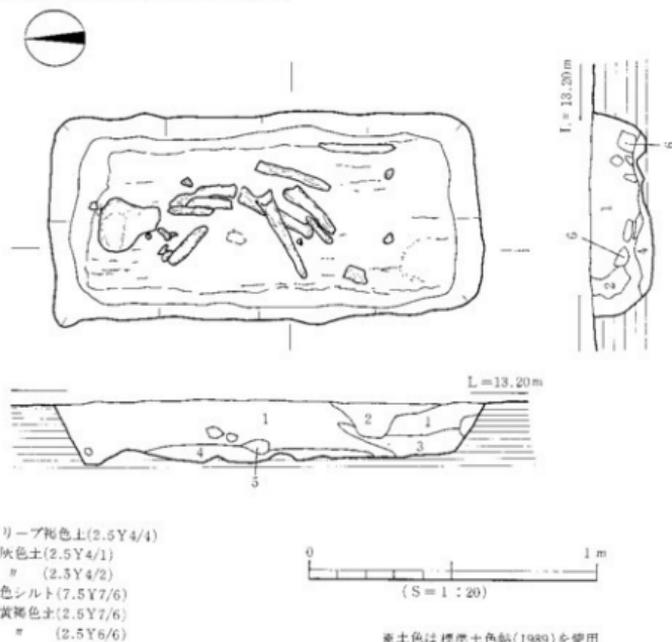
SE01 (第18図、図版4-2・5-1)

H・10グリッドに所在し、直径約1.5m、検出面よりの深さ0.95mを測る。不整円形の堀方で深鉢状の断面形をしており、ほぼ中央に曲物の井側を据えていた。曲物は2段現存して

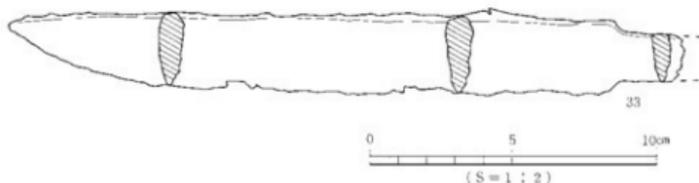
おり径0.4m×深さ0.25mを測る。灰黄褐色土の埋土中より多数の土師器片に混じり瓦器片・白磁片が出土している。

出土遺物 (第19図・20図、図版17、18)

土師器環 (35、36) 35は浅橙色をしており、平底の底部から内湾気味に立ち上がる。表面摩滅により調整は不明である。36は乳白色をしており、平底の底部から口縁部が外反する。底部の切り離し技法は回転糸切りである。

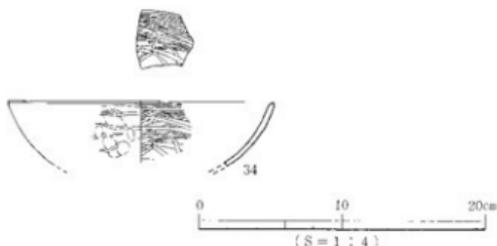


第15図 B区SK01測量図



第16図 B区SK01出土遺物実測図①

調査の概要



第17図 B区SK01出土遺物実測図②

瓦器塊 (37~42) 37・38は和泉製の瓦器塊である。形骸化した断面三角形の高台を持ち、体部から口縁部にかけ内湾しながら立ち上がる。表面が摩滅しているが、内面に微かに暗文がみられる。39は内湾気味に立ち上がり、内面に螺旋状の暗文がみられる。40は内湾気味に立ち上がった胴部外面に指頭痕がみられる。41・42は断面逆台形状の高台をもつ。

木製品 (43~47) 43・44は井戸側板の一部と考えられる薄い板で征目材を削り出しており、44は片端が削り出されている。45は木鋸または、つちのことみられる。丸木の両端を切断し、中央部を両方から削り込んでいる。半面に煤けが見られる。46は枝に切断痕があるが用途は不明である。47は征目材を削り出しており、上下端は斜めに切断されている。下端断面は両面から削られ尖っている。右側面に逆台形状の面取りが施されている。

その他の遺構・遺物

柱穴、性格不明遺構、鋤跡状遺構などを検出している。以下、主要なものについて記す。

柱穴SP03

K9グリッドに所在し、長軸0.72m、短軸0.6mで検出面よりの深さ0.53mを測り、平面形は楕円形を呈している。褐灰色土の埋土より、土師器片が出土している。

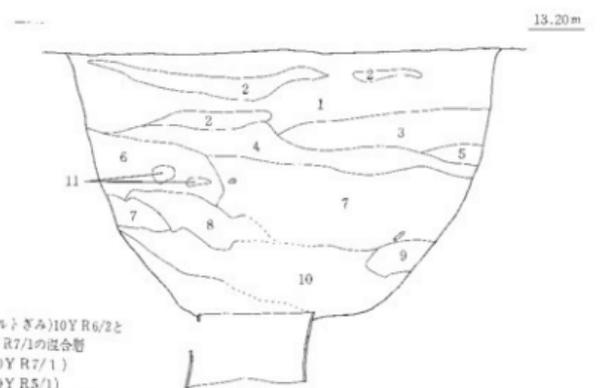
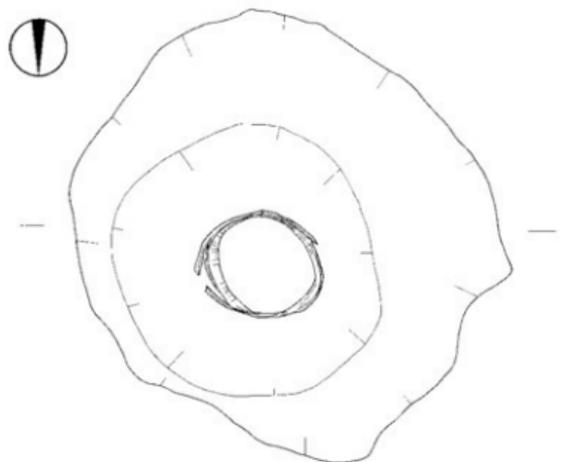
性格不明遺構SX01 (図版5-1)

I・9グリッドに所在し、長軸0.85m、短軸0.85m、検出面よりの深さ0.04mを測り、平面形は楕円形を呈しており、粘土の小さな塊を密集した状態で検出した。灰色土の埋土より、瓦器塊片が僅かに出土しただけの時期、性格とも不明の遺構である。

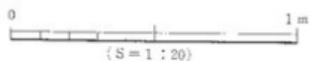
鋤跡状遺構

鋤跡と考えられる小溝群は、調査区北側に集中しており、南北・東西方向にみられる。残存する規模は、長さ0.8m以上、幅0.1m~0.3m、検出面からの深さ1~3cmを測り、東西・南北の鋤跡は、埋土・遺物・切り合いから、耕作された時期に差があまり無いと考えられる。南北に延びる溝は磁北~N-3°-E、東西に延びる溝は、E-15°-S~E-10°-N とほぼ直交している。埋土の灰色~灰オリーブ色土中より土師器・白磁・瓦器の細片が出土して

遺構と遺物

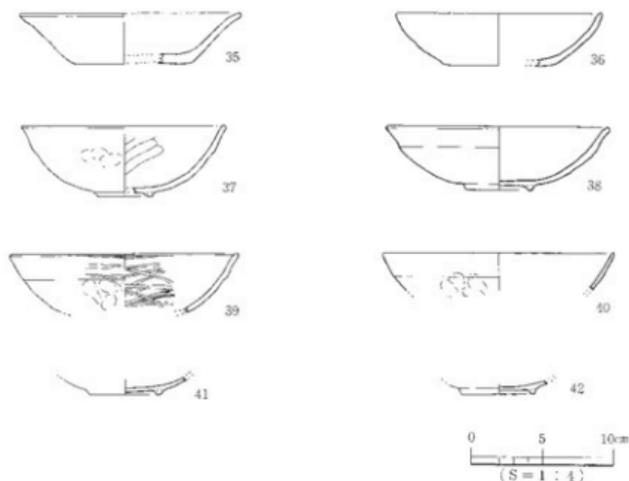


1. 灰青色(シルトさみ)10Y R6/2と
灰白色砂(10Y R7/1)の混合層
2. 灰白色砂(10Y R7/1)
3. 褐灰色砂(10Y R5/1)
4. 褐灰色シルト(7.5Y R4/1)
5. 黄灰色シルト(2.5Y 4/1)
6. 褐灰色砂質土(10Y R4/1)
7. 褐灰色シルト(10Y R4/1)
8. 灰白色粘質土(10Y R6/1)
9. 黄灰色粘質土(2.5Y 6/1)
10. 暗青灰色粘土10B G4/1と明褐色粘土7.5Y R6/6の混合層
11. 明褐色シルト(7.5Y R5/6)



*土色は標準土色帖(1989)を使用

第18図 B区SE01測量図

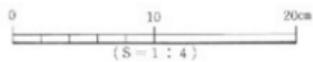
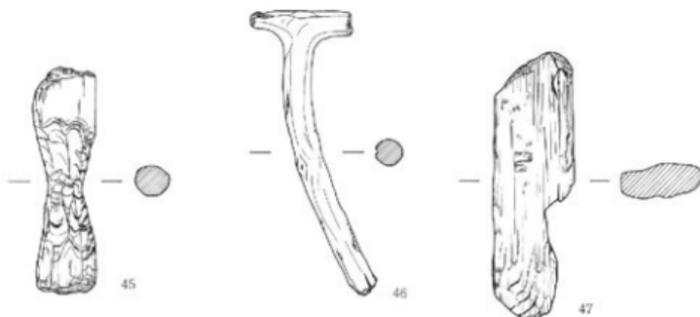
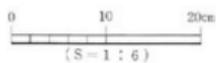
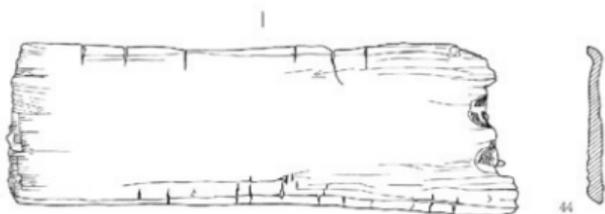


第19図 B区SE0I出土遺物実測図①

いる。

【参考文献】

- 田 嶋・横田賢次郎 「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』 1978
- 広島県 「草戸千軒町遺跡 第28・29次発掘調査概要」広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1980
- 栗田正芳 編 「古郡遺跡—第7次調査—」
- 梅木謙・真木 潔 「辻町遺跡」「朝美浮遺跡・辻町遺跡」(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1992
- 岡田敏彦 「松環古銅遺跡」「一般国道196号松山環状線埋蔵文化財発掘調査報告書1」愛媛県埋蔵文化財調査センター 1993
- 宮本一夫 編 「唐子・徳味遺跡の調査」愛媛大学埋蔵文化財研究室、1989
- 上田 真・水本完児 「南江戸瀬目遺跡」松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1992



第20図 B区SE01出土遺物実測図②

〔2〕古墳時代

(1) 第Ⅸ層上面の調査 (第21図、図版6-1)

第Ⅸ層は調査地の南東部と北西部を除く全域に見られる遺物包含層である。上面と層中で遺構を検出している。上面では祭祀跡と思われる遺構や土器群(SX1、2、3、4、7)の能、土坑、柱穴、溝状遺構、焼土跡を、層中では祭祀跡と思われる土器群(SX5、6)を検出している。

祭祀跡

SX1 (第22図、図版6-2・7-1)

Ⅸ層上面での検出である。東西7m×南北10mの範囲で、長軸6.5m、短軸で5.3mのやや不整形の窪地とその南側に広がるやや南北に長い土器群で構成される。窪地は全体的に炭化物が薄く広がり、土師器、須恵器が出土する他、窪地内南側には、木片(燃え残り)や、焦土、焦土粒、焼けた白い小さな竹片が散在する。竹片について確認できるものは、タイ類の上顎骨(図版20)である。その他、小動物とみられる骨片も認められる。また、窪地の南にある土器群は何ら掘り方を伴わず、土師器、須恵器で構成される。土師器の遺存は比較的悪く、器種は甕、壺、高坏、埴が主体である。須恵器は蓋坏、高坏、甕、壺、甍が出土しているが、圧倒的に蓋坏、高坏の出土が多いものである。

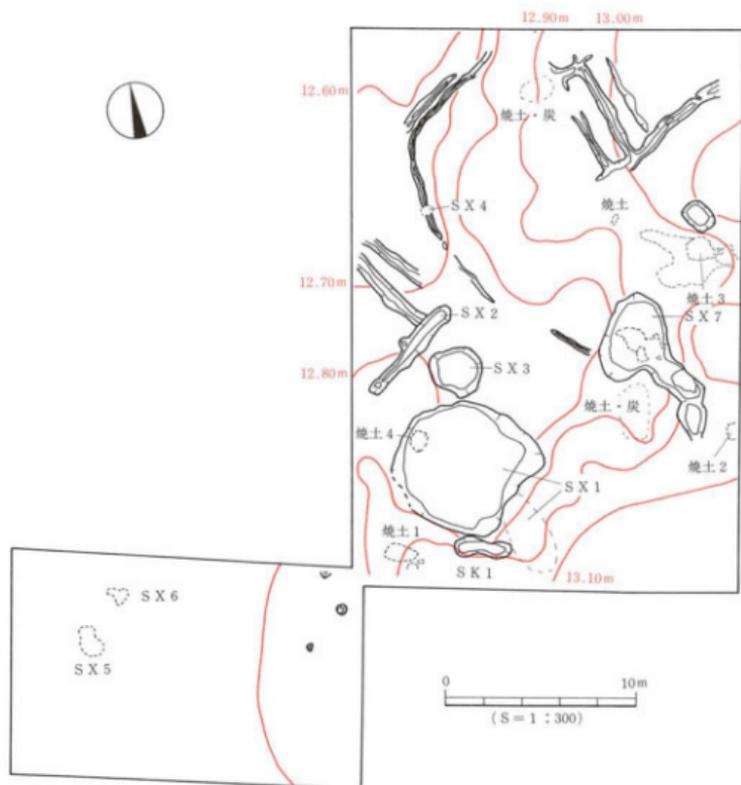
SX1の窪地部は、人為的に掘削されたものなのか、自然的な窪地なのか判然としなかった。窪地から出土した須恵器と、その南側に広がる土師器から出土の須恵器は形態的に時期差があるとは思われず、層位的にも一連のつながりをもつものと判断し、ここでは窪地と土器群を含めSX1とした。また、窪地部については焼失住居の可能性も考えられたが、窪地内には炭化物・焦土があるにもかかわらず出土遺物には土師器の甕を除いて2次の焼成を受けている様子は見られず、土層観察からも竪穴住居とは思われなかった。

出土遺物 (第23~27図、図版19~25)

土師器

甕形土器(48-50) 48は破片のため反転復元したものである。口縁部はゆるやかに外反し端部は丸くおさめる。体部外面はハケ目、内面はヘラケズリののちナデ調整を施す。口縁部直下の体部層にヘラ状工具により長さ1.8cm~2.0cmの縦位の2条の沈線を平行に施す。49は推定口径10.8cm、残高5.0cmの破片で口縁部は外反し、端部はまるくおさめている。内外面ともナデ調整である。50は丸底の底部で胴部は球形を呈し、口縁部は外傾し外上方に開き口縁端部は丸くおさめる。内外面ともナデ調整である。51は口径17.8cm、残高24.1cmで、口縁部は肩の張った体部から屈曲し外上方に直線的に伸びて、口縁端部は内傾する面をなす。胴部外面はハケ目調整で、内面は指頭痕が看取される。外面には煤が付着している。

壺形土器(52-53) 52は口径8.0cm、器高11.8cmである。胴部は球形を呈し、口縁部は



第21図 第Ⅰ層上面～中層遺構配置図

わずかに内湾気味にたちあがったのちやや外反する。外面はハケ目のちナデ、内面はナデ調整である。53は口径7.9cm、器高11.2cmを測る。胴部は球形を呈し、底部の器壁は厚い。口縁部はやや内湾してたちあがったのち、口縁端近くでやや外反して端部は先細る。外面はハケ目調整後ナデ、内面はナデ調整されるが、指頭痕、輪積み痕を明瞭に残している。

埴形土器(54~56) 54は小片で反転復元したものである。推定口径17.3cm、11.2cmで大形品である。底部から内湾してたちあがったのち上方に伸びる口縁部で、端部は丸くおさめる。外面はハケのちナデ、内面はナデ調整である。55は口径12.3cmで、底部外面には脚が付いていたと思われる円形の痕跡が残る。底部から内湾してたちあがったのち口縁端近くで稜をなし内傾する口縁部を有する。調整は摩滅のため不明である。56は口径11.4cm、器高5.0cmで、平底の底部から内湾してたちあがった後、外反する口縁部で端部は丸くおさまる。内外面ともナデ調整である。

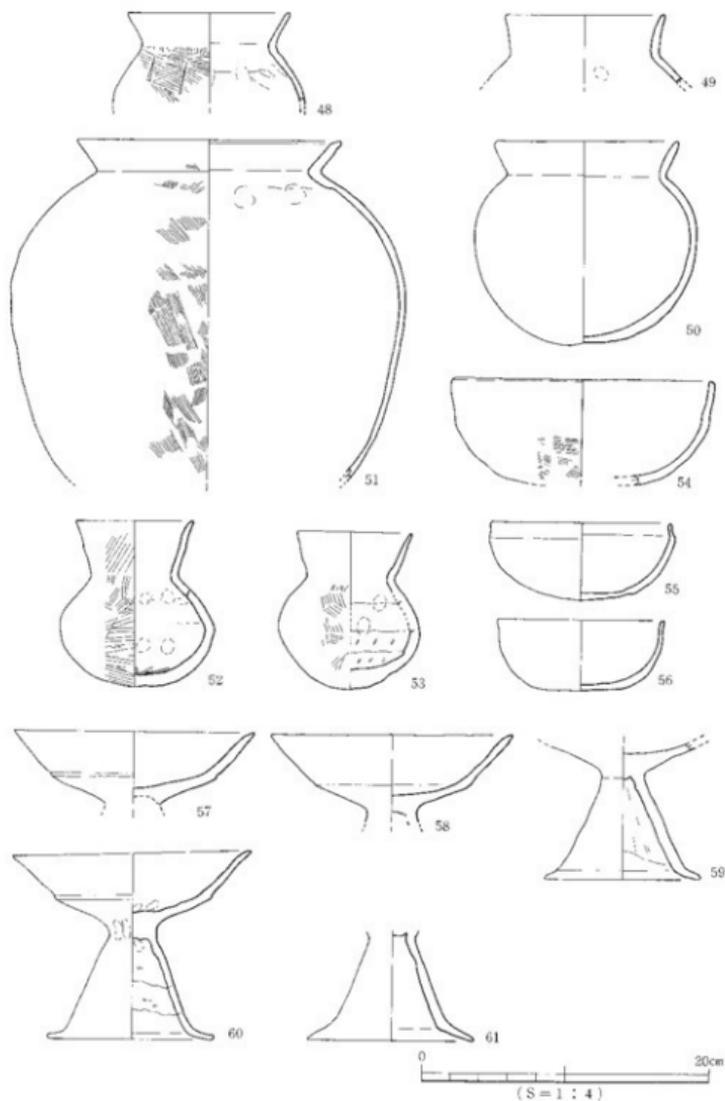
高坏形土器(57~61) 57は口径16.4cm、残高5.1cmで、坏屈曲部は段をもつ。坏部は内湾気味に外上方にたちあがったのち口縁端近くで外反し端部は先細る。調整は摩滅のため不明である。脚は欠失している。58は口径16.6cm、残高6.3cmである。坏屈曲部は不明瞭ながらもわずかに段をなす。口縁部は外上方に開き、端部は先細る。調整は摩滅のため不明である。59は脚部底径10.5cmで、柱部は円錐形で裾部は屈折してひろく。脚柱内面に粘土の巻き上げ痕を残す。60は口径16.5cm、脚底径11.6cm、器高13.4cmで、坏部は外上方にたちあがり、口縁端近くでやや外反する。坏屈曲部は段をなす。脚は円錐形で、裾部は屈曲してひろく。脚柱内面はヘラケズリを施すが粘土の巻き上げ痕を明瞭に残している。61は脚底径11.4cmで、脚柱は内湾気味に開き、屈折して裾部へとつづく。

須恵器

坏蓋(62~70) 62は口径11.3cm、器高4.2cmである。やや偏平な天井部で、稜は短く丸い。天井部は時計回りの回転ヘラケズリ。63は口径11.6cm、器高4.4cmで天井部は丸く、稜は短く鈍い。天井部1/2は反時計回りの回転ヘラケズリ、そのほかは内外面とも回転ナデ調整である。64は口径11.8cmで天井部は丸味を帯び、稜はシャープさに欠ける。天井部は時計回りのヘラケズリ。65は口径11.5cm、器高4.4cmである。天井部は丸味を帯び、稜はシャープさに欠ける。天井部は反時計回りの回転ヘラケズリ。66は口径11.9cm、器高4.5cmで、天井部はやや丸く、稜は短い。口縁端部は段をなす。天井部の回転ヘラケズリは反時計回り。67は口径11.9cm、器高4.5cmである。偏平な天井部で稜は短い。口縁端部は凹面をなす。天井部の回転ヘラケズリは時計回り。68~70は口径が12cmを超える。68は口径12.7cm、残高4.1cmである。天井部は偏平で稜は短く丸い。口縁部はやや外に開く。調整は天井部の1/3を時計回りの回転ヘラケズリ、そのほかは内外面とも回転ナデ調整である。69は口径12.2cm、器高5.4cmで、天井部は丸く高い。稜は短く鈍い。調整は天井部の1/2を時計回りの回転ヘラケズリ、そのほかは内外面とも回転ナデ調整である。70はSX1出土の坏蓋の中で最大

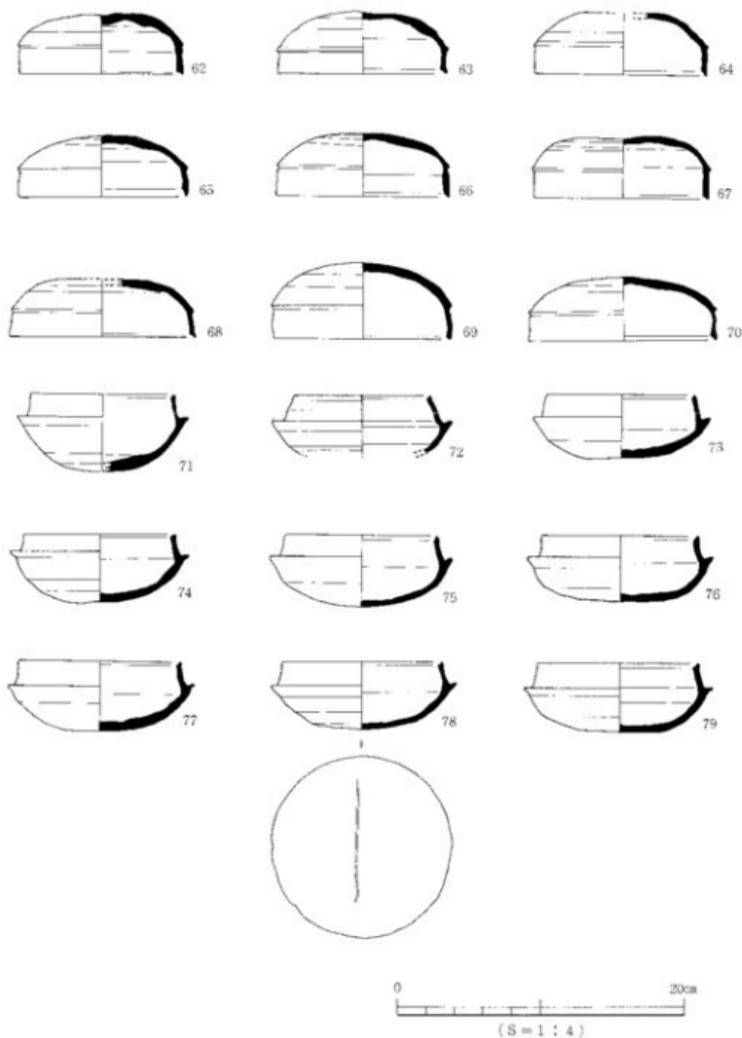


第22図 SX I 測量図



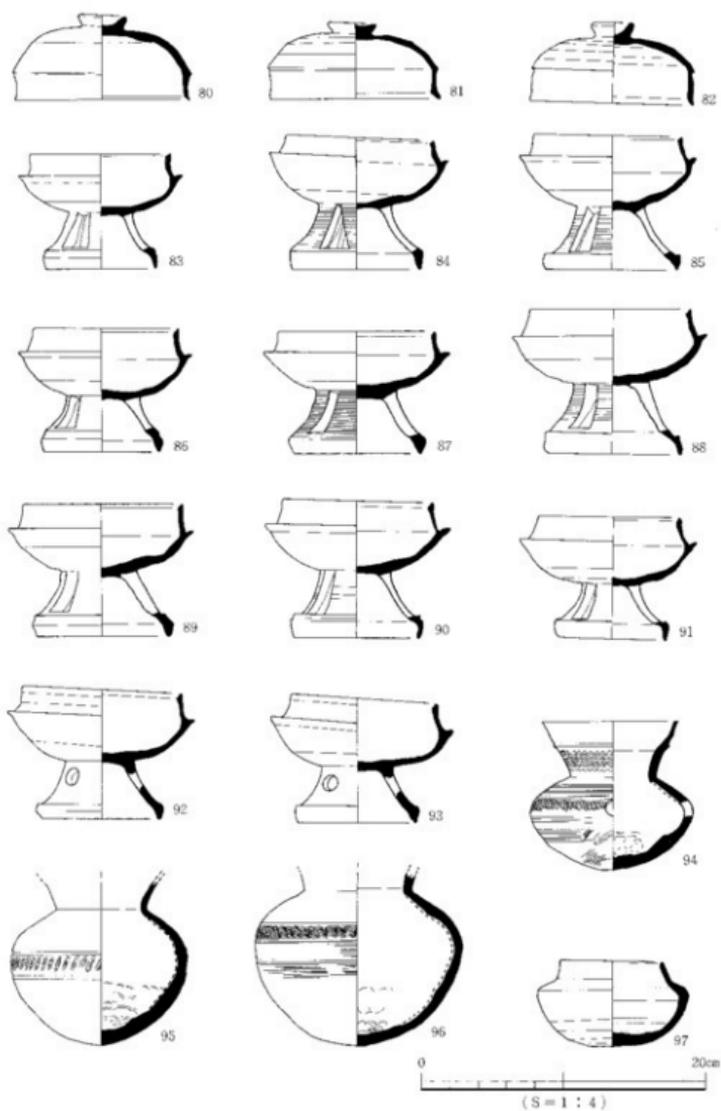
第23図 S X I 出土遺物実測図①

調査の概要



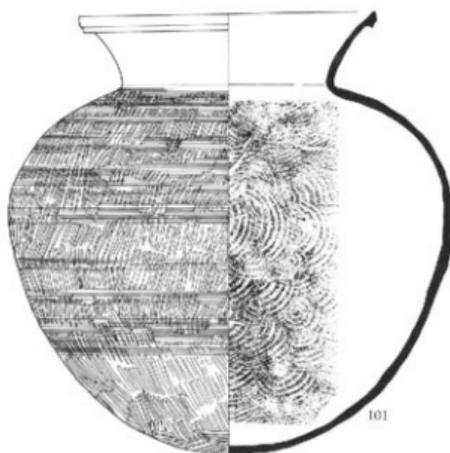
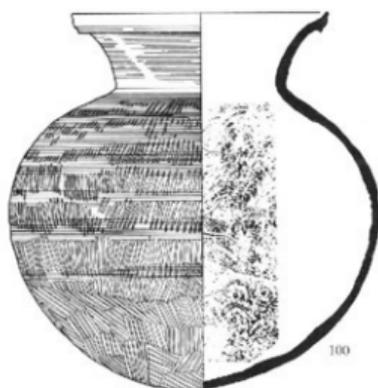
第24図 S X I 出土遺物実測図②

遺構と遺物

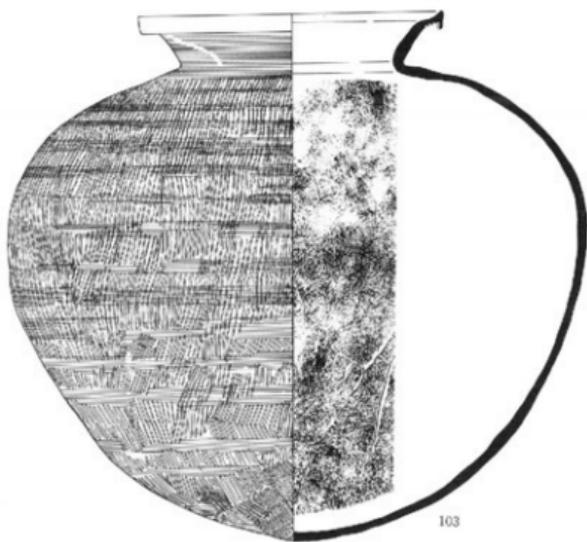
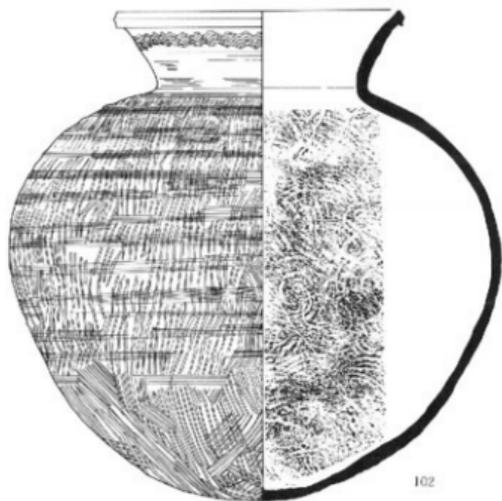


第25図 S X I 出土遺物実測図③

調査の概要



第26図 S X I 出土遺物実測図④



(S = 1 : 4)

第27図 S X I 出土遺物実測図⑤

口径を測る。口径12.8cm、器高4.5cmで、稜は短く外方へのびる。口縁端部は凹面をなす。

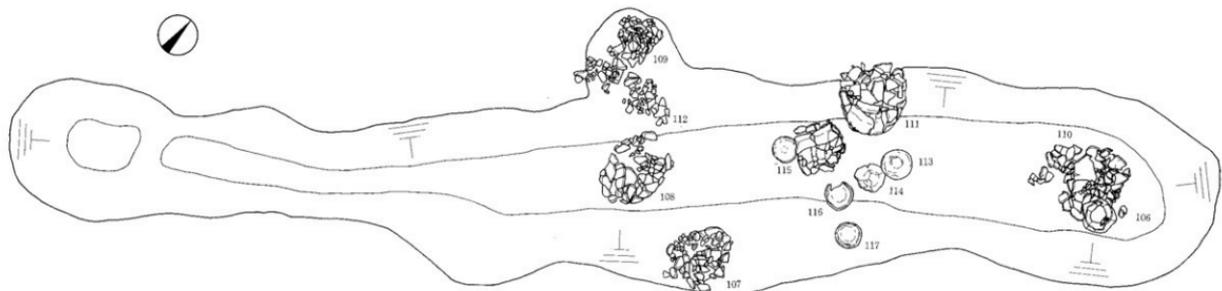
坏身(71~79) 71~73は口径10cm以下である。71は口径9.8cm、器高5.5cmで底部は深く丸い。たちあがりは内傾し端部は面をなす。調整は底部外面1/2を反時計回りの回転ヘラケズリ、そのほかは回転ナデ調整である。72は口径9.3cmで、底部は欠失している。たちあがりは内傾し、端部は段をなす。上外方にのびる。底部外面の回転ヘラケズリの方向は時計回りである。73は口径10.0cm、器高4.5cmで、たちあがりは内傾し、端部は凹面をなす。坏底部はやや平底を呈する。調整は底部外面2/3を反時計回りの回転ヘラケズリ、そのほかは回転ナデ調整である。74は口径10.4cm、器高4.9cmでたちあがりは内傾し口縁端近くで直立し端部はわずかな段をなす。受部は水平にのびる。調整は底部外面が反時計回りの回転ヘラケズリ、そのほかは回転ナデ調整である。75は口径10.3cm、器高5.1cmで底部は丸い。たちあがりは内傾し口縁端近くで直立し、端部は凹面をなす。調整は底部外面を反時計回りの回転ヘラケズリ、そのほかは回転ナデ調整である。76は口径10.6cm、器高4.7cmを測る。底部はやや偏平で、器壁が厚い。たちあがりは内傾したのち直立し、端部は段をなす。調整は底部外面3/4を時計回りの回転ヘラケズリ、そのほかは回転ナデ調整である。77~79は口径11.0cm以上である。77は口径11.1cm、器高5.0cmで、底部は丸い。たちあがりは内傾し、端部は凹面をなして、受部は上外方にのびる。調整は底部外面を反時計回りの回転ヘラケズリ、そのほかは回転ナデ調整である。78は口径11.0cm、器高4.8cmで、底部は丸い。たちあがりは内傾し、端部は凹面をなす。受部は上外方にのびる。調整は底部外面を反時計回りの回転ヘラケズリ、そのほかは回転ナデ調整である。79は口径11.1cm、器高4.8cmで、底部は平底でたちあがりは内傾し口縁端近くで外反し端部は凹面をなす。受部は水平にのびる。調整は底部外面を反時計回りの回転ヘラケズリ、そのほかは回転ナデ調整である。

蓋(80~82) 高坏の蓋である。80は口径12.2cm、器高6.1cmを測り、天井部が丸く器高も高い。稜は突出せず、口縁部は外反して開く。つまみは中央部がくぼむ。81は口径11.8cm、器高5.4cmで天井部は丸く、稜は短く鈍い。つまみ中央部は平坦である。82は口径11.6cm、器高5.8cmで、天井部は丸く、つまみ中央部はくぼむ。

高坏(83~93) たちあがり端部は、凹面もしくは段をなし、端部を丸くおさめるものは見られない。90のたちあがり基部は非常に細い。受部は92が水平にのびる以外は、全て上外方にのびており、底部は比較的丸いものばかりである。法量は口径9.7cm~11.1cm、器高8.1cm~10.3cmを測り、坏部は坏身と同様な数値を測る。84、85、87、88、90の脚柱はカキ目調整が見られ、83~91の脚柱には三方向のスカシ、92、93は円形のスカシを三方向に施している。

直口壺(95、96) 95の体部は円形で底部は尖り気味。体部中位よりやや上に2本の沈線で区画したのち刺突文を施す。96は体部中位より上に沈線を巡らし直下に波状文を施す。体部下半にカキ目調整を残す。体部上半には釉が付着する。

短頸壺(97) 口縁部は内傾し、端部は丸くおさめる。調整は底部外面を回転ヘラケズリ



第28图 S X 2 测量图

し、体部中央から口縁端部にかけて回転ナデである。

甗(94) 頸部に波状文を巡らせ、口縁端部はやや内傾する面をなす。体部は算盤状を呈し、上半にカキ目調整を施しその直下に沈線を巡らせ刺突文を施し、刺突文上に円孔を穿つ。

甗(98~103) 98は小片である。口頸部は外反して上方にのび、中位に1条の凸帯を有し、さらに外方へのびる。凸帯の上部と下部に波状文を施す。99は口径15.4cmである。口縁部は外反し、端部は上下に拡張する。100は口径18.0cm、器高26.6cmを測り、胴部最大径を中位にもつ。内面は半スリケシを行っている。101は口径20.3cm、器高31.3cmである。体部内面は明瞭に同心円文を残す。102は口径19.2cm、器高31.3cmで口縁部は外反し、外面に波状文を巡らせ口縁端部は上下に拡張する。胴部最大径は、胴部中位にもつ。103は口径20.8cm、器高37.3cmで、口縁部は外反し端部は下方に拡張する。胴部最大径を中位上半にもち、内面は丁寧なスリケシを行っている。

SX2(第28図、図版7-2・8-1)

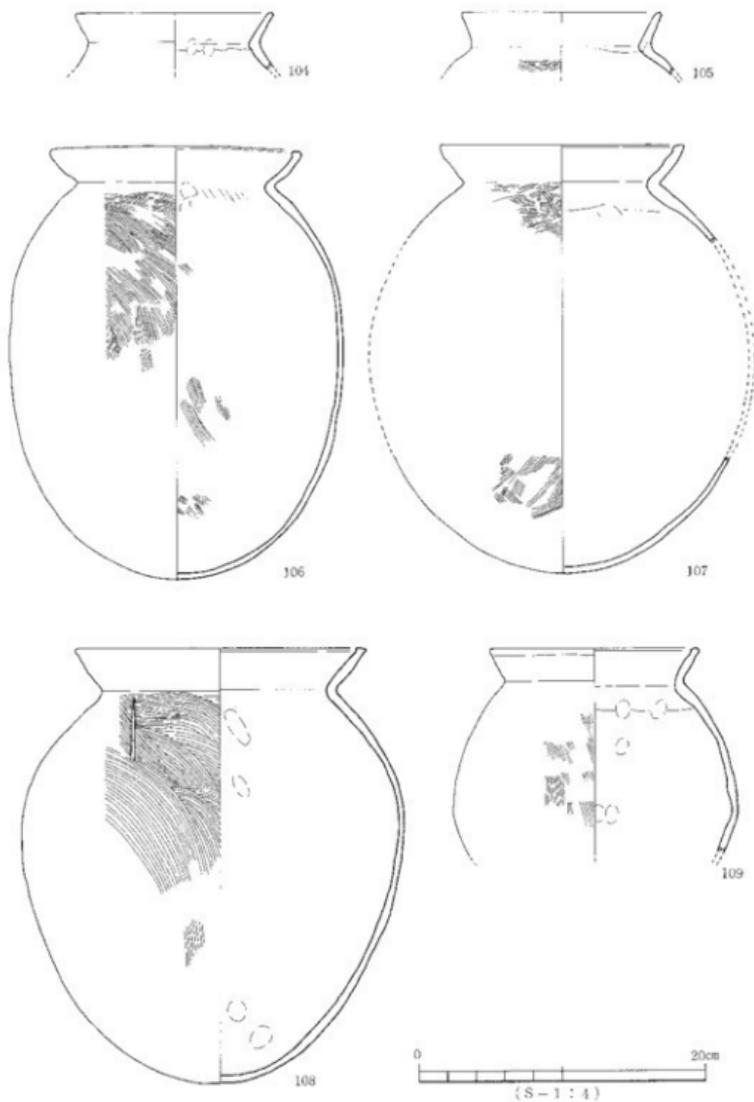
IX層上面での検出である。SX1の窪地から北へ4~5mの位置に所在し、長さ約6m、深さ0.05m~0.2mの浅い溝状を呈する窪地で、SX1の窪地と同様に人為的に掘られたものか、自然的なものなのか判然としない。埋土は第VII、VIII層が被覆している。その溝状の内面で土師器の甗、埴、壺、須恵器の坏身、坏蓋などの土器が出土した。埴、壺、坏蓋、坏身は溝内のやや北よりのところで比較的まとまった状態で出土し、それらを囲むように甗が出土する。甗の出土量が多いのが特徴である。これら甗はつぶれて破片となっており、中には器壁が薄く復元できないものもあった。出土した甗は全て煤の付着が見られるが、溝内には炭化物は若干認められるものの焼土はみられない。

出土遺物(第29~31図、図版26~28)

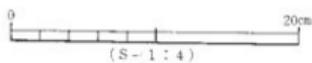
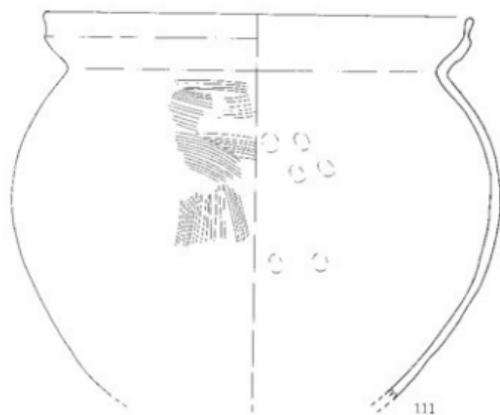
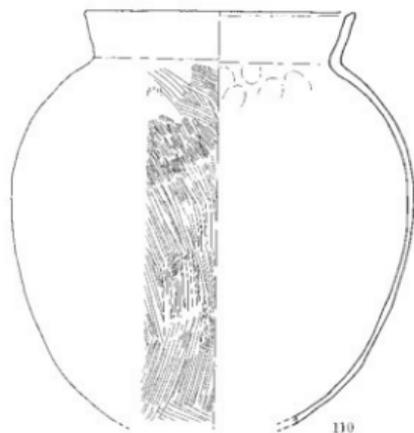
土師器

甗形土器(104~112) 104は推定口径13.6cmを測る。口縁部は外傾し、上方にたちあがり、端部は内傾する面をなす。105は推定口径13.6cmで口縁部は外反気味にたちあがる。106は内湾する口縁部で端部は内に肥厚し面をなす。胴部は長胴を呈する。107は胴部中央が破片のため復元できなかった。口縁部は内湾してたちあがり、端部は内傾する面をなす。口縁直下の体部外面に上下斜め方向に長さ2.1cmのへら状工具による1条の沈線がみられる。108はやや内湾してたちあがる口縁部で口縁端部は上方に面をなす。体部外面は粗いハケ目調整を施す。口縁部直下の体部外面にへら状工具による長さ4.2cmの縦位の1条の沈線が施されている。109はやや外反する口縁部。口縁端部はやや肥厚する。体部外面はハケ目調整を施す。110は底部が復元できなかったもので、口縁部は外上方にたちあがり、端部は内傾する面をなす。体部外面は粗いハケ目調整を施す。111の口径は推定29.2cmで口縁部は外上方に開いたのち段をなし上方にたちあがる。体部外面はハケ目調整を施し、内面は指頭底を残す。

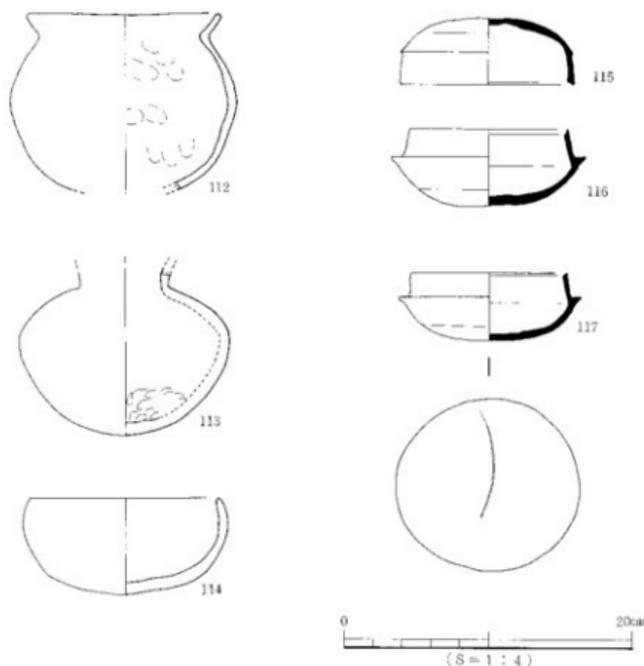
調査の概要



第29図 S X 2 出土遺物実測図①



第30図 S X 2 出土遺物実測図②



第31図 S X 2 出土遺物実測図③

112は口径12.9cm、残高12.5cmで口縁部はやや内湾してたちあがり、口縁端部は丸くおさめる。体部内面は指頭痕を残す。

碗形土器(114) 114は口径12.9cm、器高6.8cmの完形品で、やや丸底の底部から内湾してたちあがり、端部は丸くおさめる。

壺形土器(113) 113の底部は丸く、体部最大径を2/3のところにもつ。底部内面に指頭痕を残す。赤焼け土器であるが、焼きが堅緻で形態的にも須恵器に類似するものである。

須恵器(第31図)

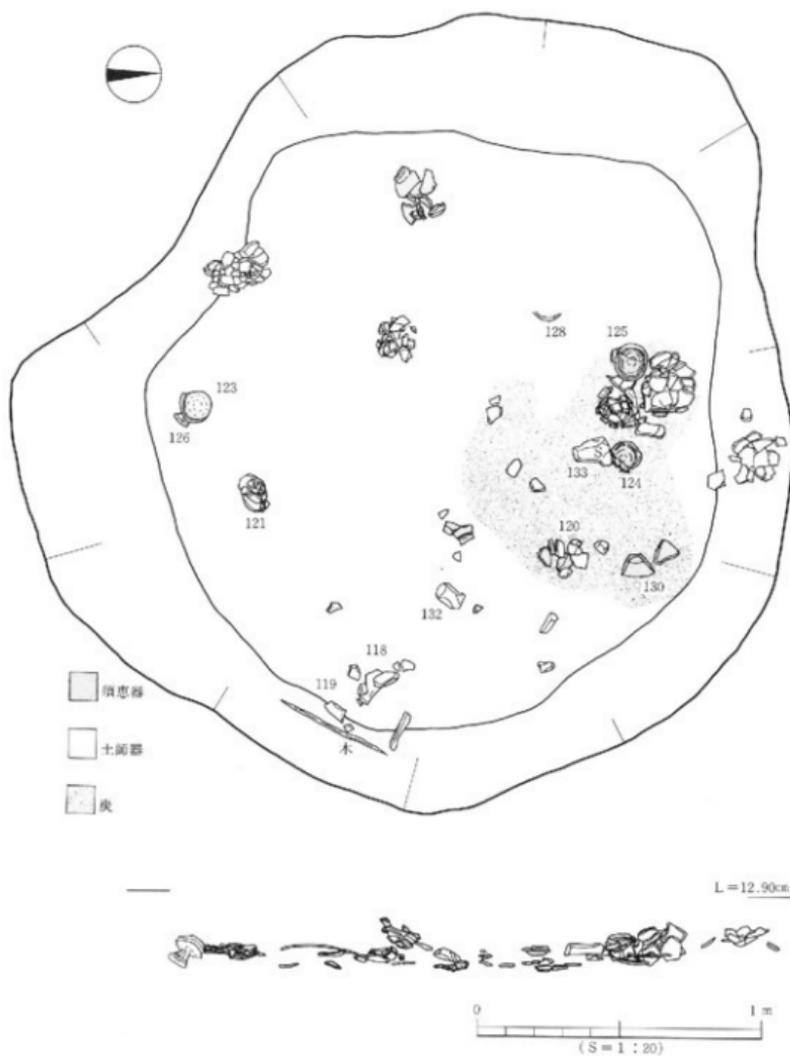
坏蓋(115) 115は口径11.8cm、器高4.7cmで、天井部はやや丸く稜は短く丸い。完形品。

坏身(116・117) 116は口径11.8cm、器高5.5cmで、たちあがりは内傾し端部は段をなす。117は口径10.7cm、器高4.8cmで、底部外面に「ノ」字状のヘラ記号がある。

S X 3(第32図、図版7-2・8-2)

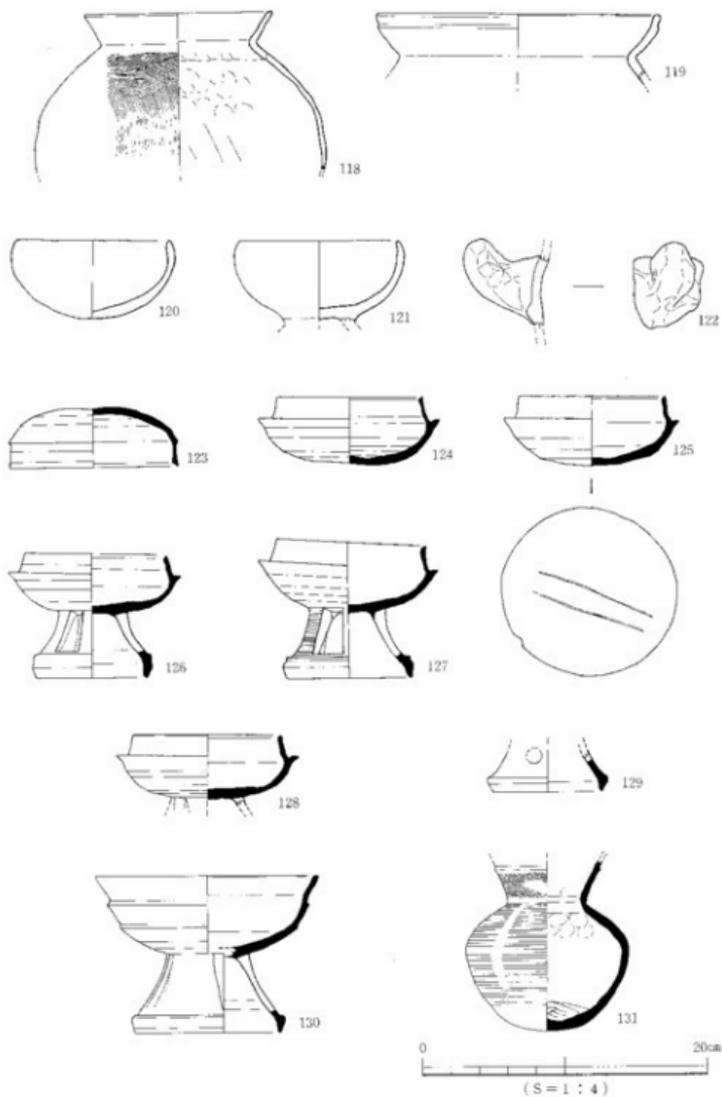
IX層上面での検出である。S X 1とS X 2の間にあり、長軸2m80cm、短軸2m前後、深

遺構と遺物

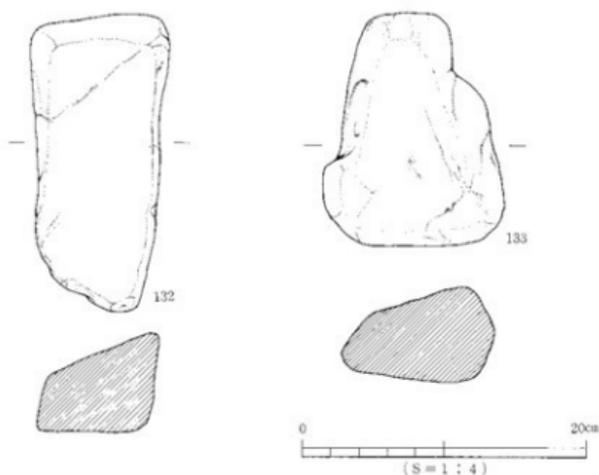


第32図 S X 3 測量図

調査の概要



第33図 S X 3 出土遺物実測図①



第34図 S X 3 出土遺物実測図②

き0.2mのやや円形を呈する窪地。窪地北側に厚さ0.5cmほどの炭化層と焼土粒がみられる。その炭化層の西側に土師器鉢、坏身、石臼がままとまって出土した。これらの出土状況から、この場所で煮炊きの行為があったものと思われる。

出土遺物（第33、34図、図版29、30）

土師器

甕形土器（118、119） 118は推定口径12.9cm、残高11.2cmで口縁部は内湾気味にたちあがり、口縁端部は外傾する面をなす。119の口縁部は内湾気味に外上方にたちあがり、段を有する。

埴形土器（120、121） 120は丸底の底部から内湾してたちあがり、口縁端部は丸い。121は坏底部から内湾して脚が付く。

飯（122） 122は飯の把手である。

須恵器

坏蓋（123） 123は口径11.7cm、器高4.2cmを測る。天井部は比較的丸く、口縁端部は段をなす。126の高坏に蓋をした状態で出土した。

坏身（124、125） 124は口径10.0cm、器高4.8cmを測る。たちあがりは内傾し端部は凹面をなす。受部は上外方にのびる。125は口径10.2cm、器高4.9cmでたちあがりは内傾し端部は凹面をなす。受部は水平にのびる。底部外面にへラ記号あり。

調査の概要



第35図 S X 4 測量図

有蓋高坏 (126-129) 126、127、128の脚柱には三方のスカシ。129の脚柱には三方の円形のスカシを施す。

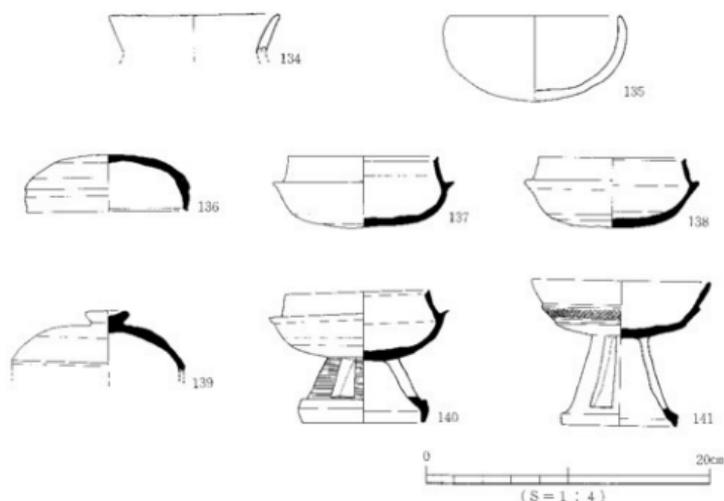
無蓋高坏 130は口径15.3cm、器高11.1cmで脚柱は四方向のスカシを施す。

石製品

石台 (132、133) 132、133は炭化層中の出土で、煤が付着している。加工痕跡はみられない。材質は安山岩。

S X 4 (第35図、図版9-2)

IX層上面での検出である。0.7m×0.7mの範囲で遺物が集中し、なんら掘り込みを伴わず平面的に広がる遺構である。出土状況から原位置を保持の出土と思われる。検出状況は土師器の裏は破片となっているものの、東側に倒れている様子が何われ、その裏を半分囲むように土師器境、須恵器蓋坏、高坏が置かれている。



第36図 S X 4 出土遺物実測図

出土遺物 (第36図、図版31)

土師器

甕形土器 (134) 134は胴部も出土しているが碎片のため復元できなかった。口縁部は上外方にたちあがり端部は丸くおさめている。

碗形土器 (135) 135は丸底の底部から内湾してたちあがり口縁端部は丸くおさめる。坏身137の上に重ねられた状態で出土している。

須恵器

坏蓋 (136) 136は天井部は丸く、稜は短く丸い。口縁端部は内傾する凹面。

坏身 (137、138) 137は口径10.3cm、器高5.1cmを測る。たちあがりは内傾し、端部は凹面をなす。138は口径10.2cm、器高4.9cmを測りたちあがりは内傾し、端部は内傾する平面をなす。

蓋 (139) 139は天井部は丸く、つまみは中央部が窪む。稜は丸く鈍い。

有蓋高坏 (140) 口径10.0cm、脚底径8.4cm、器高9.4cmを測る。坏底部は丸く、たちあがりは内傾し端部は内傾する凹面をなす。受部は上外方にのびる。脚柱にはカキ目調整をし、三方向のスカシを施す。

無蓋高坏 (141) 坏部に液状文を施す。脚柱は長脚で三方向のスカシを施す。

調査の概要



S X 7 (第37図)

IX層上面での検出である。長さ9m×幅約1.5mの不整形の窪地で土師器・須恵器・炭・焼土粒で構成される。小破片が多く完形品が見られず、他のS Xとは遺物の出土状況を異にする。また、周囲には炭が取り囲むように存在する。

出土遺物 (第38図、図版32)

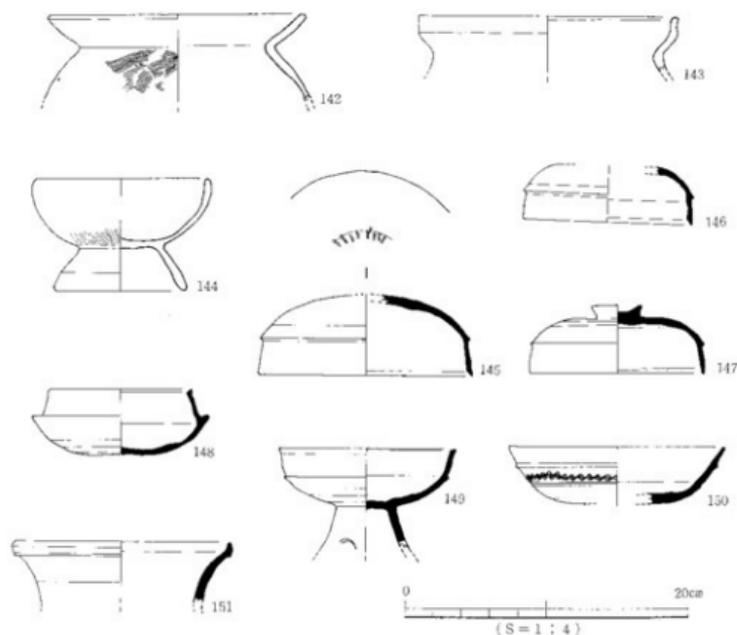
土師器

甕形土器 (142、143) 142の口縁部は内湾してたちあがり、端部はまるい。143の口縁部は内湾気味にたちあがったのち屈曲し上方にたちあがる。

壺形土器 (144) 144は短脚付壺である。坏部は平底の底部から内湾してたちあがり、脚は内湾して広がる。

須恵器

坏身 (148) 148は口径9.9cm、器高4.6cmで、たちあがり内傾し端部は段をなす。



第38図 S X 7 出土遺物実測図

蓋 (145~147) 145~147は高環の蓋である。145の天井部には刺突を施す。147の口縁端部は丸く、端部内面直下に沈線を巡らせる。

無蓋高環 (149, 150) 149の環部は環蓋そのものである。脚柱には三方向の円形のスカシを施す。150は体部に波状文をもつ。

袋形土器 (151) 151の口縁端部は上下に拡張する。

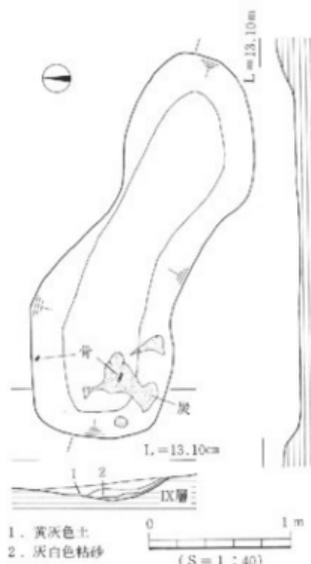
土坑

SK1 (第39図、図版10)

IX層上面での検出でSX1の土器群の西側に接する。長軸2.85m、短軸0.9mの不整形の土坑で東西に長い。土坑内の西側に炭化層と焼土に混じって焼けた骨片が出土している。このSK1は層的にも検出状況的にもSX1の一連のものとして差し支えないように思える。出土土器は土師器・須恵器が出土しているが、当初SX1の土器群として取り扱っており図示しえるものはSX1出土遺物の第25図・80の有蓋高環の蓋である。

SK2 (第40図、図版10)

IX層上面での検出で、長さ1.7m、幅1.2m、深さ0.18mの長方形を呈する。土坑内南の底面に炭化層と焼土が見られる。出土土器は土坑中央底に土師器の破片1点が出土したのみである。



第39図 SK1測量図



第40図 SK2測量図

焼土跡

A区のIX層上面には焼土・炭化層が散在している。中でも焼土1～焼土4は白色粘質土を伴い他の焼土とは異なるものである。

焼土1 (第41図)

A区の南西端のIX層上面で検出した。2m×2mの範囲で、IX層上面に張り付くように広がり白色粘質土に炭・焼土が混じり、土師器、須恵器の小片が出土している。



第41図 焼土1測量図

焼土2 (第42図)

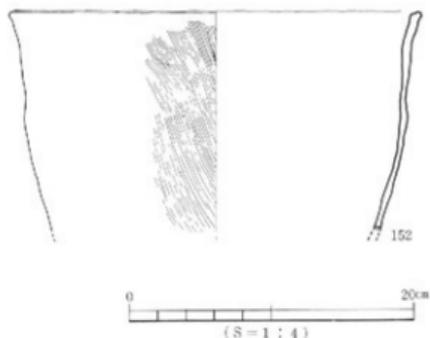
A区の東壁近くのIX層上面で検出した。1.4m×1.4mの範囲で白色粘質土や焼土・炭・土器がまばらにみられる。

出土土器 (第43図、図版33)

甔形土器 (152) 152は推定口径29.2cmで、外面はハケ目、内面はナデ調整される。

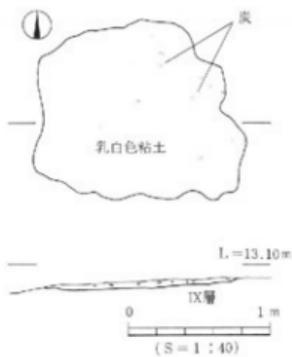


第42図 焼土2測量図

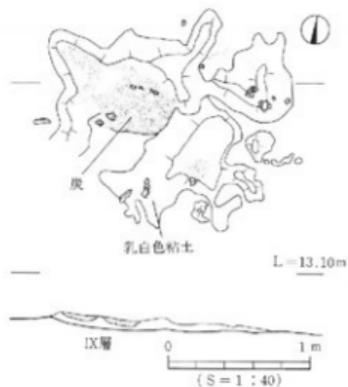


第43図 焼土2出土遺物実測図

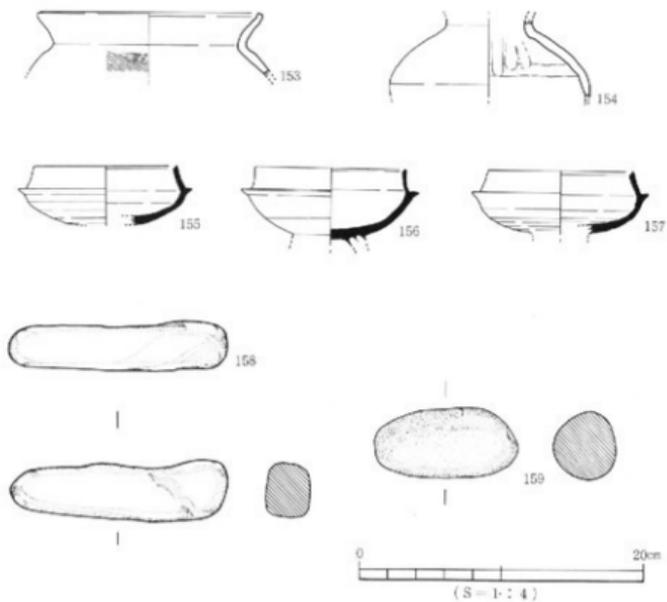
調査の概要



第44図 焼土 3 測量図



第45図 焼土 4 測量図



第46図 焼土 4 出土遺物実測図

焼土3 (第44図)

S K 2の南50cmのIX層上面で検出した。1.6m×1.4mの範囲で白色粘質土が広がる。白色粘質土中に焦土が見られる。また、その周辺には細粒の炭化物が見られる。出土土器は白色粘質土中に土師器、須恵器の小片が混入するが図示しえるものはない。

焼土4 (第45図)

S X 1の窪地の西肩部近くで検出している。1.5m×1.5mの範囲で白色粘質土があり、焦土、炭が見られる。土師器、須恵器が出土している。

出土遺物 (第46図、図版34)

土師器

甕形土器 (153) 153は甕である。外傾したのち内湾して立ち上がる口縁部。調整は体部外面はハケ目、内面はナデである。

壺形土器 (154) 154は壺である。胴部の最大径をほぼ中位にもつと思われる。

須恵器

坏身 (155) 155は口径10cmで、たちあがりは内傾し端部は段をなす。

高坏 (156、157) 156、157は高坏であるが、脚は欠失している。156は口径10.4cmで、たちあがりは内傾したのち直立し端部は段をなす。受部は水平にのびて、底部は丸く器高が高い。坏底部外面1/3を反時計回りの回転ヘラケズリをほどこす。157は口径10.1cmで、たちあがりは内傾し端部は凹面をなす。受部はやや外上方にのびる。調整は坏底部外面2/3を時計回りの回転ヘラケズリを施している。

石製品

敲石 (158、159) 158は安山岩、159は砂岩である。

(2) 第IX層中の調査

BⅠ区の第IX層上面の調査が終了し、第IX層掘削時に検出した遺構である。

祭祀跡

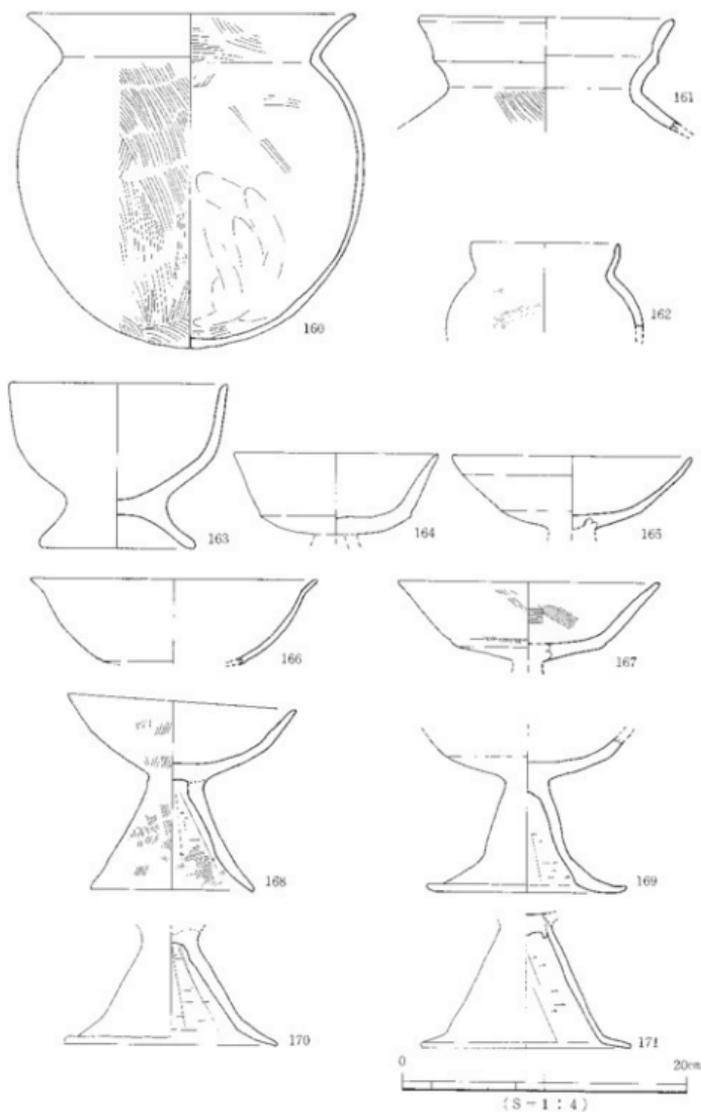
S X 5 (第47図、図版11)

B区での検出で、第IX層上面では検出されず、第IX層掘り下げ時に検出した遺構である。1.5m×1.5mの範囲で遺物が集中し、なんら掘り込みを伴わず平面的に広がる。出土状況から原位置を保っての出土と思われる。遺物は土師器が主体で、甕・壺・高坏・短脚付坏・甎手捏土器が出土しているが、高坏の出上量が多いのが特徴である。須恵器は壺の破片が1点だけ出土している。

調査の概要

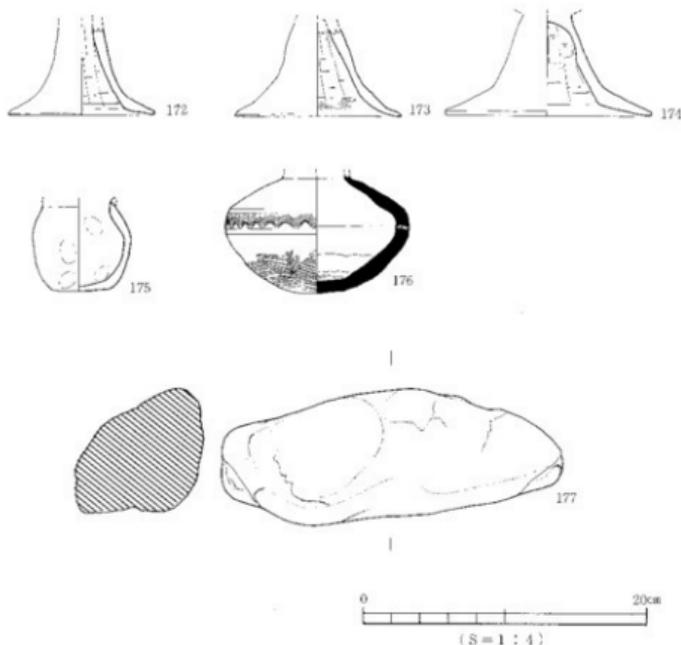


第47図 S X 5 測量図



第48図 S X 5 出土遺物実測図①

調査の概要



第49図 S X 5 出土遺物実測図②

出土遺物 (第48、49図、図版34)

土師器

甕形土器 (160) 160は推定口径22.5cm、器高23.7cmで、胴部は球形で口縁部は外反する。調整は体部外面をハケ目、内面はヘラケズリを行ったのちナデを施している。

壺形土器 (161・162) 161は口径17.4cm、残高7.9cmで、口縁部は外反してたちあがったのち段をなし、さらに外反して立ち上がる。調整は体部外面をハケ目、内面はナデである。162は推定口径10.2cm、残高6.3cmで、口縁部は内湾して上方にたちあがる。調整は摩滅のため不明瞭であるが、体部外面はハケ目、内面はナデが看取される。

短脚付鉢形土器 (163) 163は推定口径14.9cm、器高11.7cmを測る。丸底の底部から内湾気味にたちあがったのち上外方にのびる口縁部。脚は外反して短くのびる。調整は内外面とも摩滅の為不明である。

高坏形土器 (164-174) 164は脚部が欠失している。坏部は推定口径14.3cmを測り、坏屈曲部は稜をなし、口縁部はゆるやかに外反し、端部は丸い。165の坏部は推定口径16.5cm、坏屈曲部は浅い稜をなし、内湾してたちあがる。166の坏底部以下は欠失している。推定

口径19.7cmで口縁部は内湾してたちあがったのち、口縁端近くで屈曲し外上方に開く。167は口径18.1cmで、坏屈曲部は段をなし、口縁部は外上方にたちあがる。168は口径15.9cm、器高13.7cmで、坏部は内湾して外に開き、脚は外反気味に開いて裾部へとつづく。169・173の脚柱は中ぶくれとなり裾部は外反する。170、171、172、174の脚柱は円錐状に広がり、屈曲して裾部へつづく形態のものである。

手捏土器(175) SX5出土の手捏土器は1個体だけである。175は残高6.6cmで口縁部は欠損している。

須恵器

甕(176) SX5出土の唯一の須恵器である。灰白色で体部に波状文をもち、底部外面には平行タタキ目を残す。破片のため、孔の痕跡がわずかに認められるものである。

用途不明石(177) 177はSX5土器群のほぼ中央で出土した。加工、使用痕跡、煤の付着などは見られないが、何らかに使用されたと思われる石である。材質は安山岩である。

SX6(第50図、図版11)

B区の第IX層掘り下げ時に検出した遺構である。1m×1mの範囲で遺物が集中しなから掘り込みを伴わない。出土状況から原位置を保持の出土と思われる。SX5から北へ約2mに位置し、ほぼ同レベルでの出土である。SX5が土師器が主体であるのに対し、SX6は須恵器が主体で、坏蓋、坏身・高坏で構成されるが、若干の土師器の破片も散在する。

出土遺物(第51図、図版35)

土師器

高坏形土器(178) 178は高坏の脚部である。裾部は脚柱から緩やかに外反する。

手捏土器(179) 179は手捏土器で口径5.5cm、器高3.4cmを測る。

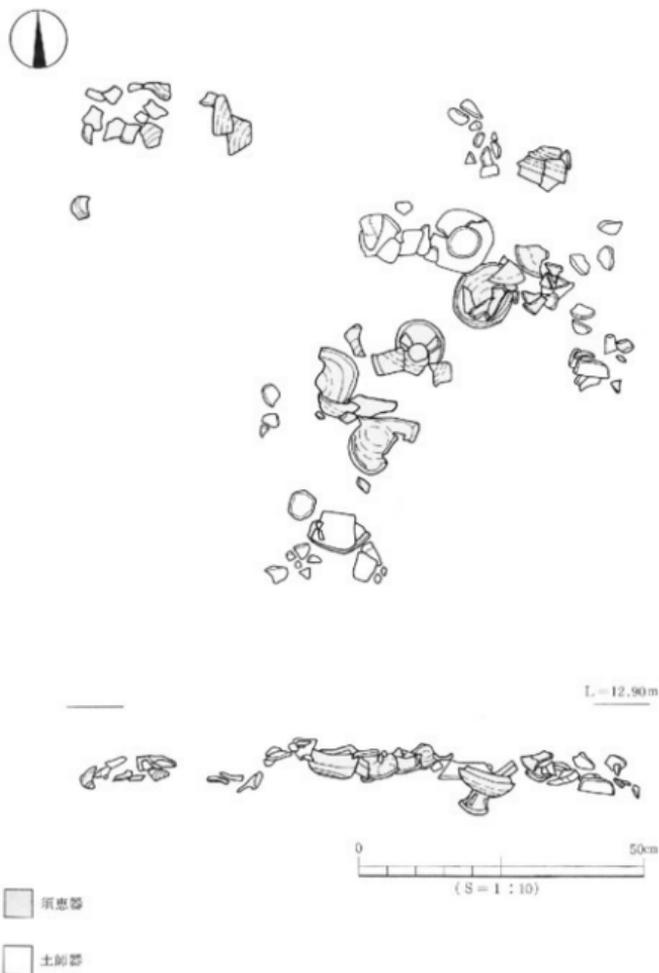
須恵器

坏蓋(180) 180は口径10.6cm、器高4.5cmを測る。縁は沈線によりあらわす。口縁端部は内傾する面をなす。

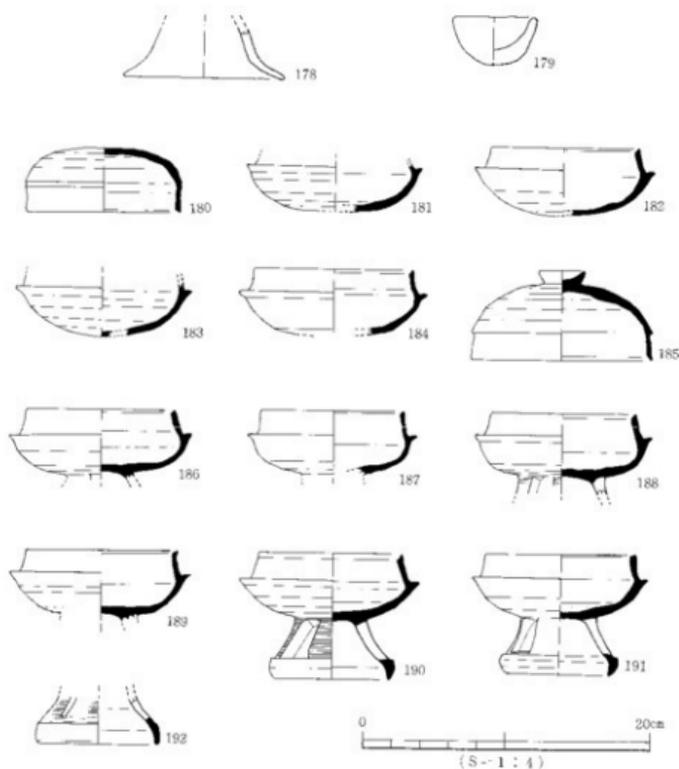
坏身(181~184) 181はたちあがり欠失している。やや偏平な底部で、受部は水平にのびる。182は口径10.0cm、器高4.8cmでたちあがりは内傾し、端部は段をなす。底部は丸い。183は残高4.3cmでたちあがりは欠失している。底部は丸く、受部は水平にのびる。184は推定口径10.9cm、残高4.7cmでたちあがりは内傾したのち直立し、端部は段をなす。

蓋(185) 185は推定口径12.4cm、器高6.3cmを測り、犬井部が丸く器高が高い。縁は短く外方へのびる。つまみは中央がくぼむ。

調査の概要



第50図 S X 6 測量図



第51図 S X 6出土遺物実測図

高坏(186~191) 186~189の脚部は欠失している。186の坏部口径は10.1cmで、たちあがりは内傾し、端部は凹面をなす。187は推定口径9.8cmで、たちあがりは内傾し、端部は内傾する面をなす。188は推定口径9.6cmで、たちあがりは内傾し端部は凹面をなす。坏底部は偏平である。189は口径10.4cmで、たちあがりは内傾し端部は内傾する面をなす。坏底部は偏平である。190は推定口径9.8cm、器高8.9cmで、たちあがりは内傾し端部は凹面をなす。坏底部は丸みを帯びる。脚柱はカキ目調整が施され、三方にスカシを施している。191は口径10.2cm、器高8.6cmで、たちあがりは内傾し、端部は段をなす。坏底部は丸い。脚柱には三方にスカシを施している。192は脚部の破片で、三方にスカシを施している。

第Ⅸ層出土遺物 (図版36~40)

第Ⅸ層上面から層中にかけて出土した遺物である。

土師器 (第52、53、54図)

甕形土器 (193~202) 193の口縁部は外傾して短く開く。体部外面はハケ目調整を施す。194の口縁部は外傾して開き、端部は上方に丸くおさめる。195・196は内湾する口縁部で、端部は上方に面をなす。197は胴中位上半が張る。口縁端部は外傾する面をなす。198~200は外傾して外上方に開く口縁部で端部は丸くおさめる。201は外上方に開く口縁部で端部は先細る。202は韓式系土器で、口縁部は外反し、体部に格子タタキ目が施されている。

外形土器 (203) 203は平底の底部で体部は内湾してたちあがる。口縁部は欠失している。

壺形土器 (204) 204は丸い体部に外反する口縁部。端部は丸くおさめる。

壺形土器 (205) 205の体部は内湾して口縁部につづく。端部は丸い。

甕形土器 (206~217) 206は底部中央に直径2.3cmの1ヶの円孔を穿たれる。外面は粘土の巻き上げ痕を明瞭に残す。207の口縁部は外傾し端部は断面「コ」の字状を呈する。208の口縁部は外反し端部は丸くおさめる。209は把手部と底部が欠損する。調整は体部外面に粗いハケ目が施される。210~217は甕の把手である。216は灰白色で須恵質のものである。

置きカマド (218) 218は置きカマドの焼き口上部の底とおもわれる。上面はハケ目、指頭痕を残し、表面は指頭痕を顕著に残す。

須恵器 (第55、56図)

坏蓋 (219~224) 口径12cm以下 (219・220・221・223) のものと12cm以上 (222・224) のものとがある。224は口径が13.6cmで、本遺跡出土の坏蓋の中で最大である。天井部も低く天井部と口縁部を分ける稜も失われている。

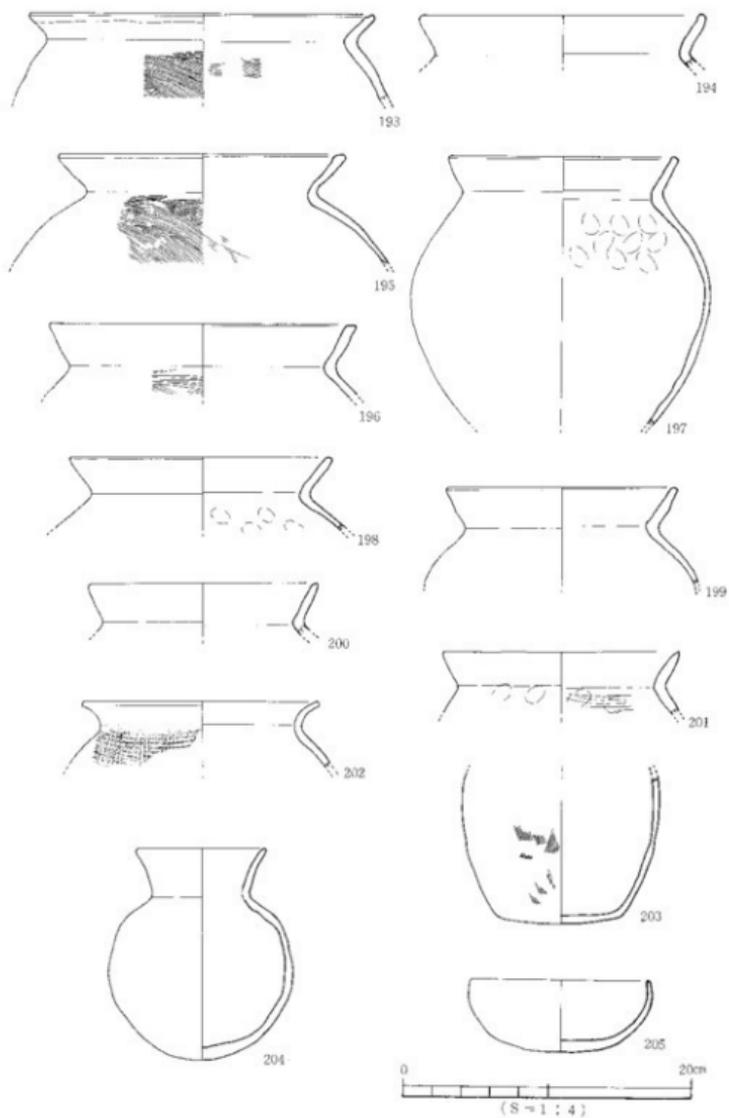
坏身 (225~235) 225~230は口径10cm以下で、底部も丸い。231は口径10.1cmで全体的に器壁が厚い。232は口径11.5cmで、たちあがりは直立し端部は段をなす。受部は水平にのびる。233は口径10.8cmでたちあがり端部は外反し内傾する凹面をなす。234・235の底部外面にはヘラ記号状の沈線がみられる。

蓋 (236~238) 236は天井部は丸く、つまみは中央がくぼむ。237の天井部も比較的丸味を帯びる。つまみは中央がややふくらむ。稜の直下は強くナデられる。238は天井部2/3にカキ目調整される。つまみは中央が突出する。

有蓋高坏 (239~241) 239~241は脚柱に三方向にスカシがある。241は脚柱にカキ目調整される。240は本遺跡出土の高坏の中で唯一たちあがり端部を丸くおさめている。242の脚柱には三方向の円形のスカシがある。243は底部外面1/2にカキ目調整が施される。

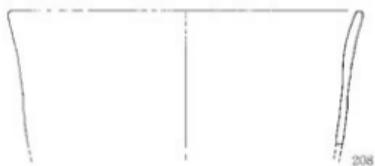
無蓋高坏 (244) 244は無蓋高坏で、底部外面はカキ目調整される。色調は白色である。

壺形土器 (245、246) 245は肩部に1条の沈線を巡らし直下に刺突文を施す。246は肩部に1条の沈線を巡らし直下に波状文を施す。底部内面に軸が付着する。

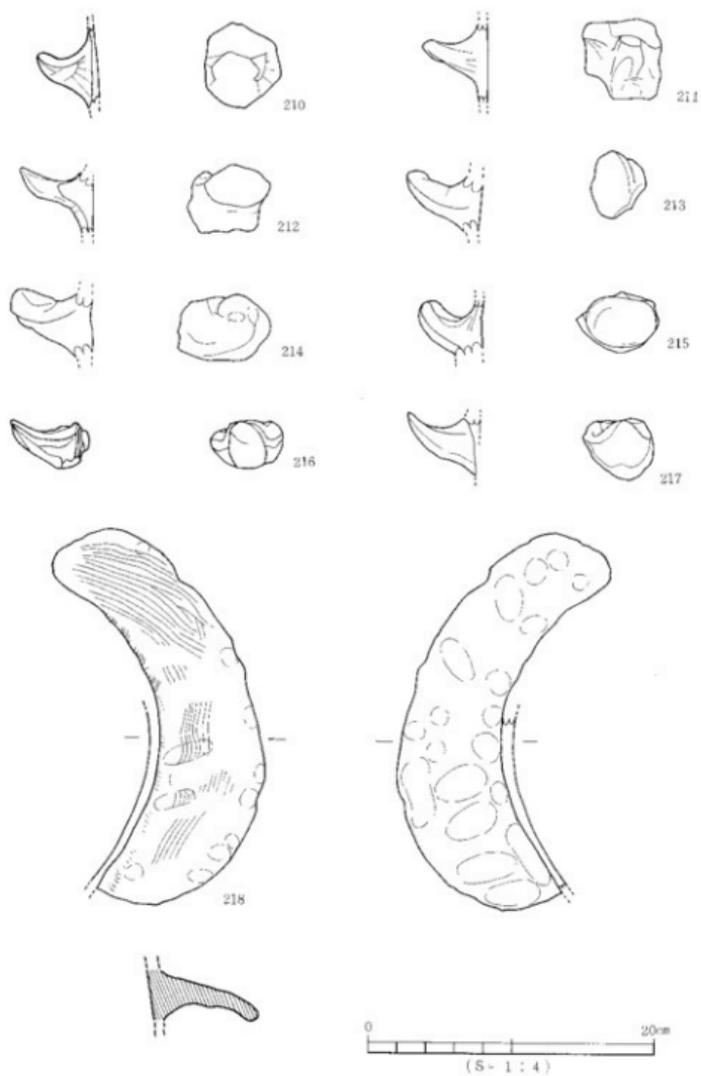


第52図 第Ⅱ層出土遺物実測図①

調査の概要

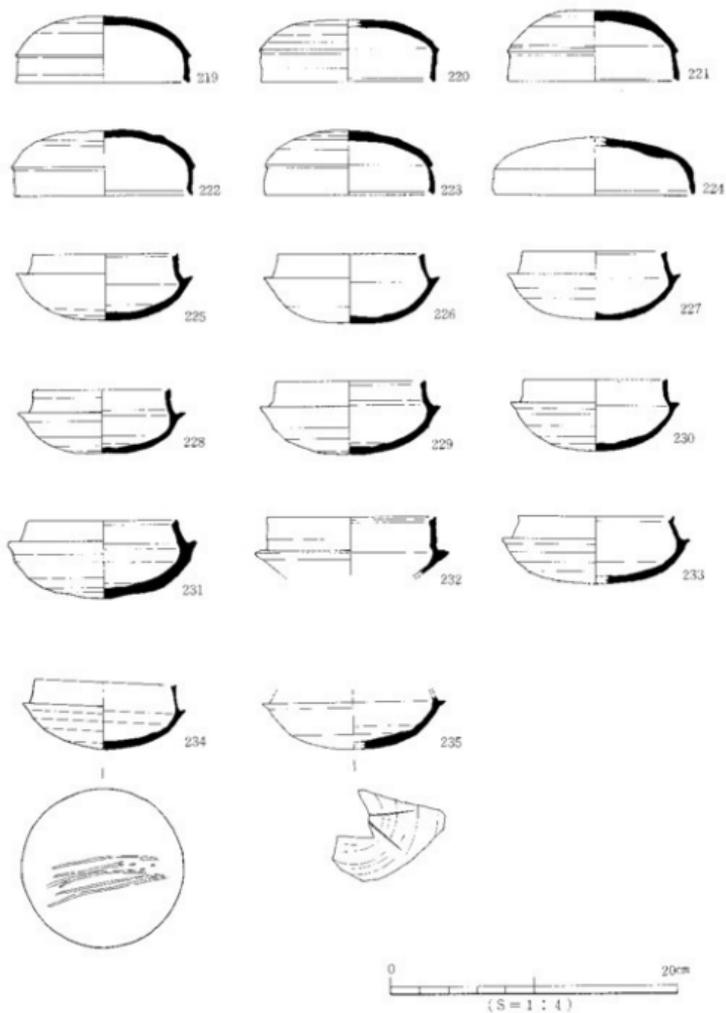


第53図 第Ⅰ層出土遺物実測図②



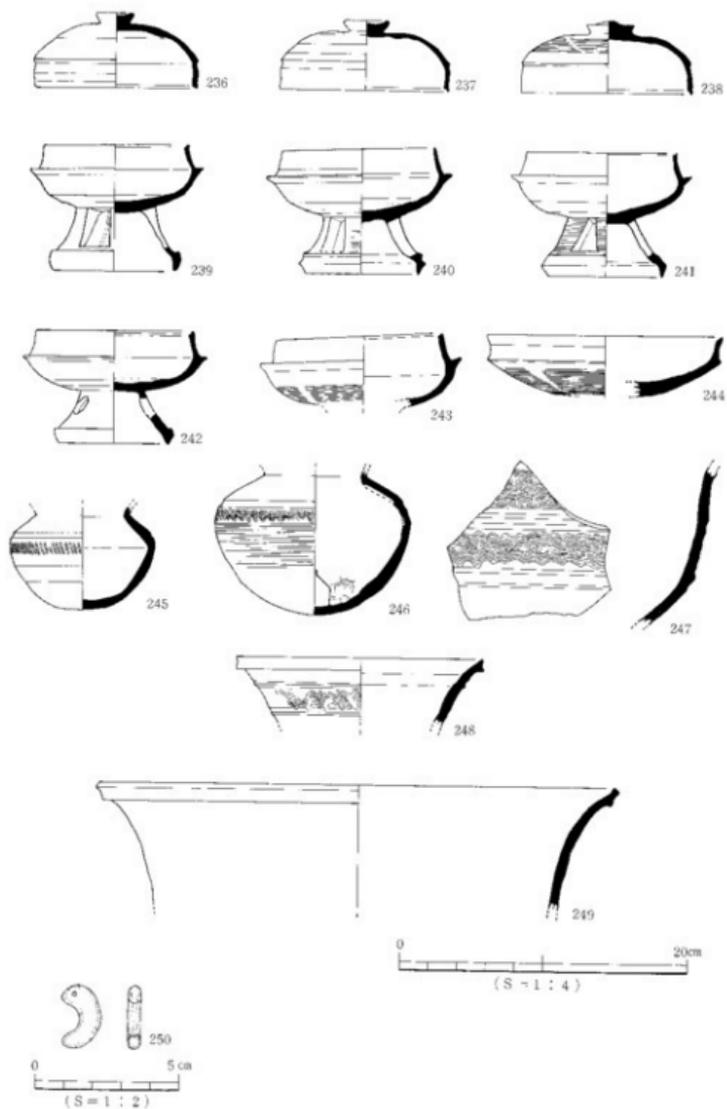
第54図 第Ⅱ層出土遺物実測図③

調査の概要



第55図 第Ⅴ層出土遺物実測図④

遺構と遺物



第56図 第Ⅱ層出土遺物実測図⑤

袋形土器 (248、249) 248は口縁端部は下方には拡張し、凸帯直下に波状文を施す。249は口径35.8cmを測る大型品である。

器台形土器 (247) 247は凸帯と波状文を2段に重ねる。

石製品

勾玉 (250) 250はS X 6から東へ約4 mの位置で出土した。材質は瑪瑙である。

(3) 第X層の調査

第X層はA区の中央より西にかけて地積しており、B区には全面に見られる。A区は第IX層の遺構の検出に時間を費やしたため、A区での第X層の掘り下げは行えなかった。このため、第X層の調査はB区を中心に行った。

第X層では上面、層中とも遺構は検出していない。層中からは土師器・須恵器が出上るが、遺物の出土はIX層に比べると少なくなってくる。特に須恵器の出土が減少し、蓋環、高環といった器種がみられない。

出土遺物 (第57図、図版41)

土師器

袋形土器 (251、252) 251の口縁部はやや内湾気味にたちあがり、端部は上方に面をなす。252は口縁部は外反してたちあがり、口縁端部は丸くおさめる。胴部外面は粗いハケ目調整。

壺形土器 (253) 253は肩部が張り、口縁部は外上方にひろがり端部は丸くおさめる。

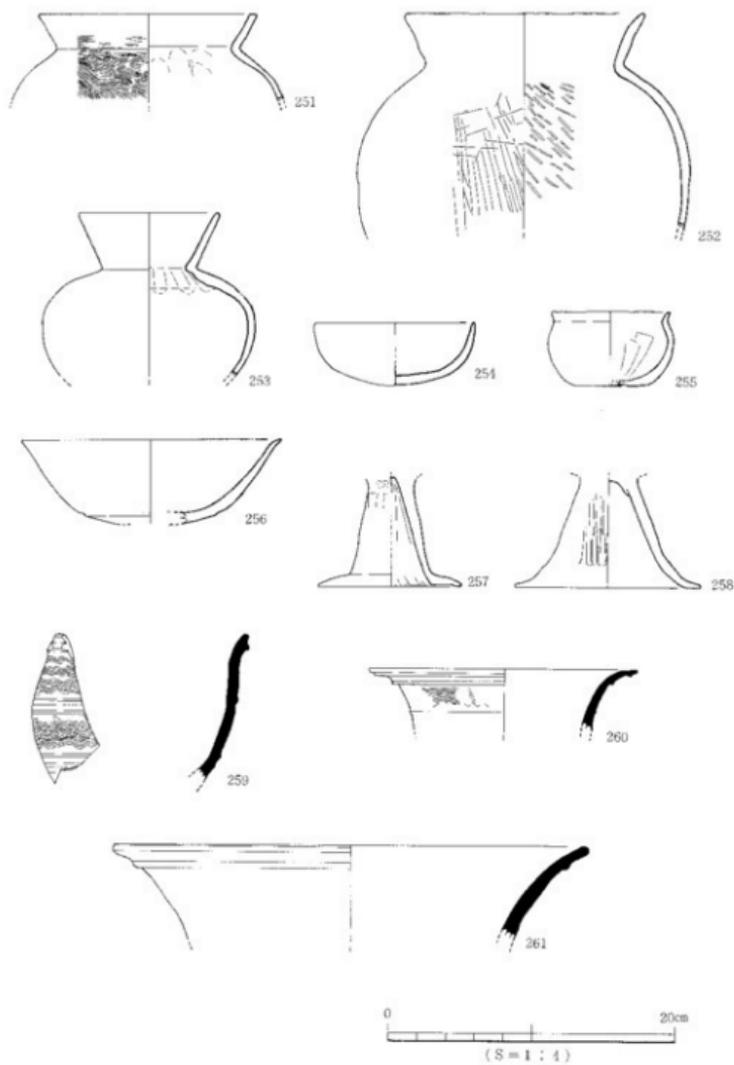
埴形土器 (254～255) 254は丸底の底部から内湾して上方にたちあがる。255は平底の底部から内湾してたちあがり、口縁端近くで屈曲し、端部は丸くおさめる。

高環形土器 (256～258) 256の環部は明瞭な段を有し、口縁端近くで外反する。257、258は高環の脚である。257は脚部で強く屈曲する。258は緩やかに外反し、裾部は短く水平にのびる。

須恵器

器台形土器 (259) 259は凸帯と波状文を2段に重ねる。

袋形土器 (260) 260は外反する口縁部。凸帯直下に波状文を施す。261は外反する口縁部。口縁端部外面直下に1条の凸帯が巡る。



第57図 第X層出土遺物実測図

(4) 第Ⅻ層の調査

第Ⅻ層は灰白色の砂質土で調査地全面にみられ、辻町遺跡の基盤面とも言える。上面で遺構を検出し、層中からの遺物の出土はない。A区では第IX層の調査に時間を費やしたため、北東部の一角しか調査ができなかった。調査部分は第X層の堆積がなく、第IX層を掘り下げるとⅫ層の上面となる。A区での検出遺構は、溝状遺構、柱穴、土坑状の遺構を検出した。遺構埋土はいずれも暗褐色砂質土で、出土した遺物は全くなかった。

B区では第Ⅻ層上面で竪穴式住居3棟、柱穴、溝状遺構1条を検出している。

竪穴式住居

SB1 (第59図、図版12)

B区北での検出である。平面形は一辺6m前後のややいびつな方形を早する。住居内の南東部に炭の堆積が見られる。柱穴は3基並んで検出しているが、住居の掘り方は方向を異にするため住居に伴うものではないと思われる。柱穴からの出土遺物はなかった。住居内からは土師器が出土するが、須恵器は出土しなかった。また住居北側にはカマドが付設される。

出土遺物 (第60図、図版42)

土師器

甕形土器(262、263) 262の口縁部はやや内湾し、端部は肥厚して内傾する平面をなす。263の口縁部は外上方にたちあがり、口縁端部は内傾する平面をなす。

塊形土器(264、265) 264は内湾して上外方にたちあがる口縁部。265は内湾してたちあがる。口縁部。端部は丸い。

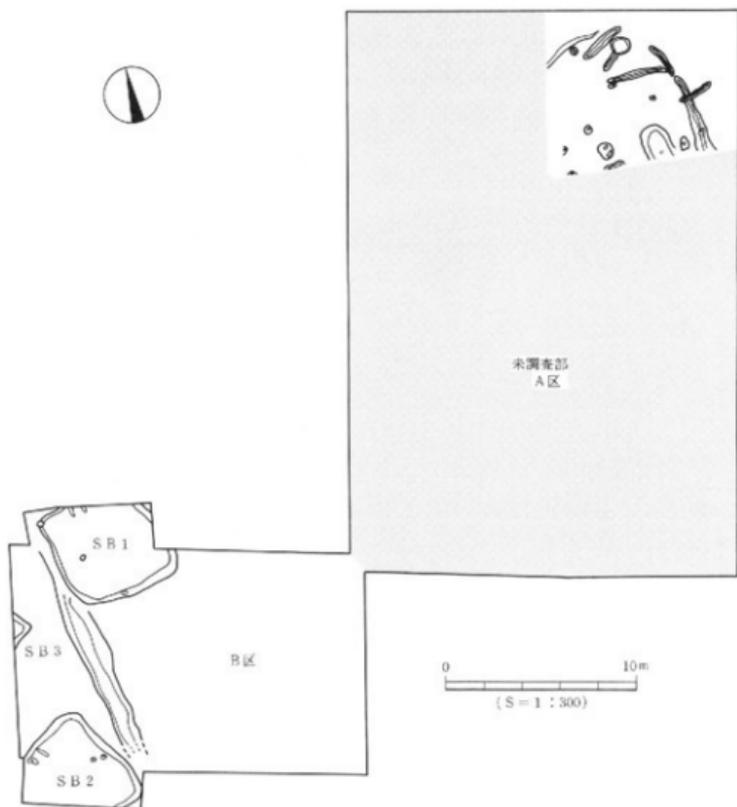
鉢形土器(266) 266は丸底の底部から内湾してたちあがり口縁端近くで屈曲し外上方に開く。

高環形土器(267~273) 267~271の坏部は内湾してたちあがったのち口縁端近くで外反する。267、269は底部と坏部境に明瞭な段を有する。271は推定口径23.7cmで大型品。272、273は脚柱で強く屈曲し、拵部へとつづく。273の内面の柱裾部境は突出する。

不明石製品(274) 住居内からの出土で煤が付着する。砂岩製。

SB1カマド (第61図)

住居址の北壁の中央部で検出された造り付けのカマドである。煙路部は調査区外のため未検出である。カマドは住居床面を掘りくぼめ構築されている。底面には炭層がみられる。青灰色土は流入埋土で、その上に天井部の一部と思われる白茶色粘土が遺存し、燃焼部と天井部の粘土は熱のためか茶色を強める。カマド前面には、かき出された炭が見られる。カマド内からは高環(第62図、275)と甕(第62図、277)が出土している。高環は伏せた状態で、甕はカマドの焚き口に向かって倒れた状態で出土している。おそらく住居廃絶時には高環の



第58図 第Ⅵ層上面遺構配置図

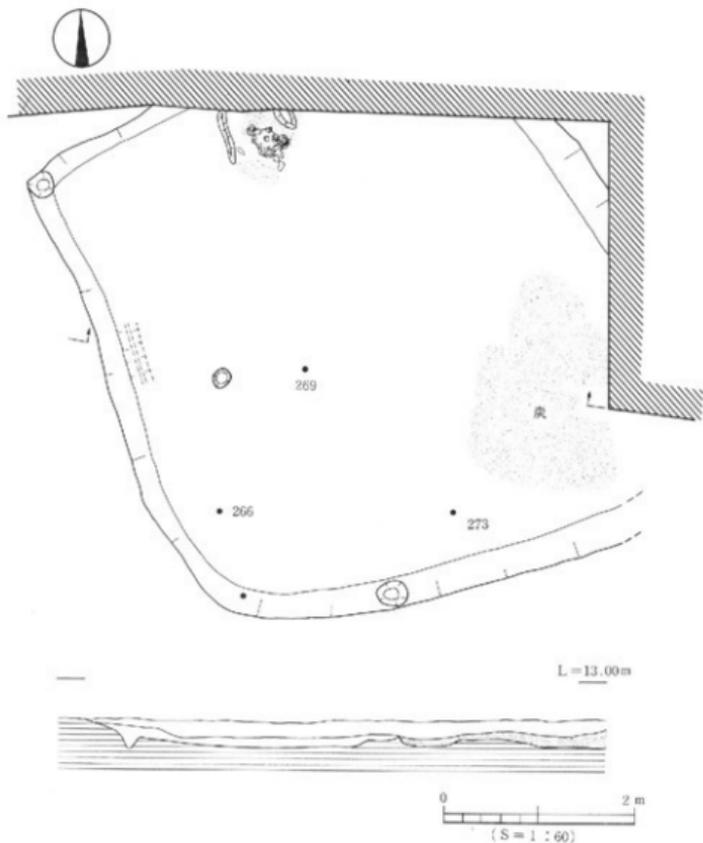
調査の概要

脚柱に裏がのった状態だったものと思われ、高環は支脚として使用されていたものと想定される。高環の脚柱と裏には煤が付着し、2次的に火をうけた形跡が見られる。

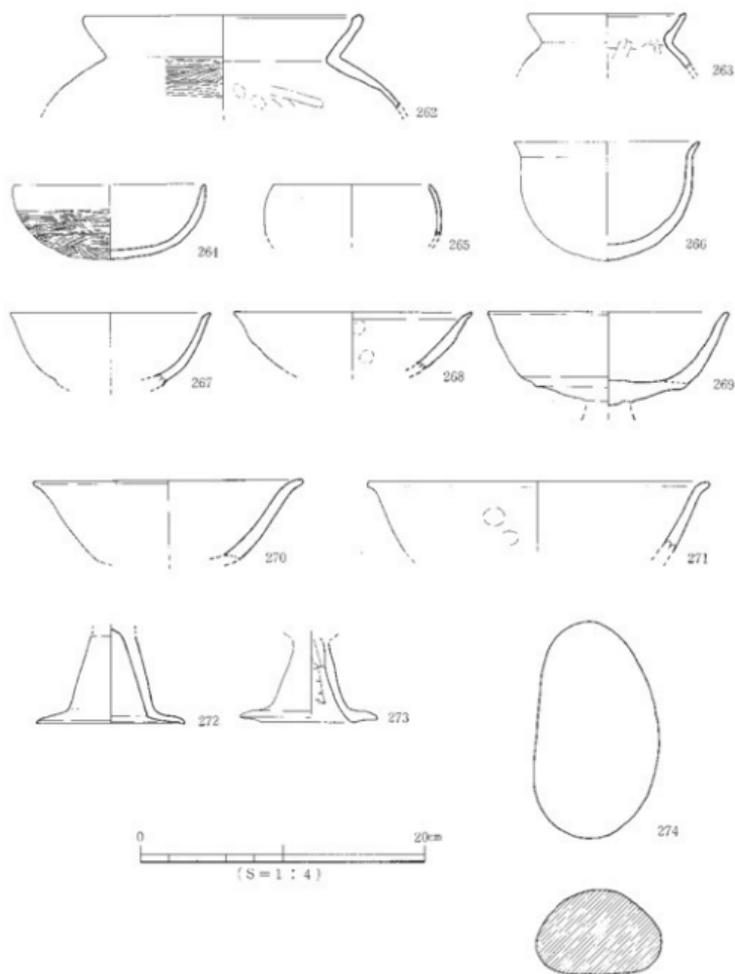
出土遺物 (第62図、図版43)

甕形土器 (275、276) 275の口縁部は内湾してたちあがり端部はやや内傾する平面をなす。276は器壁が薄く、口縁部外面に2条の沈線を施す。

高環形土器 (277) 277は坏屈曲部の境に段を有し、坏部は内湾したのち外反し口縁端部は丸くおさめる。脚柱は強く屈曲し水平に短くのびる。

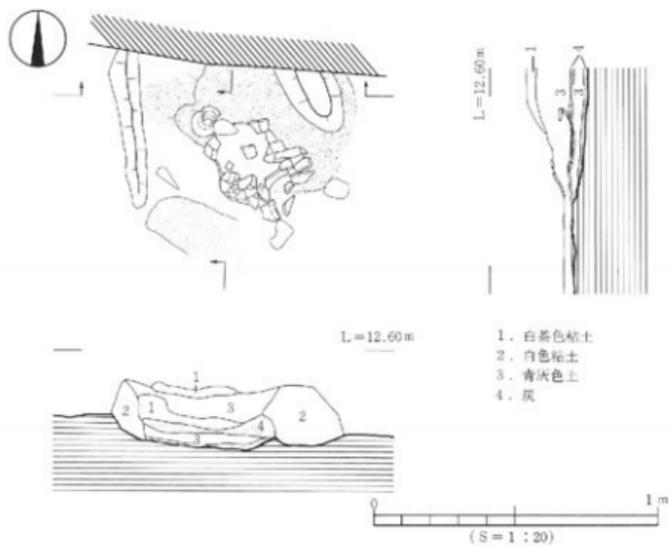


第59図 S B I 測量図

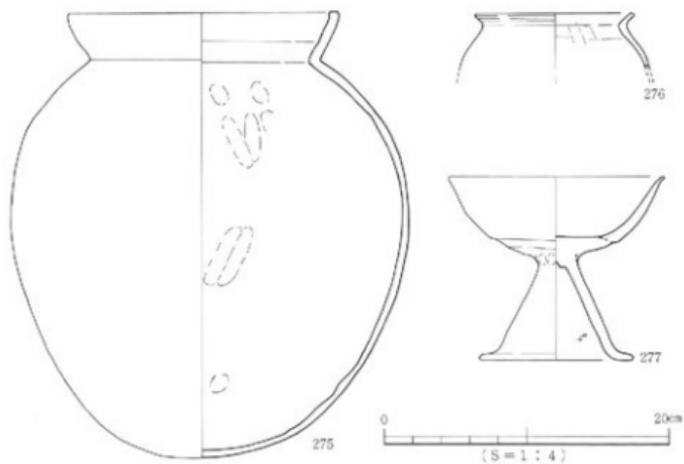


第60図 S B I 出土遺物実測図

調査の概要



第61図 SBIカマド測量図



第62図 SBIカマド出土遺物実測図

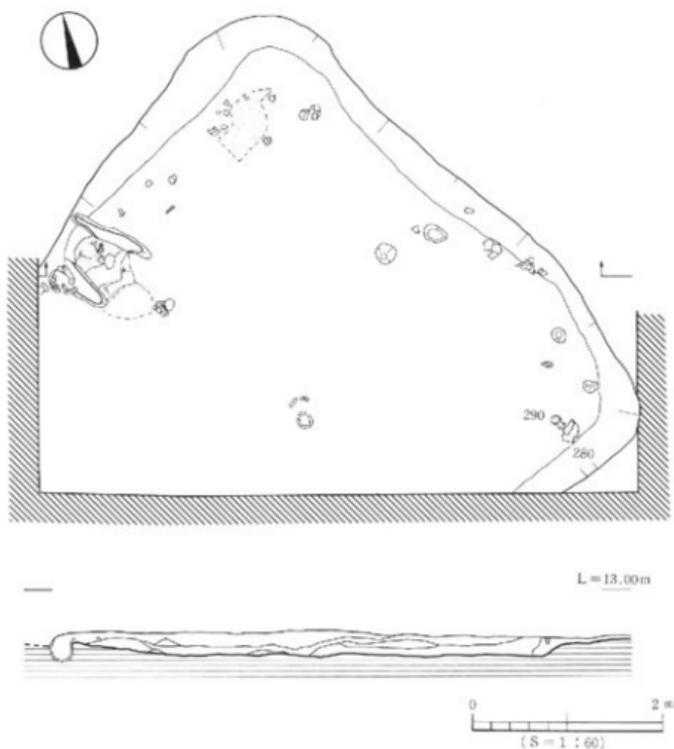
SB 2 (第63図、図版13)

B区南西部での検出でSB 1から約6 m南に下がった位置にあり、SB 1とはほぼ向きを同じにし、1辺約6 m前後の方形を呈する。住居内北側には炭の層が薄く広がっている。支柱穴は未検出である。出土遺物は、土師器の高環が比較的多く、須恵器片はみられないが、住居内南東隅の床面上に須恵器の皿が1点だけ出土している。住居北壁中央部付近に造り付けのカマドが付設される。

出土遺物 (第64図、図版43)

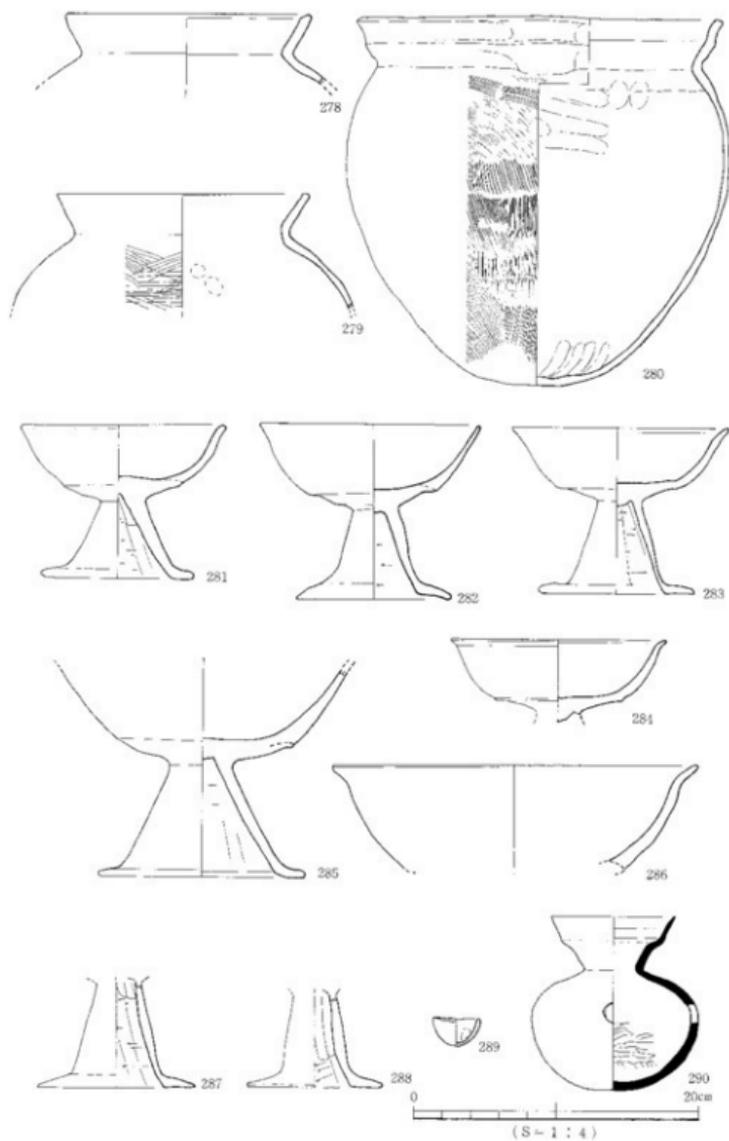
土師器

袋形土器 (278、279) 278の口縁部は内湾してたちあがり、端部は内傾する平面をなす。279の口縁部は上外方に開く。胴は肩がはり、調整は粗いハケ目を施す。



第63図 SB 2測量図

調査の概要

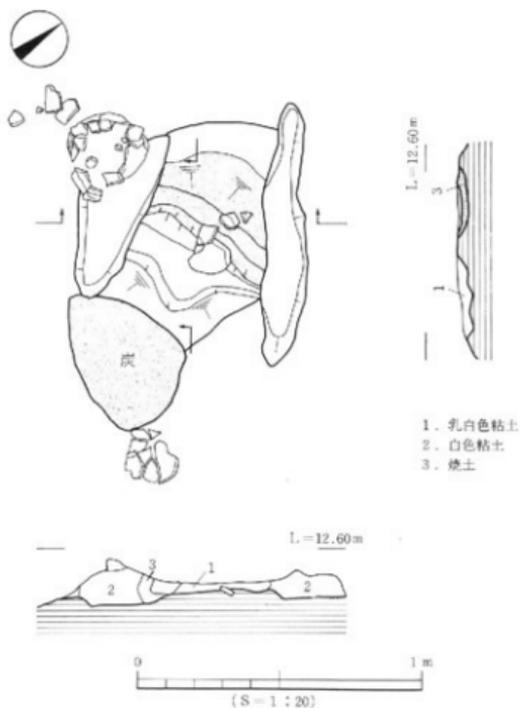


第64図 S B 2 出土遺物実測図

甕形土器 (280) 280は口縁部が片口状を呈する。口縁部は外上方にたちあがったのち、段をなして外反する。胴部外面の調整はハケ目、内面はナデ調整される。

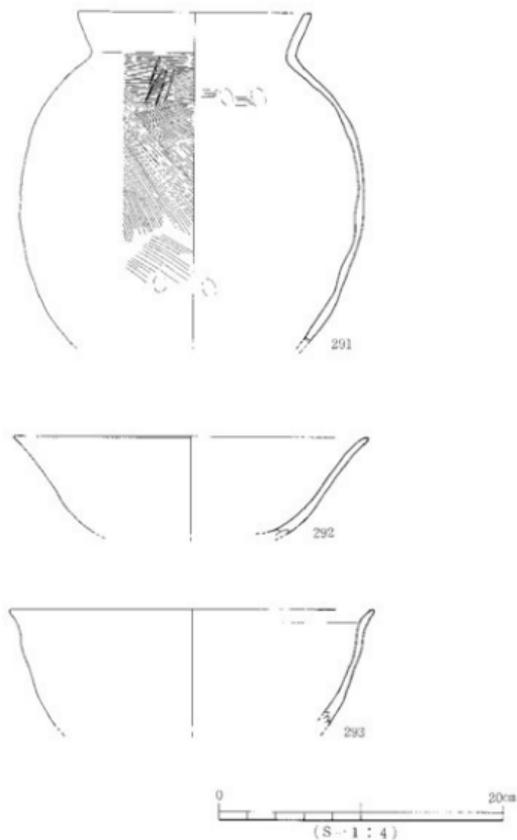
高坏形土器 (281~288) 281は坏部に段を有し、外反する口縁部。端部は丸くおさめる。脚柱は直線的に開き脚幅は強く屈曲して水平に短くのびる。282は坏部に段を有し、脚柱はなかぶくらし裾部は屈曲して内湾して開く。283の坏部は段を有し、外反する口縁部。脚柱は強く屈曲して水平にのびる。284は脚が欠損する。坏部は段を有し、口縁部は外反し端部は先細る。285、286は比較的大型である。285の口縁部は欠損するが坏部は深く、坏部外面は段を有する。脚柱は円錐形で裾部は屈曲し水平に短くのびる。286は推定口径25.2cmを測る。口縁部は外反し端部は丸くおさめる。287、288の脚柱は中ぶくらし、裾部は強く屈曲する。脚柱内面はヘラケズリ痕を明瞭に残す。

手握土器 (289) 内湾してたちあがり外上方に開き、端部は先細る。



第65図 SB2カマド測量図

調査の概要



第66図 S B 2 カマド 出土遺物実測図

須恵器

甕 (290) S B 2 で出土した唯一の須恵器で、口縁部が一部欠損するが、ほぼ完形での出土である。胴部は偏球形で、口頸部は細い基部から外反し屈曲するが稜はあまい。

S B 2 カマド (第65図)

住居北壁中央部での検出である。カマド基底面は住居床面より高く、全体を掘りくぼめることなく焚き口部だけを掘りくぼめている。カマド前面にはかきだされたとおもわれる炭層

がみられる。遺物はカマド内から土師器の高
 坏、カマドの左袖奥外側で甕が出土している。

出土遺物（第66図、図版44）

甕形土器（291） 291は底部が欠損する。
 口縁部は外上方に開き、端部は上方に面をな
 す。口縁下の肩部に長さ2～3cmの4条の沈
 線を施す。外面の調整はハケ目を施す。

高坏形土器（292、293） 292、293とも坏部
 だけの出土で坏底以下は欠損する。両者の推
 定口径は20cmを超え、口縁部は外反し、端部
 は丸くおさめる。292は293よりたちあがる角
 度が浅い。

S B 3（第67図）

コーナー部分だけの検出でそのほとんどは調
 査区外となる。土坑の可能性もあるが、ここ
 では住居址としておく。平面状態、規模とも
 不明であるが、方形を呈するものと思われる。遺物は土師器・高坏の脚部が1点だけ出土し
 ている。

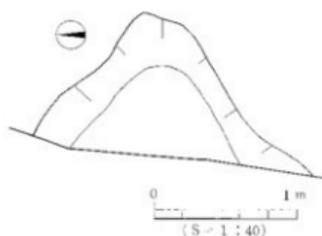
出土遺物（第68図）

高坏形土器（294） 294の脚柱は外反しながら裾部へとつづく。

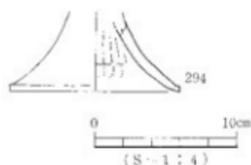
その他の遺構・遺物

A区では土坑状・柱穴状・溝状の遺構を検出した。調査部分には第X層の推積がみられず
 遺構埋上は第IX層系の茶褐色土で、出土遺物はなく時期・性格を判断できるものは出土して
 いない。

B区では溝状遺構を検出している。竪穴住居の間を南北に走る溝で、幅1.1m～1.6m、深
 さ0.4m、埋土は明青灰色粘質土であり、出土した遺物は全くない。時期不明の溝であるが、
 竪穴住居との切り合い関係から住居より先行するものである。



第67図 S B 3 測量図



第68図 S B 3 出土遺物実測図

第VI章 結 び

〔古墳時代〕

竪穴住居

第Ⅴ層上面で検出したSB1、SB2の平面形は方形、規模は一辺6m、北壁のほぼ中央部にカマドがあるなど、規模や施設において同形態を呈し、出土品も時期差はみられないことから、同時期に併存していた可能性が高いものである。

両者とも住居内の埋土からは須恵器は出土しなかったが、SB2の床面からは完形の甕が1点出土しており、注目される。この甕は田辺氏の陶色編年によればTK208ないしTK232型式に比定できるものであり、5世紀後半には住居は廃絶したものと考えている。市内において住居内に甕が一点だけ残される事例は、辻町遺跡2次のSB2より時期的に先行すると思われる北久米浄蓮寺遺跡3次調査地のSB9にみられる。SB9の甕はTK216もしくはON46にあたるものであるが、その出土状況は「住居廃絶時に持ち出される事なくカマドの側に置かれ、甕とカマドが極めて密接な関係にあった」とされ、カマド祭祀に関わるものと評価されている（橋本 1995）。辻町遺跡SB2では甕はカマド側の壁とは対面する住居の南東隅近くの床直上で出土し、カマド祭祀という状況はよみとれない。甕周辺には土師器片が比較的多く出土しており、この場所で何らかの行為が執り行われた可能性はあるとしても、浄蓮寺遺跡のSB9とは状況を異にしている。カマドを伴う住居においては廃絶時に甕が持ち出される事なく残されるという点は共通しており、同一の理念もしくは祭儀が存在したものと考えられる。須恵器が大量に流通し消費されだす以前の集落内における須恵器使用の特殊性を表わすものとして注目されるものである。

カマド内出土遺物

SB1、2のカマド内からは高坏と甕が出土しているが、SB1の出土状況は熱焼部に高坏を伏せ、甕は口縁部をカマドの焚口に向けて倒れたものである。さらに高坏と甕は外面は煤が付着し明らかに2次的に火を受けた形跡が認められるものであり、おそらく住居廃絶時には伏せた高坏の脚部に甕が置かれていたものと思われる。またSB2においても煤が付着し、火を強くうけた形跡が認められる甕と高坏の破片が出土しており、SB1と同形態を呈するものと考えられる。

ところで、カマド廃絶時においては熱焼部に坏部を伏せた土師器の高坏を祭祀に関わるものとして評価される場合があるが、本遺跡SB1の高坏は、出土状況から推察すると祭祀具ではなく、日常の支脚として使用していたものと考えられる。

祭祀跡

本遺跡ではSXとして取り扱った遺構がある。SXは出土状況と形態から竈地を伴う土器

群と、窪地を伴わずに検出した土器群とに大別することができる。窪地を伴うものにはSX1・SX2・SX3・SX7、窪地を伴わず平面的に土器群なすものにはSX4・SX5・SX6がある。窪地を伴うSX1・3・7には焼土、炭が見られ、窪地内から出土する遺物は土師器の甕、高坏、埴形土器、須恵器の蓋坏、高坏、甕などが出土したほか、SX1からは焼けたタイ類の上顎骨が出土している。SX2からは、土師器、須恵器とも出土しているが、土師器甕の出土が多いものであった。

SX4は、甕を中心としてその周囲に土師器埴や須恵器高坏、蓋坏がおかれた状況を呈する。SX5は、土師器を主体とし、SX6は、須恵器を主体としており、距離的にも数mの距離にあって、あたかも土師器と須恵器が意識的に分けられた状況を呈し対称的である。

SXの時期については、出土した須恵器からTK23ないし、TK47型式に比定できるものである。層的にみれば第IX層中のSX5・6→第IX層上面のSX1・2・3・4・7となるが、SX6と第IX層上面でSXから出土した蓋坏の形態からは、さほどの時間差はみれない。しかし、これら全ての行為が同時に行われたとするには層的にも問題があり、数年単位のなかでこれらの行為が行われたものといえる。SX4から出土した無蓋高坏の脚部は長脚化しており、TK47に比定できるものである。よって、各SXは6世紀初頭頃の遺構と考えられる。

松山平野南部に立地する作出遺跡では祭祀に関連する大規模な土器群(SX01-03)が検出され、その中でも时期的に新しいとされるSX01ないしSX02(新相)に辻町遺跡のSXは後続するものと考えている。

SX出土の遺物は一括性が高いものであり6世紀初頭の土器様相を表すものとして好資料となるものである。

また、SX周辺には完形の土器が点在する他、焼土、炭がみられるものであった。焼土跡については、煤の付着した甕の出土が多いことから、煮炊きが行われた可能性が高いものであり、時期はSXと同じと考えている。

石製模造品

特異なのは祭祀遺物といわれる石製模造品がSX中からは一点も出土しなかったことである。辻町遺跡1次調査地のSX1からは滑石製の白玉が壺の内外から19個出土していることから、2次調査地においてもSX中に出土する可能性があり、検出時と掘った土は採取し篩かけたり、水洗いをするなど注意を払ったが一点も出土しなかった。ただ、SX6から数m離れた第IX層中から勾玉が1点だけ出土している。

作出遺跡のSX中には、白玉、剣形、紡錘車などの石製模造品のほか、鉄製品も出土している。このことが、祭祀の対象による相違によるものか、時期差によるものか検討を要するものである。

出土遺物

第IX層上面から出土した遺物は、土師器では甕、甕形土器が比較的多く、須恵器は蓋環、高環の出土量が多い。この様な出土状況を考えれば、第IX層中で検出したSX5の土師器高環の多さが注目される。IX層中から上面にかけての僅かな時間幅の中に、当遺跡内における土師器高環の減少と須恵器高環の出土増加の現象がみられる。このことは須恵器が普及していくにあたり、土師器高環の使用が減少したものと考えられないだろうか。

第X層からは須恵器は出土するものの量的に少なくなる。しかもIX層中から上面でみられる蓋環、高環といった器種が見られず、器台形土器、甕形土器に限定された状態である。この様な出土状況は、TK23以降、急激に須恵器の蓋環、高環の出土量が多くなるという市内における出土傾向を端的に示しているものと言える。

その他、IX層中からは置きカマドの底部や韓式系土器が出土している。外面に格子タタキ目か施された202の甕形土器や203の鉢形土器である。韓式系土器については市内においてはその出土事例も少ないが、樹味高木遺跡3次調査地でも包含層中から出土しており、今後出土事例は増えるものと思われる。

遺跡の広がり

辻町遺跡1調査で検出された祭祀遺構が当調査地にも広がる事が確認されたが、祭祀の対象については特定することはできなかった。しかし、遺跡の範囲はさらに広がる様子が伺えるもので、辻町遺跡2次調査地周辺の試掘調査の結果からは東及び西側には展開されず南北方向に長く展開するものとみられる。このことは現在の宮前川とは向きを同じにすることから地形的環境の変化と生産地の存否の確認をも含め、これらSXの性格を判断するべきであろう。

出作遺跡においては大規模な遺物群のほかにも、小規模な土器群が点在しているという、辻町遺跡2次で検出したSXを小規模な一群とすれば、本調査地周辺にも大規模な遺物群が存在する可能性があるのではないだろうか。

辻町遺跡2次で営まれた5世紀後半～6世紀初頭の遺構は、やがて第VIII層の灰白色砂が薄く覆う。その後第VII、VI層が厚く堆積し埋没していく。その後、この地が新たに開発されるのは13世紀になってからである。

〔相原〕

〔中世〕

今回の調査で、調査区南西部において辻町遺跡1次調査で格出した中世の遺物包含層を確認した。

第VI層上面では、掘立柱建物、鋪跡状遺構と考えられる小溝群、土坑墓、曲げ物を使用した井戸跡や柱穴が検出された。また、出土物には和泉型瓦器柄、回転糸切りの底部片がみられる。よって、第VI層上面は13世紀代の集落面と言える。近接する古瀬遺跡においても同時

期の集落関連遺構が確認されており、当地一帯（一円）には広く、13世紀の集落が展開していたと推察される。今回の調査において得られた資料をもとに、宮前川中流域における中世の生活域・墓域・生活域についての集落構造はより鮮明となることであろう。

〔河野〕

【参考文献】

- 石野博信 『生活と祭祀』『古墳時代の研究第3巻』 葦山閣出版 1991
- 田辺昭三 『陶器古窯址』I 平安学園考古学クラブ 1966
- 田辺昭三 『須恵器大成』 角川書店 1981
- 韓式系土器研究会 『韓式系土器研究Ⅲ』 1991
- 相田則美 編 『出作遺跡』 松前町教育委員会 1993
- 梅木謙・真木 浩 『辻町遺跡』『朝美澤遺跡・辻町遺跡』（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1992
- 橋本雄一 編 『北久米浄蓮寺遺跡～3次調査地～』（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1994
- 梅木謙・宮内慎一 『梅味高木遺跡3次調査地』『桑原地区の遺跡Ⅱ』（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1994
- 広島県 『車戸千軒町遺跡 第28・29次発掘調査概要』広島県車戸千軒町遺跡調査研究所 1980
- 栗田正芳 編 『古照遺跡～第7次調査～』（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1992
- 上田 真・水本完児 『南江戸編目遺跡』 松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター 1992

遺構・遺物観察表

— 凡例 —

(1) 以下の表は、本調査検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(2) 各記載について。

法量欄 () : 復元推定値

形態・施文欄 土器の各部位名称を略記

例) 口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、胴底→胴部～底部。

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。()中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長(1~4)多→「1~4mm大の石英・長石を多く含む」である。

焼成欄の略記について。●→良好、○→良、△→不良。

表1 B区第V層出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図類
				外 面	内 面				
1	土師器 埴	口径(4.95) 高さ 1.5	随り付什製高直。	⑤ 泥板未切り	⑤ 裏白 押えながら ヨコナテ	焼灰色 淡褐色	歪 ○		
2	土師器 甕	口径 8.9 高さ 1.5 底径 5.0	内湾気味で口縁縁部が若干 危座している。	⑤ ヨコナテ ⑥ 右回転未切り	⑥ 割~底 ヨコナテ	灰白色	歪 ○		
3	土師器 甕	口径 8.3 高さ 1.5 底径 5.0	真鍮的に外方向に歪く。	⑤ ナテ ⑥ 右回転未切り	⑥ 割~底 ヨコナテ	灰白色	歪 ○		
4	土師器 甕	口径 9.0 高さ 1.5 底径 5.8	内湾気味に立ち上がり口縁 部が突出。	⑤ ヨコナテ ⑥ 右回転未切り	⑥ 割~底 ヨコナテ	乳白色	歪 ○		15
5	土師器 甕	口径 9.1 高さ 2.7 底径 5.4	内湾気味に立ち上がる。	⑤ 割~胴 ヨコナテ ⑥ 右回転未切り	⑥ 割~底 ヨコナテ	灰白色	歪 ○		15
6	土師器 甕	口径 9.4 高さ 1.3 底径 6.15		⑤ ナテ ⑥ 回転未切り、すの こ裏	⑥ 割~底 ナテ	灰白色	歪 ○		
7	土師器 甕	口径(8.0) 高さ 2.55 底径(5.0)	内湾気味に立ち上がり口縁 部部がやや外反する。	⑥ 回転未切り	真鍮による不明	淡褐色	歪 △		
8	土師器 甕	口径 9.3 高さ 1.8 底径 6.0	外方向に大きく吹き口縁部 が膨らむ。	⑤ 割~胴 ヨコナテ ⑥ 回転未切り	⑥ 割~底 ヨコナテ	乳白色	歪 ○		

出土遺物観察表

B区第V層出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外装) 色調 (内装)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
9	瓦器 Ⅱ	口径 8.9 残高 1.55	口縁部が外反する。	㊦ 指押え欠	㊦-㊦ ナテ	灰青色 灰白色	石-表(1-3) ○		15
10	土師質 土器	口径(36.6) 残高 2.7	口縁部が外反し、更に直曲により内傾し上方内へのびる。	㊦-㊦ ヲコナテ	磨滅により不明	褐色 ○	石-表(1-4) ○		16
11	土師質 土器	口径(30.3) 残高 3.2	口縁部が外反し更に直曲により内傾する。	㊦-㊦ ヲコナテ ㊦-㊦ ヲコハテ	㊦ ヲコハテ ㊦ ヲコナテ	にぶい 赤褐色	石-表(1-2) ○		16
12	Ⅱ	口径(34.0) 残高 3.05	口縁部が外反し直曲部が平らな面をなし直縁部が軽く上方内へのびる。	㊦-㊦ ヲコナテ	㊦-㊦ ヲコナテ	にぶい 赤褐色	石-表(1-4) ○		
13	Ⅱ	口径(29.1) 残高 2.95	「く」字形の口縁部より直線的に外方向へのび直縁部が平ら。	㊦-㊦ ヲコナテ	㊦-㊦ ヲコナテ	にぶい 赤褐色	石-表(1-4) ○		
14	Ⅱ	口径(30.7) 残高 3.93	「く」字形の口縁部より直線的に外方向へのび直縁部が平ら。	㊦ ハテ欠少し	㊦-㊦ ココナテ ヨコハテ(6-7表/cm)	灰白色 にぶい 赤褐色	石-表(1-2) ○		16
15	Ⅱ	口径(31.6) 残高 3.6	「く」字形の口縁部より直線的に外方向へのび直縁部に傾がつく。	㊦ ヲコナテ ㊦ ナテ	㊦-㊦ ヲコナテ	にぶい 赤褐色 にぶい 褐色	石-表(1-2) ○		16
16	土師質 土器	口径(32.1) 残高 3.7	「く」字形の口縁部より直かに外反する。	㊦-㊦ ヲコナテ	㊦ ハテ欠少し	褐色 ○	石-表(1-2) ○		6
17	Ⅱ	口径(36.4) 残高 4.2	「く」字形の口縁部より直かに外反する。	ココナテ タテハテ	㊦-㊦ ヨコハテ(5-6表/cm)	褐色 灰白色	石-表(1-2) ○		16
18	Ⅱ	口径(36.5) 残高 5.9	口縁部が外反する。	㊦ ヲコナテ ㊦ ヲコハテ(7-8表/cm)	㊦-㊦ ヲコハテ	黒褐色 暗褐色	石-表(1-3) ○		16
19	土師質 土器	口径(41.0) 残高 6.0	直立形状の口縁部に垂れ気味の筋を貼り付ける。	㊦-㊦ ヲコナテ	㊦-㊦ ヲコナテ	にぶい 褐色	石-表(1-3) ○		16
20	土器 Ⅱ	口径(26.3) 残高 4.7	内凹した胴部をもつ。	㊦ ヲコナテ ㊦ 指押え	㊦-㊦ 横取柄の残文	ナテ 灰白色	石 ○		16
21	Ⅱ	口径(5.1) 残高 2.9	直立形状の高直が外方向に張り出す。	磨滅により不明	磨滅により不明	灰色 灰白色	磨 ○		
22	瓦器 Ⅱ	口径 8.8 残高 1.9	直縁部から口縁部にかけて一定の厚さを示す。	㊦ 指押え	磨滅により不明	赤褐色 灰色	石-表(1-3) ○		
23	瓦器 土器	口径(31.0) 残高 9.4	口縁部が外反し直縁部が平らな面をなす。	㊦-㊦ ヲコナテ (工具による押えあり)	㊦-㊦ ヲコナテ	灰白色 ○	石-表(1-3) ○		16
24	土師質 土器	口径(28.0) 残高 6.05	口縁部は丸縁のある直角形。	回転ココナテ	回転ココナテ	灰白色 灰色	石-表(1-5) ○		16
25	Ⅱ	口径(32.8) 残高 4.8	口縁部が丸い気味に上方内へのびる。	磨滅により不明	磨滅により不明	ナテ 褐色 灰色	磨 ○		16

調査の概要

B区第V層出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
26	須恵 土師器	口径(28.0) 残高 2.9	口縁部が張り気味に上方 向にのびる。	(11-新) ヨコナデ	(11-調) ヨコナデ	灰白色	素 ○		16
27	有底 碗	口径(15.3) 残高 4.1	胴部から口縁部にかけて直線的 にのびる。	施文	施文	灰白色 #1-723	○		16
28	白磁 碗	口径(6.56) 残高 2.2	変形の片割を縁くために削り 出している。 (脚部へラ切り、脚部ナデ)	(脚-新) ヘラツズ; (脚) 脚部へラ切り	(脚-調) 脚部	灰白色	○		16
29	〃	口径 6.7 残高 1.65	器内の内面を縁くために削り 出している。 (内面、施文、へラ削り)	(脚) 脚部ヨコナデ	(脚) 脚部ヨコナデ	灰白色	石(2) ○		16

表2 B区第V層出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材 質	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
30	石鏡	1/10	滑石	5.2	4.7	1.8	51.2		15
31	砥石	3/4	凝灰岩	6.7	4.5	3.1	104.8		15

表3 A区SB01出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
32	正胎 埴	口径(13.4) 底高 4.3 底径(5.4)	有底三角形状の器台より体 部が削り出される。	(脚) ナデ (脚) 指環状	脚部のため不明	出灰色	素 ○		17

表4 B区SK01出土遺物観察表 鉄製品

番号	器種	残存	材 質	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
33	刀子	ほぼ完全	鉄製	23.4	2.6	0.9	92.17		17

表5 B区SK01出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
34	丸形 埴	口径(16.3) 残高 4.6	内面しながら立ち上がり口 縁部が丸い。	(脚) 施文 (脚) 指環状	施文	黒灰色	素 ○		17

出土遺物観察表

表6 B区SE01出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外蓋) 色調 (内蓋)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
35	ヤリ蓋 式	口径(16.2) 残高 3.5 先径(8.8)	平底の底面より口縁部が外反する。	磨滅のため不明。 ㊦ 口縁糸切り	磨滅のため不明。	灰白色	密 ○		17
36	■	口径(14.2) 残高 3.7 底径(7.7)	平底の底面より内湾気味に立ち上がる。	磨滅のため不明。	磨滅のため不明。	にふい 褐色	密 ○		17
37	式野 用	口径(14.1) 残高 5.05	彫刻化した断面三角形状の高台をもつ。	磨滅のため不明。		灰白色	密 ○		
38	■	口径(15.5) 残高 4.49 底径(4.55)	彫刻化した断面三角形状の高台をもつ。	磨滅のため不明。	磨滅のため不明。	灰白色	焼成 ○		17
39	■	口径(16.0) 残高 4.2	僅かに外反しながら立ち上がり口縁部が大きい。	㊦ 横文2条 ㊧ 唇部紋	㊨ 横波状の横文	灰灰色	焼成 ○		17
40	■	口径 残高	内湾気味に立ち上げる。	㊧ 唇部紋	磨滅のため不明。	灰白色	密 ○		17
41	■	高径(9.0) 残高: 1.3	断面環状の高台を筒形に付ける。	㊩ ヨコナデ	磨滅のため不明。	黒色	焼成 ○		17
42	■	底径(1.0) 残高 9.0	断面環状の高台を筒形に付ける。	㊩ ナデ	㊪ ナデ	黒色	密 ○		17

表7 B区SE01出土遺物観察表 木製品

番号	器 種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	備 考	図版
43	井戸御飯	全長(48.0) 径 17.2 厚 2.3	笹目材を漆(桐)り出しており、左縁部に加工痕が残る。		18
44	井戸御飯	全長(53.7) 径 17.8 厚 1.9	笹目材を漆(桐)り出しており、左縁部に切取痕が残る。		18
45	つらのこ	全長 14.2 最大径 4.4 最小径 2.25	丸丸の両端を切削し、中央部を両方から筒形にくり抜く。半蓋が這かっている。		18
46	不明	全長(20.1) 径 2.6	右端が切削されており、上縁が半蓋されている。		18
47	加工木	全長 18.8 径 5.7 厚 2.8	笹目材を彫り出しており、上下縁は斜めに切削されており、下端部は両面から筒形に突っ出ている。右端中央部下に並立形状の突起が見られる。		18

表8 SX1出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外周) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
48	罎	口径(11.1) 残高 6.5	口縁部はゆるやかに外反し、 胎部は丸い。	①口縁 ココナテ ② ハケ(6本/cm)	①口縁 ココナテ ③ ナズリーナテ	灰褐色	石・長(1-0) ○		
49	罎	口径(10.8) 残高 5.0	口縁部はゆるやかに外反し、 胎部は丸い。	①口縁 ココナテ 胎部の為不明。	①口縁 ココナテ ③ ナズリーナテ	灰褐色	石・長(1-0) ○	黒点	
50	罎	口径(12.3) 残高 14.5	口縁部はゆるやかに外反し、 胎部は丸い。	①-② ココナテ ③-④ ナテ	ナテ	灰白色	石・長(1-0) ○	黒点	20
51	罎	口径 17.8 残高 24.1	口縁部は厚の薄った体部から 「く」の字状に膨出し、真 横写に伸びる。胎部はやや 肥厚する。	ハケ(10-11本/cm)	①口縁 ココナテ ② ナテ(指跡画) ③ 胎部の為不明。	にぶい褐色	石・長(細 紋-4) △	スス 黒点	20
52	罎	口径(8.0) 残高 11.8	頸部部の胎部から、上外方 に突出したちちあがったの ちやや、外反する口縁部。	ハケ(不定方向)→ナテ	ナテ ② しぼり痕	にぶい褐色	石・長(細 紋-2) ◎		20
53	罎	口径 7.9; 器高 11.2	胎部を粗する胎部から上外 方にやや内湾してちちあが ったの外反する口縁部。	①口縁 ココナテ ② ハケ(不定方向)→ナテ ③ ナテ	①口縁 ココナテ ②-③ ナテ	にぶい褐色 赤褐色	石・長(細 紋-2) ○	黒点	20
54	罎	口径(17.3) 残高 7.4	内湾した後、上方に立ち上 がる口縁部。胎部は丸い。	① ナテ ②-③ ハケ→ナテ	ナテ	にぶい褐色	石・長(1-0) ○	黒点	
55	罎	口径 13.3 器高 5.5	底部から内湾して立ち上 がった後、口縁部高くて胎を なし、内湾部は立ち上がり 胎部は丸く納める。	胎部の為不明。	胎部の為不明。	灰褐色	石・長(1-0) ○		20
56	罎	口径(11.4) 器高 3.0	内湾した後、廣縁的に立ち 上がる口縁部。胎部は丸い。	ナテ	ナテ	にぶい褐色 灰褐色	骨 色 ◎		
57	高平	口径 16.4 残高 5.1	内湾部は外上方にちちあ がり、口縁部近くで外反す る。胎部は丸い。	胎部の為不明。	胎部の為不明。	洗灰褐色	石・長(1-0) ○	黒点	
58	高平	口径(16.6) 残高 6.3	丸度の内湾部から、上外方 に立ち上がり、胎部は丸い。	胎部の為不明。	胎部の為不明。	褐色	石・長(細 紋-4) △		
59	高平	口径(10.5) 残高 9.3	胎部は丸い。胎部、胎部は 胎部内面に胎をもつ。胎内 面に粘土巻き上げ痕残す。	胎部の為不明。	①胎部 ヘラツズリ	洗灰褐色	石・長(1-0) ○		
60	高平	口径(11.6) 口径(16.5) 残高(13.4)	胎部は丸い。胎部、胎部は 胎部内面に胎をもつ。胎内 面に粘土巻き上げ痕残す。	胎部の為不明。	①胎部 ヘラツズリ	洗灰褐色	石・長(1-0) ○		20
61	高平	口径(11.4) 残高 7.7	胎部は丸い。胎部、胎部は 胎部内面に胎をもつ。胎内 面に粘土巻き上げ痕残す。	胎部の為不明。	①胎部 ヘラツズリ ② ココナテ	黄褐色	石・長(1-0) ○		
62	高平	口径 11.3 器高 4.2	やや扁平な胎部で、胎は 丸い。口縁部は内湾する 内面。胎内面に同心円文。	① 同心ヘラツズリ ② 胎部ナテ	胎部ナテ	灰色	長(1-4) ◎		21
63	高平	口径 11.6 器高 4.3	胎部は丸く、胎は丸く、 丸い。	① 胎部ヘラツズリ ② 胎部ナテ	胎部ナテ	灰色	石・長(1-0) ◎		21
64	高平	口径(11.8) 残高 4.4	やや扁平な胎部で胎は丸 く丸い。	① 胎部ヘラツズリ ② 胎部ナテ	胎部ナテ	緑褐色	石・長(1-0) ◎		

出土遺物観察表

S X 1 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	種類	法量 (cm)	形態・施文	調 整		(外蓋) 色調 (内蓋)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
65	片蓋	口径(11.5) 器高 4.4	天井部は丸く、縁は段状による。口縁部は内傾する内面。	(A) 回転ヘラ削り (B) 回転ナデ	回転ナデ	黄灰色 地灰色 灰色	F-区(1-3) ◎		
66	片蓋	口径 11.9 器高 4.5	天井部はやや丸みを帯び、縁は段状による。口縁部は内傾する段をもつ。	(A) 回転ヘラ削り2/3 (B) 回転ナデ	回転ナデ	青灰色	長(1-4) ◎	21	
67	片蓋	口径 11.9 器高 4.5	扁平な天井部。縁は鈍く、段状による。口縁部は内傾する内面。	(A) 回転ヘラ削り (B) 回転ナデ	回転ナデ	灰色	石(長(編 製-3)) ◎		
68	片蓋	口径(12.7) 器高 4.1	やや扁平な天井部。縁は鈍く、口縁部は外反し、凹部をなす。	(A) 回転ヘラ削り1/3 (B) 回転ナデ	回転ナデ	青灰色 緑灰色	石(長(編 製-1)) ○		
69	片蓋	口径(12.2) 器高 5.4	天井部は丸く、縁は短く鈍い。口縁部は凹部。	(A) 回転ヘラ削り1/2 (B) 回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	石(長(編 製-2)) △		
70	片蓋	口径 12.8 器高 4.5	やや丸みを帯びる天井部。縁は短く鈍い。	(A) 回転ヘラ削り (B) 回転ナデ	回転ナデ	青灰色	石(長(編 製-1)) ○	21	
71	片身	口径 (9.8) 器高 5.5	たちあがりは、わずかに内傾し、端部は平面。	(B) 回転ナデ (C) 回転ヘラ削り1/2	回転ナデ	灰白色	石(長(1-5)) ○		
72	片身	口径 (9.3) 器高 4.1	たちあがりは内傾し、端部は段をなす。	(B) 回転ナデ (A) 回転ヘラ削り	回転ナデ	青灰色	石(長(1-5)) ◎		
73	片身	口径 10.0 器高 4.5	たちあがりはわずかに内傾し、端部は凹部。	(B) 回転ナデ (A) 回転ヘラ削り2/3	回転ナデ	青灰色	石(長(1-4)) ◎	21	
74	片身	口径 10.4 器高 5.9	たちあがりは内傾したのち直立し、端部は洗輪によりわずかな段をなす。	(B) 回転ナデ (A) 回転ヘラ削り	回転ナデ	青灰色	石(長(1-5)) ◎	21	
75	片身	口径(10.3) 器高 5.1	たちあがりは内傾し、端部は凹部。底部は上外方に伸びる。	(B) 回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	石(長(1-5)) ○		
76	片身	口径 10.6 器高 4.7	たちあがりは内傾し、端部は段をなす。底部は扁平。器底はやや深い。	(B) 回転ナデ (A) 回転ヘラ削り3/4	回転ナデ	青灰色	長(1-3) ◎		
77	片身	口径 11.1 器高 5.0	たちあがりはわずかに内傾し、端部は凹部。	(B) 回転ナデ (A) 回転ヘラ削り2/3	回転ナデ	灰色 明緑灰色	石(長(1-5)) ◎	21	
78	片身	口径 11.0 器高 4.8	たちあがりは内傾し、端部は凹部をなす。	(B) 回転ナデ (A) 回転ヘラ削り2/3	回転ナデ	青灰色	石(長(1-4)) ◎	21	
79	片身	口径 11.1 器高 4.8	たちあがりは内傾し、端部は段状で外反する。口縁部は凹部をなす。	(B) 回転ナデ (A) 回転ヘラ削り2/3	回転ナデ	青灰色	石(長(1-4)) ◎		
80	蓋	口径 12.2 器高 6.1	天井部は丸く、器底が深い。つまみは中央部がくぼむ。縁は短く鈍い。	(A) 回転ヘラ削り2/3 (つまみ) 回転ナデ (B) 回転ナデ	回転ナデ	灰白色	石(長(1-3)) ◎	23	
81	蓋	口径 11.8 器高 5.4	天井部は丸く、つまみ中央部は平坦。	(A) 回転ヘラ削り2/3 (つまみ) 回転ナデ (B) 回転ナデ	回転ナデ	灰色	石(長(1-3)) ◎	23	

調査の概要

SX1 出土遺物観察表 土製品

13

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
82	壺	口径 11.6	唇部が高く、後の上下は狭くナテられる。つまみは中央部がくぼむ。	④ 回転ヘラ作り つまみ 回転ナテ ⑤ 回転ナテ	回転ナテ	灰白色 灰色	赤黒(1-2) ◎		
		唇高 5.8							
83	高杯	口径(9.7)	たちあがりは内傾した後、直立し、肩部は内傾する凹部。胴は三方にスカンあり。	④ 回転ヘラ作り ⑤ 回転ナテ	回転ナテ	灰色	赤黒(1-2) ◎		22
		唇高 7.7 器高 8.1							
84	高杯	口径(10.2)	たちあがりは内傾した後、直立し、肩部は内傾する凹部。胴は三方にスカンあり。	④ 回転ヘラ作り つまみ 回転カキ目 ⑤ 回転ナテ	回転ナテ	青灰色	長(1-4) ◎		22
		唇高 8.9 器高 9.6							
85	高杯	口径 10.7	たちあがりは内傾し、肩部は凹部。唇高部は浅い。胴は三方にスカンあり。	④ 回転ヘラ作り つまみ 回転カキ目 ⑤ 回転ナテ	回転ナテ	灰色	長(1-4) ◎		22
		唇高 9.0 器高 9.6							
86	高杯	口径(10.0)	たちあがりは内傾し、肩部は内傾する凹部。胴部は浅い。胴は三方にスカンあり。	④ 回転ヘラ作り ⑤ 回転ナテ	回転ナテ	青灰色	長(1-3) ◎		
		唇高 8.0 器高 8.1							
87	高杯	口径(10.8)	たちあがりは内傾し、唇部は凹部。唇高部は浅い。胴は三方にスカンあり。	④ 回転ヘラ作り つまみ 回転カキ目 ⑤ 回転ナテ	回転ナテ	青灰色	長(1-2) ◎		
		唇高 8.6 器高 8.7							
88	高杯	口径 11.1	たちあがりは内傾し、唇部は凹部。胴は三方にスカンあり。	④ 回転ヘラ作り つまみ 回転カキ目 ⑤ 回転ナテ	回転ナテ	灰色	長(1-4) ◎		22
		唇高 9.2 器高 10.3							
89	高杯	口径 11.0	たちあがりは内傾し、唇部は凹部。胴は三方にスカンあり。	④ 回転ヘラ作り ⑤ 回転ナテ	回転ナテ	青灰色	長(1-3) ◎		22
		唇高 9.0 器高 9.4							
90	高杯	口径(10.4)	たちあがりは内傾し、唇部は凹部。胴は三方にスカンあり。	⑤ 回転ナテ	回転ナテ		長(1-4) ○		
		唇高 8.6 器高 9.8							
91	高杯	口径 9.8	たちあがりは内傾し、唇部は浅くをなす。胴は三方にスカンあり。	④ 回転ヘラ作り ⑤ 回転ナテ	回転ナテ	黄褐色	長(1-5) ○		
		唇高 7.3 器高 8.7							
92	高杯	口径 10.9	たちあがりは内傾し、唇部は浅くをなす。胴は三方に凹部のスカンあり。	④ 回転ナテ	回転ナテ	青灰色	長(1-4) ◎		22
		唇高 8.2 器高 9.4							
93	高杯	口径(10.3)	たちあがりは内傾し、唇部は浅くをなす。胴は三方に凹部のスカンあり。	④ 回転ヘラ作り ⑤ 回転ナテ	回転ナテ	青灰色	長(1-5) ◎		
		唇高 8.2 器高 9.2							
94	壺	口径 9.4	乳部は流注文をめぐらし、口縁部は内傾する凹をもつ。肩部に流線1条をめぐらし、底に刺突文を施す。	④ 回転ナテ ⑤ 回転ナテ ⑥ 回転カキ目ナテ	回転ナテ 回転ナテ 指痕あり	灰色 灰白色	長(1-2) ○		23
		唇高 10.6							
95	壺	口径 11.6	体部に2条の流線をめぐらし、流線と流線との間に刺突文を施す。底部は突りきみ。	④ 回転ナテ ⑤ ナテ	回転ナテ 円形流注流線	緑灰色	長(1-3) ◎		23
		唇高 11.6							
96	壺	口径 12.3	体部に上下2条の流線をめぐらし、流線の間に流注文を施す。	④ 回転ナテ ⑤ 回転ナテ ⑥ 回転カキ目ナテ	回転ナテ 回転ナテ 工具痕	青灰色	長(1-2) ○		自然胎
		唇高 12.3							
97	高杯	口径(7.5)	口縁部は短く内傾する。唇部は浅く丸める。	④ 回転ヘラ作り ⑤ 回転ナテ	回転ナテ	青灰色	長(1-2) ◎		23
		唇高 6.1							
98	壺	口径(16.7)	頸部中央を突で区切り上下に流注文を施す。	ココナテ	ココナテ	灰白色	長(1-2) △		23
		唇高 1.5							

出土遺物観察表

S X 1 出土遺物観察表 土製品

(4)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
99	罌	口径 15.4 残高 3.7	外反する口縁部。頸部は無文。	ヨコナテ	ヨコナテ	明茶褐色	赤灰(1-3) ○		
100	罌	口径 18.0 残高 26.6	口縁部は直下にて尖角をのこらせる。頸部は文様を施さない。	① ヨコナテ ② カキ目 ③ 平行線 ④ 平行線 ⑤ 平行線	① 山線 ヨコナテ ② 山線 ヨコナテ ③ 山線 ヨコナテ ④ 山線 ヨコナテ ⑤ 山線 ヨコナテ	茶褐色	赤灰(1-3) ○	24	
101	罌	口径 20.3 残高 31.3	口縁部の下に灰帯を施付する。	① 山線 ヨコナテ ② 山線 ヨコナテ ③ 山線 ヨコナテ ④ 山線 ヨコナテ ⑤ 山線 ヨコナテ	① 山線 ヨコナテ ② 山線 ヨコナテ ③ 山線 ヨコナテ ④ 山線 ヨコナテ ⑤ 山線 ヨコナテ	灰白色	赤灰(1-3) △	25	
102	罌	口径(29.3) 残高 34.9	口縁部は上にて施し、口縁部に波状文を施す。	① ヨコナテ ② カキ目 ③ 平行線 ④ 平行線 ⑤ 平行線	ヨコナテ ヨコナテ ヨコナテ ヨコナテ ヨコナテ	灰白色 赤褐色	赤灰(1-3) ○	自然焼 25	
103	罌	口径(20.8) 残高 37.3	口縁部は、下方に施し、口縁部は文様を施さない。	① ヨコナテ ② カキ目 ③ 平行線 ④ 平行線 ⑤ 平行線	ヨコナテ ヨコナテ ヨコナテ ヨコナテ ヨコナテ	明茶褐色 灰白色	赤灰(1-3) ○	自然焼 25	

表 9 S X 2 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
104	罌	口径(13.6) 残高 4.1	外反して外上方にたががる口縁部。頸部は内無する面をなす。	ヨコナテ ナテ	ヨコナテ ナテ	明茶褐色	赤灰(1-3) ○		
105	罌	口径(13.6) 残高 4.4	外反してたががる口縁部。口縁部は内無する面をなす。	ヨコナテ ハケ(5-6本/cm)	ヨコナテ ナテ	明茶褐色	赤灰(1-3) ○	異変	
106	罌	口径 17.3 残高(30.4)	内反してたががる口縁部。口縁部は内に施す。内面は内無する面をなす。	① 山線 ヨコナテ ② 山線 ③ その他	① 山線 ヨコナテ ② 山線 ③ ナテ ④ その他	茶褐色	赤灰(1-3) △		27
107	罌	口径(17.0) 残高 6.9	内反してたががる口縁部。口縁部は内に施す。口縁部は内無する面をなす。口縁部は内無する面をなす。口縁部は内無する面をなす。	① 山線 ヨコナテ ② ハケ(9-10本/cm) ③ 山線 ④ 山線	① 山線 ヨコナテ ② 山線 ③ ナテ ④ ナテ	茶褐色	赤灰(1-3) △	空欄	28
108	罌	口径(13.8) 残高(30.9)	内反してたががる口縁部。口縁部は内に施す。口縁部は内無する面をなす。口縁部は内無する面をなす。口縁部は内無する面をなす。	① 山線 ヨコナテ ② ハケ(5-6本/cm)	① 山線 ヨコナテ ② 山線 ③ ナテ ④ ナテ	茶褐色	赤灰(1-3) ○	異変	27
109	罌	口径(14.4) 残高 11.7	外反してたががる口縁部。口縁部は、やや内無する面をなす。	① 山線 ヨコナテ ② ナテ ③ ナテ ④ ナテ	① 山線 ヨコナテ ② ナテ ③ ナテ ④ ナテ	明茶褐色	赤灰(1-3) △	異変	
110	罌	口径 18.3 残高 29.2	内反してたががる口縁部。口縁部は内無する面をなす。口縁部は内無する面をなす。口縁部は内無する面をなす。	① 山線 ヨコナテ ② ハケ	① 山線 ヨコナテ ② 山線 ③ ナテ ④ ナテ	茶褐色	赤灰(1-3) △		
111	罌	口径(20.2) 残高 27.2	口縁部は内反してたががる口縁部。口縁部は内無する面をなす。口縁部は内無する面をなす。口縁部は内無する面をなす。	① 山線 ヨコナテ ② 山線 ③ 山線 ④ 山線	① 山線 ヨコナテ ② 山線 ③ ナテ ④ ナテ	茶褐色	赤灰(1-3) ○		26
112	罌	口径(12.9) 残高 12.5	内反してたががる口縁部。口縁部は内無する面をなす。	① 山線 ヨコナテ ② 山線 ③ 山線 ④ 山線	① 山線 ヨコナテ ② 山線 ③ ナテ ④ ナテ	茶褐色	赤灰(1-3) △	異	28
113	罌	残高 11.8	口縁部は内反してたががる口縁部。口縁部は内無する面をなす。口縁部は内無する面をなす。口縁部は内無する面をなす。	① 山線 ヨコナテ ② 山線 ③ 山線 ④ 山線	① 山線 ヨコナテ ② 山線 ③ ナテ ④ ナテ	茶褐色	赤灰(1-3) ○		28

調査の概要

S X 2 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	国版
				外 面	内 面				
114	埴	口径 12.9 器高 6.8	丸底の底部から内湾してた ちあがる。口縁端部は丸く おさめる。	磨滅にて不明。	磨滅にて不明。	黄褐色 灰白色	赤-長(20) △	黒底 床	28
115	坏釜	口径 11.8 器高 4.7	口内面は丸く、腹は広い。 口縁端部は磨滅をなす。	㊸ 回転ヘラ削り ㊹ 回転ナデ	回転ナデ	灰色	赤-長(1) ◎		28
116	坏釜	口径 10.8 器高 5.5	たちあがりは内傾し、口縁 は段をなす。	㊸ 回転ナデ ㊹ 回転ヘラ削り	回転ナデ	灰色	赤-長(1-2) ◎		28
117	坏身	口径 10.7 器高 4.8	たちあがりは内傾し、口縁 は凹面をなす。口縁部外面 に土塗のヘラ削り痕あり。	㊸ 回転ナデ ㊹ 回転ヘラ削り	回転ナデ	灰色	赤-長(-5) ◎		28

表10 S X 3 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	国版
				外 面	内 面				
118	甕	口径(12.9) 器高 11.2	内湾気味にたちあがる口縁 部。口縁端部は外傾する面 をなす。	㊸ 口縁 ココナデ ㊹ ハケ(7-8本/cm)	㊸ ココナデ ㊹ ナデ 板刷裏	黄褐色	赤-長(20) ○	黒底	29
119	甕	口径(19.2) 器高 5.0	内湾してたちあがる口縁部。 外面口縁端部で強くナデ て段をなす。	㊸ ココナデ	磨滅にて不明。	灰白色 黄褐色	赤-長(1-4) ○	黒底	29
120	埴	口径(10.6) 器高 5.5	丸底の底部から内湾してた ちあがる口縁部。口縁端部 は丸くおさめる。	㊸ ココナデ	磨滅にて不明。 口縁部	黄褐色	赤-長(20) ○	黒底	29
121	(死葬) 流	口径(11.1) 器高 3.8	脚部欠損。丸底の底部から 内湾してたちあがる口縁部。	磨滅にて不明。	磨滅にて不明。	灰白色	赤-長(20) ○	黒底	29
122	新 肥手	残高 3.2	外上方にのびる。	ナデ		赤褐色	赤-長(20) ○		
123	坏釜	口径 11.7 器高 4.2	比較的丸い口内面。腹は短 く丸味を帯びる。口縁端部 は段をなす。	㊸ 回転ヘラ削り ㊹ 回転ナデ	回転ナデ	黄褐色 黄褐色	赤-長(1-4) ◎		30
124	坏釜	口径(10.0) 器高 4.8	たちあがりは内傾し、口縁 端部は凹面。	㊸ 回転ナデ ㊹ 坏身 回転ヘラ削り	回転ナデ	黄褐色 灰白色	赤-長(1-5) ◎		
125	坏身	口径 10.2 器高 4.8	たちあがりは内傾し、口縁 端部は凹面。	㊸ 回転ナデ ㊹ 坏身 回転ヘラ削り	回転ナデ	黄褐色 灰白色	赤-長(1-6) ◎	へろ号	30
126	高坏	口径 9.8 脚部 7.7 器高 8.5	たちあがりは内傾し、口縁 端部は凹面。二方にスカー シあり。	㊸ 坏底 回転ヘラ削り ㊹ 坏底 回転カキ目 その他 回転ナデ	回転ナデ	黄褐色	赤-長(1-3) ◎		30
127	高坏	口径 10.3 脚部 8.5 器高 8.8	たちあがりは内傾し、口縁 端部は段をなす。二方にス カーシあり。	㊸ 坏底 回転ヘラ削り ㊹ 坏底 回転カキ目 その他 回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	赤-長(1-4) ○		30
128	高坏	口径 10.3 器高 5.1	たちあがりは内傾し、口縁 端部は内傾する凹面。坏底 部外面にスカーシあり。	㊸ 坏底 回転ヘラ削り ㊹ 坏底 回転カキ目 その他 回転ナデ	回転ナデ ナデ	黄褐色	赤-長(1-3) ◎		

出土遺物観察表

S X 3 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
129	高坪	口径 7.5 残高 3.0	胴部は三方方に内側のスカシあり。	回転ナテ	回転ナテ		5-5(1-1) ○		
130	無蓋 高坪	口径 15.3 胴径 10.0 器高 11.1	外反する口縁部、踵部は丸くおさめる。四方方向のスカシ。	① 灰色 回転ナテ	回転ナテ	灰色	5-5(1-1) ○		30
131	蓋	径 12.2	縁部に流状文を施す。	② カキ目 回転ナテ ナテ	回転ナテ (泡掛底) ③ ツズリ底	灰青灰色 青灰色	5-5(1-3) ○	自然熱	30

表11 S X 3 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材 質	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
132	石台	完形	安山岩	21.2	9.8	9.0	1,980		30
133	石台	欠形	安山岩	16.5	12.8	6.8	1,824	流	30

表12 S X 4 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
134	蓋	口径(12.0) 残高 2.7	上外方にならあがる口縁部。口縁部は丸い。	回転ナテ	変態にて不明。		5-5(1-2) ○		
135	清	口径(11.7) 器高 6.1	先尖角味の底部から内反してたちあがる口縁部。踵部は丸い。	変態にて不明。	回転ナテ ナテ	① 灰白色 灰白色	5-5(1-3) ○	黒煎	31
136	高坪	口径 12.1 器高 4.0	先尖角味の底部から内反して丸く丸い。踵部は内反する凹面。	④ 回転ナテ ⑤ 回転ナテ	回転ナテ	青灰色	5-5(1-4) ◎		31
137	高坪	口径 10.8 器高 5.1	たちあがりは内傾し、口縁部は内反する凹面。	⑥ 回転ナテ ⑦ 回転ナテ	回転ナテ	青灰色	5-5(1-4) ◎		31
138	高坪	口径 10.2 器高 4.9	たちあがりは内傾し、口縁部は内反する凹面をなす。	⑧ 回転ナテ ⑨ 回転ナテ	回転ナテ	灰白色	5-5(1-5) ○		31
139	蓋	径 4.7	先い天弁部。つまみは中央部がくぼむ。縁に丸く丸い。	⑩ 回転ナテ ⑪ 回転ナテ	回転ナテ	灰色	5-5(1-4) △		
140	高坪	口径 10.0 胴径 8.4 器高 9.4	たちあがりは内傾し、口縁部は内反する凹面。底部は上外方へのびる。	⑫ 回転ナテ ⑬ 回転ナテ ⑭ 回転ナテ	回転ナテ	灰白色	5-5(1-5) ◎		31
141	無蓋 高坪	口径 12.3 胴径 7.8 器高 10.3	口縁部は内反してたちあがり。底部は丸くおさめる。底部に流状文を施す。	回転ナテ	⑮ 回転ナテ 利殖し不明。	灰色	5-5(1-3) ◎		31

調査の概要

表13 S X 7 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
142	瓶	口径(17.5) 残高 5.2	口縁部は内湾してたちあがり 底部は丸くおさめる。	ヨコナデ ハヤ(9-10本/cm)	磨滅にて不明。	灰色 △	5-11(1) ○		32
143	壺	口径(18.0) 残高 4.0	口縁部は内湾欠陥にたちあがり のたれも残存し、底高する。 口縁部は丸くおさめる。	ヨコナデ	ヨコナデ	赤褐色 灰黄色	5-11(2) ○		32
144	灰 付瓶	口径(11.0) 残高(8.0)	口縁部は平次の底部から内湾 してたちあがり口縁部、脚 は内湾して広がる。	◎ 磨滅にて不明。 (ハヤ後) ◎ ナデ	磨滅にて不明。	淡褐色	5-11(2) ○		32
145	壺	口径(14.8) 残高 5.7	口縁部は丸くおさめ、口縁部 に斜交文のくさ。脚は外方 にのびる。踵部は内湾する 凹面。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰色	5-11(2) ◎		32
146	壺	口径(11.8) 残高 4.0	扁平な天弁部。口縁部は 内湾する凹面。	◎ 磨滅へう残り ◎ ナデ	磨滅ナデ	灰色 灰白色	5-11(2) ◎		
147	釜	口径(12.0) 残高 4.8	扁平な天弁部。つまみは平 中央がやや突出する。口縁 部は丸くおさめ。踵部内 湾して底縁をのびさせる。	◎ 磨滅へう残り ◎ ナデ	磨滅ナデ	灰白色 青灰色	5-11(2) ◎		32
148	灰 付壺	口径(9.0) 残高 4.6	たちあがり内湾し、踵部 は段をなす。	◎ 磨滅ナデ ◎ 磨滅へう残り	ヨコナデ	灰色	5-11(2) ◎		
149	灰 付壺	口径(12.2) 残高 7.3	口縁部は平次の形態を有する。 踵部には上方に写影のスク シ。	◎ 磨滅 磨滅へう残り ◎ 磨滅ナデ	磨滅ナデ スタンプ痕	灰色	5-11(2) ○		32
150	灰 付壺	口径(14.9) 残高 4.2	口縁部は外方に開く。体部 に波線をめぐらせ、その上 に流交文を施す。	◎ 磨滅 磨滅へう残り ◎ 磨滅ナデ	磨滅ナデ	青灰色 灰白色	5-11(2) ○		32
151	壺	口径(14.8) 残高 4.4	口縁部は上白く残存する。	磨滅ナデ	ヨコナデ	灰色 灰白色	5-11(2) ○		

表14 焼土 2 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
152	瓶	口径(20.2) 残高 15.5	外壁しながら内湾し口縁部。 底部は直をなす。	ハヤ(7-8本/cm)	ナデ	赤褐色	5-11(2) 1.3 31号		33

表15 焼土 4 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
153	壺	口径(15.0) 残高 4.6	外壁したのち内湾して開く 口縁部。	ヨコナデ ハヤ(7-8本/cm)	磨滅にて不明。 (一部ヨコナデ)	灰色 赤褐色	5-11(4) △		33
154	壺	残高 5.6	厚部最大径を中央ではかる。	磨滅にて不明。 (一部ヨコナデ)	磨滅にて不明。 (一部ヨコナデ)	赤褐色 褐色 灰色	5-11(3) △		33

出土遺物観察表

焼土 4 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面 内面) 色調	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
155	片煮	口径(10.0) 残高 4.2	たちあがりは内傾し、肩部は段となる。受部は水平にのびる。	① 回転ナデ ② 回転ヘラ削り	回転ナデ	青灰色 青灰色	石表(1-4) ○		33
156	高杯	口径 10.4 残高 5.5	たちあがりは内傾したのち直立し、肩部は段となる。	① 回転ナデ ② 回転ヘラ削り	回転ナデ	青灰色	石(少) ○		33
157	高杯	口径(10.1) 残高 4.4	たちあがりは内傾し、肩部は内傾する出面。	① 回転ナデ ② 回転ヘラ削り	回転ナデ	青灰色	石表(3.3- ○ 5)		

表16 焼土 4 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残 存	材 質	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
158	燧石	完形	雲山岩	15.3	4.8	3.05	349		33
159	燧石	完形	砂岩	10.1	4.9	4.4	310		33

表17 S X 5 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面 内面) 色調	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
160	甕	口径(22.5) 残高 23.7	肩部は斜形で外反気味に開口縁部。	ヨコナデ ハケ(4-5本/回)	ヘラケズリ→ナデ ハケ(4-5本/cm) 板状工具削	白→黄色 灰白色	石表(1-4) ○		34
161	甕	口径(17.4) 残高 7.9	口縁部はくゞりの字状に歪曲したのち、縁を育し、さらに外反してたちあがる。	ヨコナデ ハケ削	ヨコナデ ナデ	白→黄色	石表(1-2) ○		34
162	甕	口径(10.2) 残高 6.3	内湾して開口縁部、口縁部は丸くおさめる。	調整にて不明。 (一部ハケ削7本/cm)	ナデ	黄褐色	石表(1-4) ○		
163	甕 竹付	口径(14.9) 残高 10.5 器高(11.7)	乳瓶の肩部から内湾気味にたちあがったのち上縁部にのびる口縁部。肩は外反して短くのびる。	調整にて不明。	調整にて不明。	黄色	石表(1-3) ○		34
164	高杯	口径(14.3) 残高 5.7	口縁部はゆるやかに外反し、口縁部は丸くおさめる。杯部肩部は段となる。	ヨコナデ	調整にて不明。	黄褐色	石表(1-2) ○		
165	高杯	口径(16.5) 残高 5.2	内湾気味にたちあがる口縁部。口縁部は丸くおさめる。杯部肩部は段となる。	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	黄褐色	石表(1-3) ○	33B	
166	高杯	口径(19.7) 残高 6.0	内湾してたちあがったのち外反する口縁部。杯部肩部は段となる。	調整にて不明。	調整にて不明。	黄褐色	石表(1-3) ○	高杯	34
167	高杯	口径 18.1 残高 5.6	外傾する口縁部。肩部は丸くおさめる。杯部肩部は段となる。	ヨコナデ	(一部ハケ削7本/cm)	黄褐色	石表(1) ○		

調査の概要

S X 5 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外装)色調 (内装)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
166	高杯	口径 15.9 口径 11.4 残高 13.7	口縁部は内側縁に立ちあがったのちやや外反し、踵部を丸くおさめる。唇部は外反する。	ハケ目(一部)	ヘラケズリ ハケナデ	黒褐色	赤系(1-4) ○	黒斑	34
169	高杯	口径 13.9 口径 11.2	口の唇部は緩となる。柱部はやや中ふくれとなり唇部は外反する。	㊶ ヨコナデ ㊷ ナデ	ヘラケズリ	淡黄褐色	赤系(1-5) ○	黒斑	
170	高杯	口径 15.0 残高 8.0	唇部は円錐状に広がり、外反する程度。踵部は断面「コ」の字状。	磨滅にて不明。	ヘラケズリ ナデ	黄褐色	赤系(1-2) ○	黒斑	
171	高杯	口径 14.5 残高 9.5	柱部は円錐状に広がり、突出して踵部へつづく。踵部裏に唇の痕あり。	㊸ 磨滅にて不明 ㊹ 脚摩 ヨコナデ	ヘラケズリ	淡黄褐色 黄褐色	赤系(1-2) ○		
172	高杯	口径 10.8 残高 6.5	柱部は円錐状に広がり、突出して踵部へつづく。踵部は丸い。	磨滅にて不明。	ヘラケズリ ヨコナデ	黄褐色	赤系(1-2) ○		
173	高杯	口径 11.7 残高 6.7	柱部は円錐状に広がり、突出して踵部へつづく。踵部は丸い。	磨滅にて不明。	ヘラケズリ ハケナデ	黄褐色	赤系(1-4) ○		
174	高杯	口径 14.4 残高 7.2	唇部は円錐状に広がり、突出して踵部へつづく。踵部は丸い。	ナデ	ヘラケズリ ヨコナデ	淡黄褐色	赤系(1-4) ○	黒斑	
175	手拭 土器	口径 6.6	中央の底部から内面して立ちあがる。口縁部は外反する。	磨滅にて不明。	磨滅にて不明。 (仮察破)	淡黄褐色	赤系(検定) ○	15x7	34
176	通	残高 8.3	外縁に2本の浅彫で区別したところに浅状文。底部に平行タタキ目を残す。	回転ナデ ㊺ 平行タタキ	回転ナデ 工具痕	灰白色	赤系(検定) ○	淡色石	34

表18 S X 5 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残 存	材 質	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(g)	重さ(g)		
177	石占	完整	安山岩	24.0	9.8	2.6	2.620		34

表19 S X 6 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外装)色調 (内装)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
178	高杯	口径 10.9 残高 3.7	ゆるやかに外反する唇部。	磨滅、割傷のため不明。	磨滅、割傷のため不明。	淡褐色	赤系(1-15) △		
179	手拭 土器	口径 5.5 口径 3.4	丸底の底の底から、外上方向へ広がりが、口縁部は丸くおさめる。	磨滅にて不明。	磨滅にて不明。	黄褐色	赤系(1-10) ○		35
180	杯蓋	口径 10.6 口径 4.5	外縁部は丸みを帯び、縁は浅彫によりあらわす。踵部は内側する面をなす。	㊻ 回転ヘラ刮り ㊼ 回転ナデ	回転ナデ	黄褐色 灰色	赤系(1-10) ◎		35

出土遺物観察表

S X 6 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
181	不身	残高 3.5	やや扁平な蓋部。受部は上方にのびる。	㊶ 回転ナテ ㊷ 回転ヘラ削り	回転ナテ	青灰色	石長(1-4) ○		
182	不身	口径 10.0 残高(4.8)	たちあがりは内傾し、端部は段をなす。蓋部は丸い。	㊶ 回転ナテ ㊷ 回転ヘラ削り	回転ナテ	青灰色 灰青色	石長(1-4) ○		35
183	不身	残高 4.3	丸い蓋部。受部は水平にのびる。	㊶ 回転ナテ ㊷ 回転ヘラ削り	回転ナテ	青灰色 灰青色	石長(1-3) ○		
184	不身	口径(10.9) 残高 4.7	たちあがりは内傾したのち直立し、端部は段をなす。	㊶ 回転ナテ ㊷ 回転ヘラ削り	回転ナテ	灰白色	石長(1-1) △		
185	蓋	口径(12.4) 残高 6.3	天井部は高く丸い。つまみ中央部はぼむ。縁は早く外方へのびる。	㊶ 回転ヘラ削り ㊷ 回転ナテ	回転ナテ	灰色 灰白色	石長(1-4) ○		35
186	高杯	口径 10.1 残高 5.0	たちあがりは内傾し、端部は内傾する面をなす。三方にスカシ痕あり。	㊶ 回転ナテ	回転ナテ	青灰色 灰色	石長(1-2) ◎		
187	高杯	口径(9.8) 残高 4.6	たちあがりは内傾し、端部は内傾する面をなす。	㊶ 回転ナテ ㊷ 回転ヘラ削り	回転ナテ	灰青色	石長(1-2) ○		
188	高杯	口径(9.6) 残高 5.7	たちあがりは内傾し、端部は内傾する面をなす。三方にスカシ痕あり。	㊶ 回転ナテ ㊷ 回転ヘラ削り	回転ナテ	オレンジ色 灰白色	石長(1-1) ◎		
189	高杯	口径 10.4 残高 5.0	たちあがりは内傾し、端部は内傾する面をなす。	㊶ 回転ナテ ㊷ 回転ヘラ削り	回転ナテ	灰色	石長(1-1) ◎		
190	高杯	口径(9.4) 残高 7.9 器高 4.9	たちあがりは内傾し、端部は内傾する面をなす。三方にスカシ痕あり。	㊶ 回転ナテ ㊷ 回転ヘラ削り	回転ナテ	青灰色	石長(1-1) ◎		35
191	高杯	口径 10.2 残高 7.0 器高 8.6	たちあがりは内傾し、端部は内傾する面をなす。三方にスカシ痕あり。	㊶ 回転ナテ ㊷ 回転ヘラ削り	回転ナテ	青灰色 灰青色	石長(1-1) ◎		35
192	高杯	口径 8.1 残高 3.5	丸い蓋部。受部は水平にのびる。	㊶ 回転ナテ ㊷ 回転ヘラ削り	回転ナテ	青灰色	石長(1-1) ○		

表20 第五層出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
193	蓋	口径(23.4) 残高 5.2	外傾する口縁部。口縁部は内傾する平面。	ヨコナテ ハケ目(10~11本/cm)	ヨコナテ ハケ目	灰青色	石長(1-4) ○		
194	蓋	口径 18.8 残高 8.7	外傾する口縁部。端部は上方に丸くおさまる。	ヨコナテ	ナテ	灰青色	石長(1-1) ○		
195	蓋	口径(19.4) 残高 7.8	口縁部は厚し、面をなす。	ヨコナテ ハケ(7~8本/cm)	㊶ ヨコナテ 刷滅にて不用。 (一部ハケ目)	灰青色	石長(1-1) ○		

調査の概要

第Ⅴ層出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	流量 (cm)	形跡・施文	調 整		(外面 色調 (内面)	胎 土 成 成	備考	図版
				外 面	内 面				
196	空	口径(20.8) 残高 4.2	口縁部は1/3に面を欠す。	ココナテ ココハケーナテ (6本/cm)	ココナテ	にんべん色	赤系(1-4) ○		
197	鉢	口径(15.4) 残高 29.0	胴中央に平に数大粒をもち、 口縁部は外傾する面を欠す。	ナテ	ナテ (指染)	赤褐色	赤系(1-3) ○		37
198	鉢	口径(17.0) 残高 6.2	口縁部は丸くおさめる。	ココナテ	ナテ (指染)	にんべん色	赤系(少) ○		
199	空	口径(15.6) 残高 7.0	口縁部中央に粒をもち、薄 部は丸い。	ココナテ ナテ	ココナテ (一部指染)	にんべん色 にんべん色	赤系(1-3) ○		
200	鉢	口径(13.5) 残高 3.8	口縁部は丸くおさめる。	ナテ	ナテ	にんべん色	赤系(1-2) ○		
201	空	口径(16.2) 残高 4.5	口縁部は先傾する。	⑪ ナテ 指染にて不明。 (指染)	ナテ ハケ目 (指染)	褐色 にんべん色	赤系(1-3) ○		
202	空	口径(16.0) 残高 4.7	外反する口縁部、胴部に粒 子の跡あり。	ココナテ 指子目跡	指染にて不明。	淡黄褐色	赤系(1-3) △	異色	37
203	鉢	口径 30.6	平底の胴部から内湾してた ちあがる。	指染にて不明。 (着ハケ目(2-1)本/cm)	指染にて不明。	にんべん色	赤系(指染 4) ○		38
204	空	口径(8.7) 残高 15.1	口縁部は外反し、端部は丸 くおさめる。	⑫ ココナテ 指染にて不明。	ココナテ ナテ	淡黄褐色	赤系(4-5) ○		37
205	埴	口径 12.1 残高 5.1	胴部から内湾してたちあが り端部は丸い。	指染ナテ ナテ	指染ナテ ナテ	にんべん色	赤系(1-2) ○		37
206	空	口径 19.7 残高 5.1	胴部中央に1ヶの孔、外面 に輪飾み面を欠す。	指染ナテ	指染にて不明。 (一部ハケ目(4本/cm) (指染)	赤褐色	赤系(指染) ○		38
207	鉢	口径(22.5) 残高 4.4	外上等に開く口縁部。把手 部は欠損。	ココナテ タテハケ	ハケ目(不定方向)	灰黄色	赤系(1-2) ○		
208	空	口径(23.7) 残高 9.7	外反する口縁部、口縁部は 断面がコノ字状を呈する。	指染のため不明。	指染のため不明。	にんべん色	赤系(4) △		
209	鉢	口径(31.2) 残高 21.6	に手帯と底部は欠損。胴部 から内湾気味にたちあがる 口縁部。	ハケーナテ (3-4本/cm)	指染のため不明。 (一部ココナテ)	下み調色 灰白 淡黄褐色	砂粒 △	異色	38
210	鉢	残高 4.2	把手、上外方へのびる。	ナテ		淡黄褐色	赤系(1-2) ○		38
211	鉢	残高 4.6	把手、上外方へのびる。	ナテ		淡黄褐色	赤系(1-2) ○		
212	鉢	残高 5.2	把手、上外方へのびる。 胴平。	ナテ		黄褐色	赤系(1-2) ○		38

出土遺物観察表

第Ⅱ層出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・本文	調 整		(外面) 色澤 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
213	瓶	残高 5.3	把手、上外方向へのびる。	ナテ		淡棕色	赤系(1-3) ○		38
214	瓶	残高 5.6	口下、上外方向へのびる。	ナテ		淡棕色	赤系(1-3) ○		38
215	瓶	残高 4.4	把手、上外方向へのびる。 上面は中偏み。	ナテ			灰(1) ○		38
216	瓶	残高 5.2	把手、上外方向へのびる。 面取りされる。	ナテ ヘラヤスリ?		灰白色	赤系(1-3) ○		38
217	瓶	残高 4.8	把手、上外方向へのびる。	ナテ			赤系(1-3) ○		38
218	富 コップ	残高 7.6	口部?下外方向へのびる。 下面は指輪痕が明確に残る。	(上段) ハヤ・ナテ (指輪痕)	(下段) ナテ (指輪痕)	淡褐色	赤系(1-3) ○		38
219	平盤	口径 11.9 器高 4.6	丸い天井部。口縁部等は外 反し面をなす。	㊸ 回転ヘラ削り2/3 ㊹ 回転ナテ	回転ナテ	灰白色	赤系(1-3) ○	自然焼	39
220	平皿	口径 11.7 器高 4.4	口縁部は内傾する平面。 縁は鋭く直い。	㊸ 回転ヘラ削り2/3 ㊹ 回転ナテ	回転ナテ	灰色	赤 ○		
221	平盤	口径 11.8 器高 5.0	口縁部は内傾をなす。天井 部は丸い。	㊸ 回転ヘラ削り2/3 ㊹ 回転ナテ	回転ナテ	青灰色 灰色	灰(1-3) ○		
222	平皿	口径(12.2) 器高 4.6	口縁部は外反し面をなす 平面。	㊸ 回転ヘラ削り2/3 ㊹ 回転ナテ	回転ナテ	青灰色 灰色	赤系(1-3) ○		39
223	平皿	口径 11.4 器高 4.6	内側面は丸い。口縁部、口縁 部は内傾。	㊸ 回転ヘラ削り2/3 ㊹ 回転ナテ	回転ナテ	青灰色 灰色	灰(1-3) ○		39
224	平皿	口径(13.6) 器高 4.1	縁はもたす。口縁も突きへ。	㊸ 回転ヘラ削り4/5 ㊹ 回転ナテ	回転ナテ	青灰色 灰色	灰(1-3) ○		39
225	平皿	口径 9.9 器高 5.7	たちあがりは内傾し。口縁 は内傾。	回転ナテ ㊸ 回転ヘラ削り1/2	回転ナテ	青灰色 灰色	赤系(1-3) ○		
226	平皿	口径 9.9 器高 4.9	たちあがりは内傾し。口縁 は平直。	㊸ 回転ナテ ㊹ 回転ヘラ削り3/5	回転ナテ	青灰色 灰色	赤系(1-3) ○		39
227	平皿	口径(10.0) 器高 4.8	たちあがりは内傾し。口縁 は段をなす。	㊸ 回転ナテ ㊹ 回転ヘラ削り2/3	回転ナテ	灰白色	赤系(1-3) ○		
228	平皿	口径(9.4) 器高 4.5	たちあがりは内傾したたち 直立し。口縁は面をなす。	㊸ 回転ナテ ㊹ 回転ヘラ削り2/3	回転ナテ	青灰色	赤系(1-3) ○		
229	平皿	口径(10.0) 器高 5.2	たちあがりは内傾したたち 直立し。口縁は面をなす。	㊸ 回転ナテ ㊹ 回転ヘラ削り3/4	回転ナテ	灰色	赤系(1-3) ○		

調査の概要

第Ⅸ層出土土器観察表 土製品

(4)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		(外蓋) 色質 (内蓋)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 蓋	内 蓋				
230	片身	口径(9.8) 器高 5.1	たちあがりは内傾したのち直立し、縁部は平面、尖部は水平にのびる。	① 回転ナデ ② 回転へうすり3/4	回転ナデ	灰色	長(1-3) ○		
231	片身	口径(10.1) 器高 5.5	たちあがりは直立し、口部は段をなす。尖部は水平にのびる。	① 回転ナデ ② 回転へうすり3/4	回転ナデ	灰色	長(1-3) △		
232	片身	口径(11.5) 器高 4.1	たちあがりは直立し、縁部は段をなす。尖部は水平にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	長(1-3) ●		
233	片身	口径(10.8) 器高 4.8	たちあがりは内傾する。縁部は外反し、内傾する可部。	① 回転ナデ ② 回転へうすり3/4	回転ナデ	青灰色 灰色	長(1-3) ○		
234	片身	口径(9.7) 器高 4.8	たちあがりは内傾し縁部は平面、口部外面にへうすり。	回転ナデ ② 回転へうすり2/3	回転ナデ	灰色	長(1-3) △	へうすり	39
235	片身	口径 3.7	口部外面にへうすり。	回転ナデ ② 回転へうすり3/5	回転ナデ	青灰色 灰色	長(1-4) ●	へうすり	
236	蓋	口径(11.0) 器高 5.3	天井部は丸く器高が高い。つまみは中央部がくぼむ。	① 回転へうすり1/2 つまみ 回転ナデ ② 回転ナデ	回転ナデ	灰色	長(1-5) ○		40
237	片蓋	口径 11.6 器高 5.0	縁部下縁にナデられる。つまみは中央部が中央突出する。	① 回転へうすり1/3 つまみ 回転ナデ ② 回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	長(1-3) ○		
238	片蓋	口径 11.8 器高 5.2	天井部にカキ目あり。つまみは中央が突出する。	① 回転へうすり2/3 つまみ 回転ナデ ② 回転ナデ	回転ナデ	灰色	長(1-2) ○		
239	高杯	口径(9.6) 器高 8.2 器底 9.0	たちあがりは外反し、縁部は段をなす。脚は三方にスカシあり。	(外蓋) 回転へうすり1/2 (内蓋) 回転ナデ	回転ナデ	灰色	長(1-2) ○		
240	高杯	口径(10.5) 器高 7.8 器底 8.8	たちあがりは内傾し、縁部は丸い。脚は三方にスカシあり。	(外蓋) 回転へうすり1/3 (内蓋) 回転ナデ (その他) 回転ナデ	回転ナデ	灰色	長(1-4) ○		40
241	高杯	口径 10.3 器高 7.8 器底 8.8	たちあがりは内傾し縁部は段をなす。脚は三方にスカシあり。	(外蓋) 回転へうすり1/2 (内蓋) 回転ナデ (その他) 回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	長(1-3) ○		
242	高杯	口径(10.8) 器高 7.5 器底 8.0	たちあがりは内傾し縁部は段をなす。脚は三方内に円形のスカシあり。	(外蓋) 回転へうすり1/2 (その他) 回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	長(少) ○		40
243	高杯	口径(11.4) 器高 5.2	たちあがりは内傾し、縁部は段をなす。脚は三方内に円形のスカシあり。	(外蓋) 回転ナデ (その他) 回転ナデ	回転ナデ	灰色	長(1-3) ○		
244	杯蓋 高杯	口径(16.1) 器高 4.3	たちあがりは内傾し、縁部は丸い。口部にカキ目。	(外蓋) 回転ナデ (その他) 回転ナデ	回転ナデ	白色	長(1-3) ○	自然焼	40
245	蓋	器高 7.3	唇部に1本の沈線をはらした下に刺突文を施す。	回転ナデ 回転へうすり	回転ナデ	灰色	長(1-3) ○		40
246	蓋	器高 10.3	唇部に1本の沈線をはらした下に刺突文を施す。	回転ナデ 回転ナデ ② ナデ	回転ナデ 回転ナデ 回転ナデ	青灰色	長(1-2) ○	自然焼	40

出土遺物観察表

第Ⅰ層出土遺物観察表 土製品

(5)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外裏)色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
247	器六	残高 11.3	凸線と波状文。	灰胎ナテ ナテ	調整ナテ	灰青灰色	黒胎(1-3) ○		40
248	罎	口径(16.9) 残高 4.7	口縁部は下方に拡張する。 凸部裏下に波状文。	調整ナテ	調整ナテ	青灰色	黒(1-2.5) ○	黒胎	40
249	甕	口径(35.8) 残高 8.6	外側したのち外反する口縁部。 口縁部約直径下に凸部。 凸部は無文。	① 調整ナテ 調整ナテ→不定方向ナテ	調整ナテ	灰色	黒(粗粒) ○		40

表21 第Ⅰ層出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材 質	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
250	写土	完整	硬玉	2.25	0.9	0.45	2.4		40

表22 第Ⅱ層出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外裏)色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
251	罎	口径 14.8 残高 6.2	内側気味に開口縁部。	ヨコナテ ハケ(9~10本/cm)	ヨコナテ ナテ	灰青灰色	黒(1-2.5) ○		41
252	罎	口径 16.4 残高 15.5	外反する口縁部。口縁部部は太い。	ヨコナテ ハケ目	ヨコナテ 掘削工具によるナテ	灰青灰色	黒(1-3) ○	黒胎	41
253	罎	口径(9.4) 残高 11.6	肩部が張り、口縁部部は丸くおさめる。	ナテ	ナテ	灰青灰色	黒(1-2) ○		41
254	罎	口径(10.7) 残高 4.4	内側して外上方にのびる口縁部。肩部は先細る。	ヨコナテ ナテ	ヨコナテ ナテ	灰白色	黒(粗粒) ○		41
255	罎	口径(8.1) 残高 5.3	平高の肩部から内側したのち外反する口縁部。肩部は先細る。	ヨコナテ ナテ	ヨコナテ 掘削工具によるナテ	灰青灰色	黒(1-2) ○		41
256	罎	口径(17.8) 残高 6.0	肩部は段を有し、口縁部部近くでやや外反する。	磨滅にて不明。	ヨコナテ	灰色	黒(1-3) ○	黒胎	
257	罎	口径(9.8) 残高 7.8	肩部部は強く内側し水平にのびる。	① 調整 ナテ → ナテ(粗粒) ヨコナテ	② 調整 ナテ → ナテ(粗粒) ヨコナテ	灰青灰色	黒(1-3) ○		
258	罎	口径(12.8) 残高 7.9	肩部は強く外反する。	① 調整 ナテ → ナテ(粗粒) ヨコナテ	② 調整 ナテ → ナテ(粗粒) ヨコナテ	灰青灰色	黒(1-5) ○	黒胎	
259	罎	残高 10.6	凸部と波状文を2程に重ねる。	調整ナテ	調整ナテ	灰青灰色	黒(1-3) ○		41

調査の概要

第Ⅸ層出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
260	壺	口径(14.5)	外反する口縁部、凸部直下に底状文を施す。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰色	赤(細粒) ○	自然焼	41
		残高 4.4							
261	壺	口径(22.2)	外反する口縁部、凸部は無い。遺部外面直下に1本の凸条。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰色	黒褐色(粗) ○		41
		残高 6.7							

表23 S B 1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
262	壺	口径(19.2)	内面する口縁部、頸部は口厚し内面する面をもつ。	ヨコナデ ハヤ割(3等/4)	ヨコナデ ナデ (磨削面)	黒・黄褐色 既製褐色	赤(長)1-3 ○		42
		残高 6.7							
263	壺	口径(17.0)	外上方に開く口縁部、両部は平直をなす。	磨削にて不明。	磨削にて不明。	既製色 淡褐色	赤(長)1-2 ○		42
		残高 4.0							
264	壺	口径(13.6)	内面して外へ開く口縁部。	ヨコナデ ハヤナデ	ヨコナデ	赤褐色	赤(長)1-3 ○		42
		残高 5.2							
265	壺	口径(11.0)	内面する口縁部。	ヨコナデ	ヨコナデ	暗灰色	赤(長)磨削 ○		42
		残高 3.7							
266	鉢	口径(13.1)	丸底の碗部、内面してならあがったの外反する口縁部。	ヨコナデ ナデ	ナデ	灰色 に赤い赤 褐色灰色	赤(長)1-2 金 ○		42
		残高 8.4							
267	高杯	口径(14.0)	内面してならあがったの外反する口縁部。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色	赤(長)1-3 ○		42
		残高 5.2							
268	高杯	口径(16.6)	内面してならあがったの外反する口縁部、頸部は先鋭的。	ヨコナデ	ヨコナデ	黒・褐色 灰白色	赤(長)1-2 ○		42
		残高 4.1							
269	高杯	口径(16.7)	杯は腹を有し、頸部は丸くおさめる。	ヨコナデ	磨削のため不明。	褐色 に赤い赤	赤(長)1-2 ◎		42
		残高 6.6							
270	高杯	口径(10.6)	外反する口縁部、両部は丸くおさめる。	ヨコナデ	ヨコナデ	黒・褐色	赤(長)1-2 ○		42
		残高 5.7							
271	高杯	口径(23.7)	口縁部は外反し斜角の半反を施す。	ヨコナデ	ヨコナデ	黒色 灰白色	赤(長) ○		42
		残高 5.0							
272	高杯	口径(10.3)	頸部は傾直し水平に近く開く、内面の口縁部は鋭く。	① 既製 ナデ ② ヨコナデ	① 既製 (高)ヨコナデ ② ヨコナデ	淡黄褐色 淡褐色	赤(長)磨削 ○		42
		残高 6.7							
273	高杯	口径(9.7)	頸部は傾直し外方へ開く、内面の口縁部は鋭く。	① 既製 ナデ ② ヨコナデ ナデ	① 既製 (高)ヨコナデ ヘラケズ; ② ヨコナデ	黒・褐色 に赤い褐色	赤(長) ◎		42
		残高 3.9							

出土遺物観察表

表24 SB1出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
274	不明	全部	砂岩	15.2	8.8	3.95	1.190	塚	42

表25 SB1カマド出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
275	皿	口径 18.4 器高 30.9	胴部は杯形で内湾する口縁部。底部は内湾する皿をなす。	① 口縁 ヨコナテ ② その他 濃褐色不明	① 口縁 ヨコナテ ② その他 ナテ (指紋痕)	① 淡褐色 ② 褐色 ③ 灰黄色	6-5(1-2) ○	黒塚 塚	43
276	皿	口径(10.6) 器高 4.0	口縁部外側に2条の沈線。	ヨコナテ ナテ	ヨコナテ ナテ	① ② ③ 褐色	6-5(1-2) ○		
277	高杯	口径 15.0 胴径(10.0) 器高 13.0	杯底部は段をなす。胴縁部は直曲し水平に広がる。	ヨコナテ ナテ (指紋痕)	① ② ③ ヘラケズリ ヨコナテ	① 灰黄色 ② 褐色 ③ 淡褐色	5-5(1-4) ○	塚	43

表26 SB2出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
278	鉢	口径(17.0) 器高 9.0	内湾する口縁部。底部は内湾する皿。	ヨコナテ ナテ	ヨコナテ ナテ	① 淡褐色	6-5(1-3) ○		
279	皿	口径 17.0 器高 8.1	上外方へ開く口縁部。底は直曲る。	ヨコナテ ハケ目(不定方向)	ヨコナテ ナテ (指紋痕)	① 淡褐色	6-5(1-3) ○	黒塚	
280	皿	口径(25.3) 器高 25.5	口縁部は段を有し、口縁部を呈する。	① 口縁 ヨコナテ ② ハケ目ナテ ③ ナテ	ヨコナテ ナテ (指紋痕)	① 淡褐色	6-5(1-4) ○	黒塚	44
281	高杯	口径(15.3) 器高 11.0 器高 12.5	外反する口縁部。底部は丸くおさまる。胴縁は直線的に広がる。底部は直曲する。	ヨコナテ	① ② ③ ヘラケズリ ヨコナテ	① 淡褐色	5-5(1-6) ○		43
282	高杯	口径 15.5 器高 11.0 器高 12.5	杯底部は段をもつ。口縁部は丸くおさまる。胴縁部は直曲し内湾してのびる。	① 口縁 ナテ ヨコナテ	① ② ③ ナテ ヨコナテ	① 淡褐色	6-5(1-5) ○	黒塚	43
283	高杯	口径(14.2) 器高 10.8 器高 10.9	杯底部は段をもつ。口縁部は外反し、底部は丸い。胴縁部直曲して水平に広がる。	① 口縁 ナテ ヨコナテ	① ② ③ ヘラケズリ ヨコナテ	① 淡褐色	5-5(1-4) ○		43
284	高杯	口径(13.2) 器高 6.8	杯底部は段をもつ。口縁部は外反し、底部は丸い。	ヨコナテ ナテ	ヨコナテ+ナテ	① 淡褐色	5-5(1-4) ○		
285	高杯	口径 14.0 器高 11.7	杯底部は段をもつ。胴縁部は直線的に広がる。底部は直曲して水平に広がる。	① 口縁 ヨコナテ ② 胴縁 ナテ ③ ナテ	① 口縁 ナテ ② ナテ ③ ヨコナテ	① 淡褐色	5-5(1-3) ○	黒塚	44
286	高杯	口径(25.2) 器高 7.2	外反する口縁部。底部は丸くおさまる。	ヨコナテ	ヨコナテ	① 淡褐色	5-5(1-3) ○	黒塚	

調査の概要

SB2 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
287	高杯	口径(11.1) 残高 7.5	胴柱は中ぶくろみし肩部は強く突出する。	ナテ	⑤ 陶土 ⑤ 陶土 ヘラケズリ ココナテ→ナテ	灰褐色 に赤褐色	赤長(1-1) ○		
288	高杯	口径(9.0) 残高 6.5	胴柱は中ぶくろみし肩部は強く突出する。	ココナテ ナテ	⑤ 陶土 ⑤ 陶土 ヘラケズリ ココナテ→ナテ	赤褐色 に赤褐色	赤長(赤短) ◎		
289	子皿 土器	口径 3.3 残高 2.1	内面製煉にたちあがる口縁部。肩部は先円する。	ナテ	ナテ ヘラケズリ	灰黄色	赤長(赤短) ○		43
290	皿	口径(8.6) 残高 12.3	碗体形の脚輪。口縁部は細い盛縁から外反し、屈曲するが縁はあまり、口縁端部は丸い。	河原ナテ ナテ	河原ナテ ヘラナテ ナテ	灰褐色	赤長(1-2) ◎		44

表27 SB2 カマド出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
291	皿	口径 16.4 残高 23.3	わずかに内湾する口縁部。肩部は内知する窪をもつ。口縁部下方の側部に4条の縦位の沈線。	ココナテ ハタ目(不定方向)	ココナテ ナテ (指頭痕)	赤褐色 灰黄色	赤長(1-3) ○		51
292	高杯	口径(24.8) 残高 6.9	外反する口縁部。肩部は丸い。	ココナテ	ココナテ	赤褐色 黒色 淡褐色	赤長(赤短) ○		44
293	高杯	口径(25.4) 残高 8.3	深い字部。外反する口縁部。肩部は丸い。	ココナテ	ココナテ ナテ	黒色 赤褐色	赤長(1-3) ○		54

表28 SB3 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
294	高杯	口径(12.0) 残高 3.2	胴柱は外反して開く。裾端は断面コ、の穴。	ココナテ ナテ	ココナテ 工具によるナテ上げ	灰褐色 灰黄色	赤長(赤短) ~3.5 ○		

写 真 图 版

図版例言

1. 構造の撮影は、大西朋子・相原浩二・河野史知が行った。

使用機材：

カメラ アサヒペンタックス67 レンズ ペンタックス67 55mm F4 他
 ニコンニューFM2 他 ズームニッコール28-85mm 他
フィルム ネオパンSS

2. 遺物の撮影は、大西が行った。

使用機材：

カメラ トヨ/ビュ-45G レンズ ジンマーS240mm F5.6 他
ストロボ コメット/C A-32 2灯・CB2400 2灯 (バンク使用)
スタンド他 トヨ/無影撮影台・ウエイトスタンド101
フィルム 白 黒 プラスXパン4x5
 カラー エクタクロームEPP 4x5

3. 遺構写真の焼き付け及び遺物写真のフィルム現像・焼き付けは、大西が行った。

(白黒に限る。)

使用機材：

引伸機 ラッキー450MD レンズ エル・ニッコール135mm F5.6A
 ラッキー90MS エル・ニッコール50mm F2.8N
印面紙 イルフォードマルチグレードIII RC

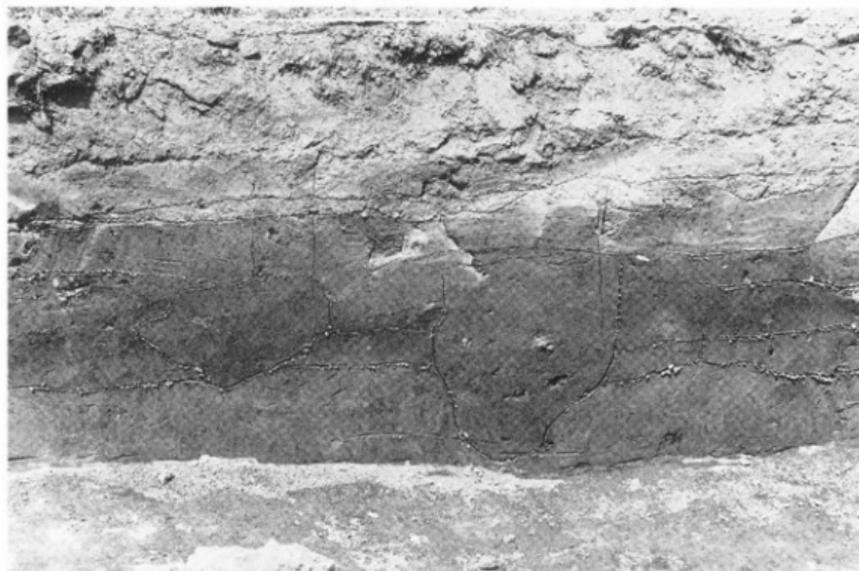
【参考】 『埋文写真研究』 Vol. 1 1990 Vol. 2 1991 Vol. 3 1992

Vol. 4 1993 Vol. 5 1994

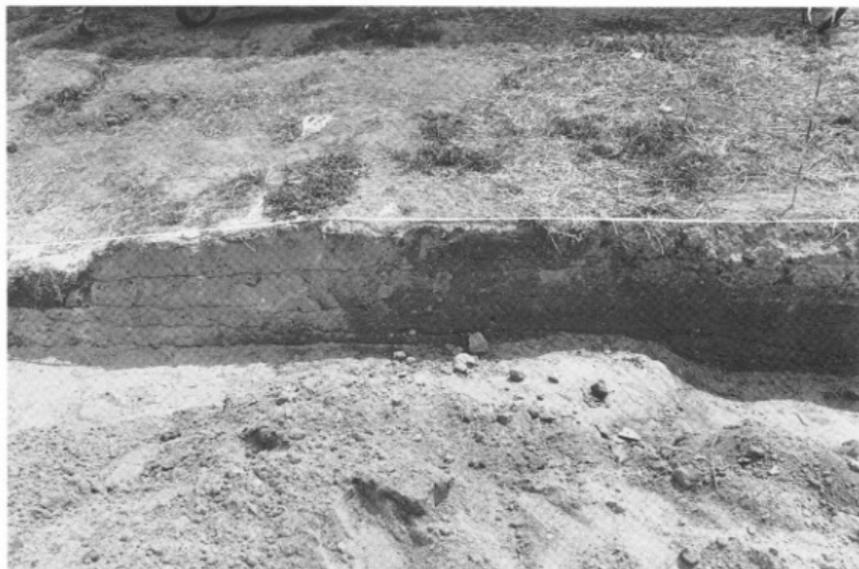
(大西朋子)



1. 調査前全景（北東より）



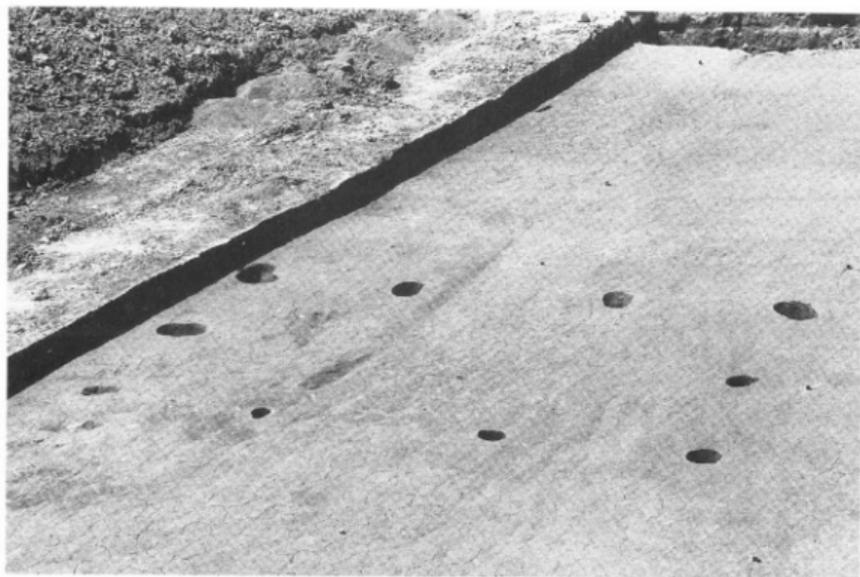
2. A区北壁土層（南より）



1. A区南壁土層（北より）



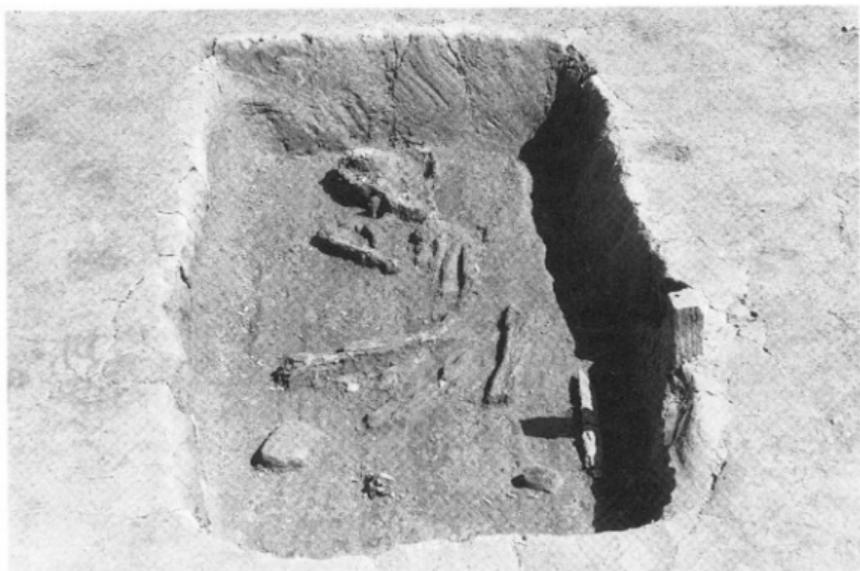
2. B区南壁土層（北より）



1. A区掘立柱建物SB01(南より)



2. B区第VI層上面遺構検出状況(東より)



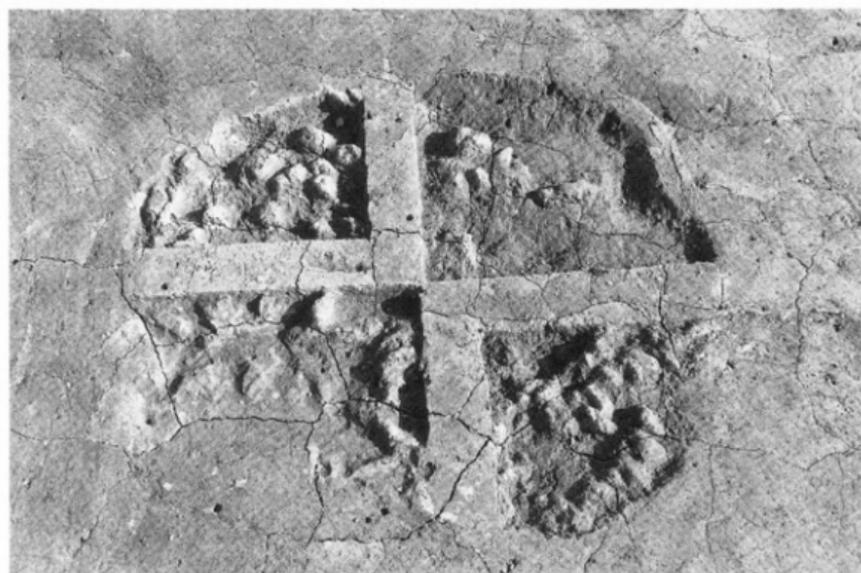
1. SK01木棺墓（南より）



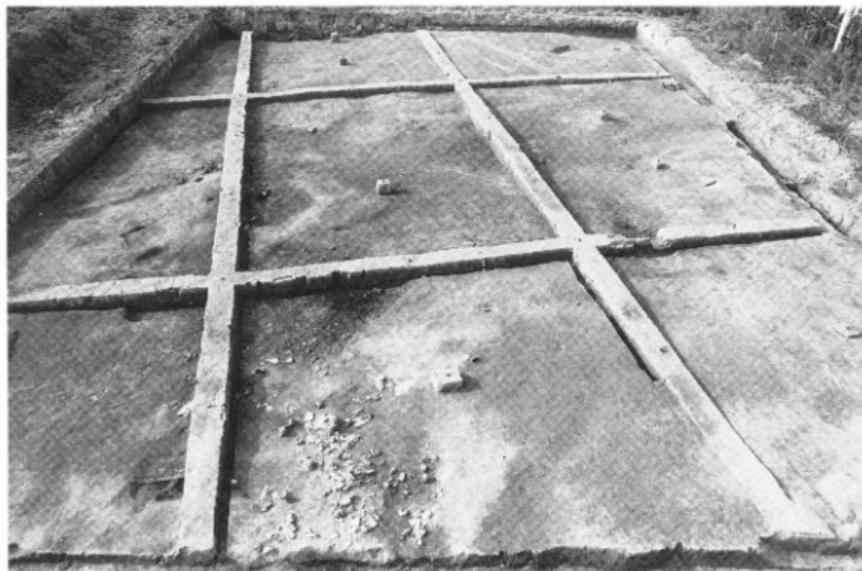
2. SE01遺物出土状況（東より）



1. SE01 (東より)



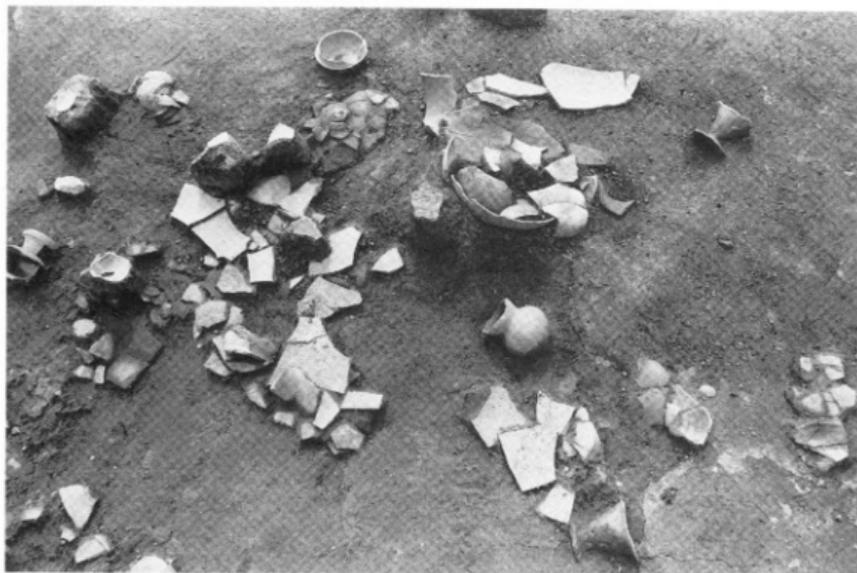
2. SX01 (西より)



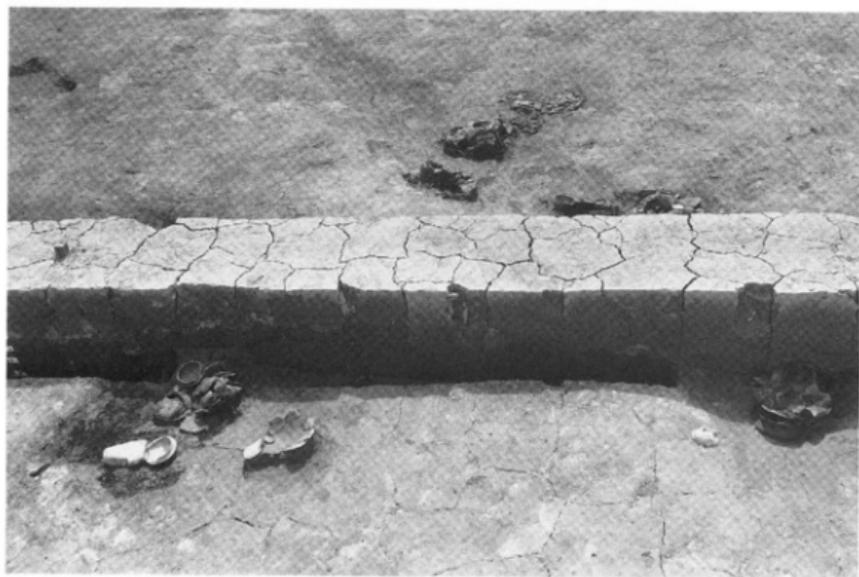
1. A区第Ⅱ層上面遺構検出状況(南より)



2. SX1検出状況(南東より)



1. SX1 遺物出土状況 (東より)



2. SX2・SX3 (東より)



1. S X 2 遺物出土状況 (西より)



2. S X 3 遺物出土状況 (東より)



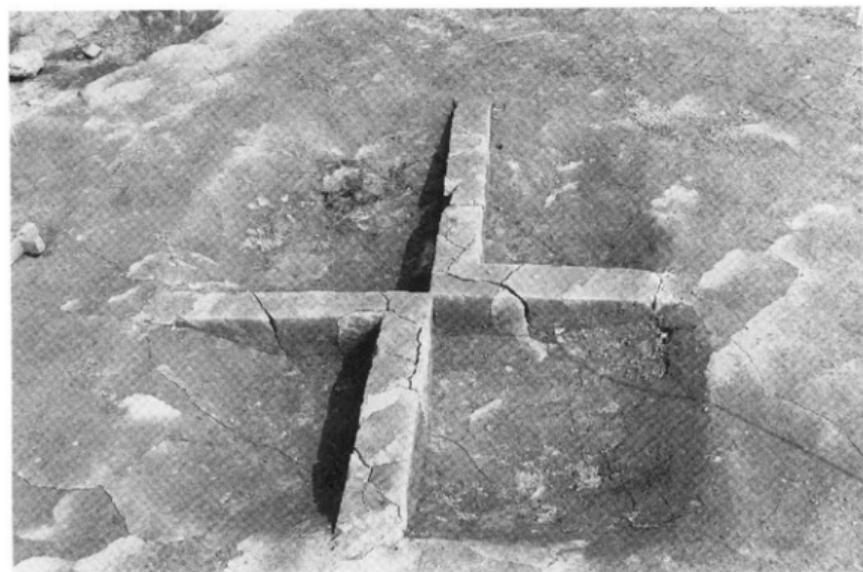
1. S X 3 出土遺物 (西より)



2. S X 4 遺物出土状況 (東より)



1. SK1 (西より)



2. SK2 (北より)



1. S X 5 遺物出土状況 (南西より)



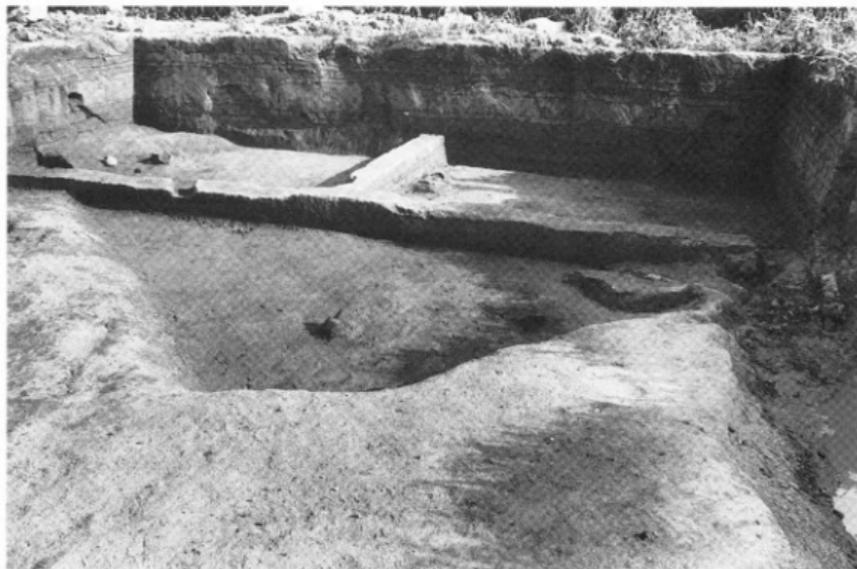
2. S X 6 遺物出土状況 (東より)



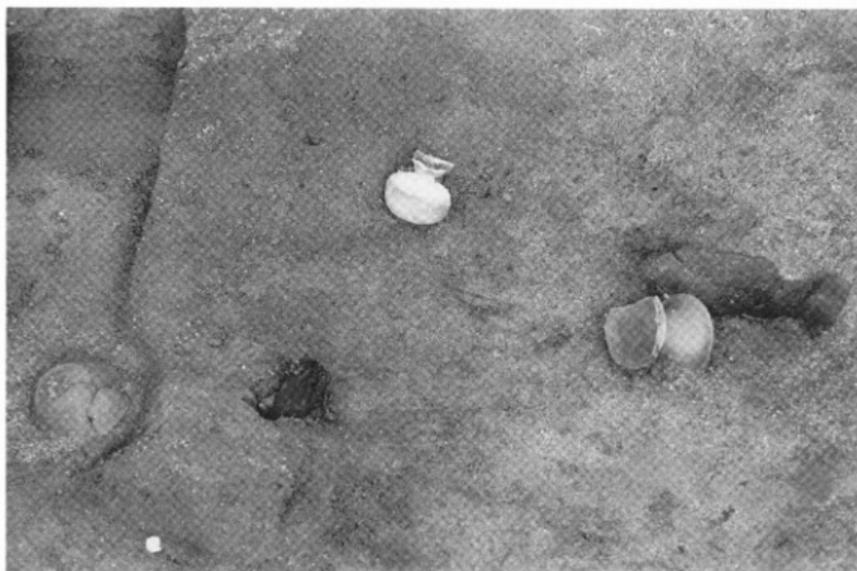
1. SBI拡張前（西より）



2. SBIカマド拡張後（南より）



1. SB2 (北西より)



2. SB2出土遺物 (西より)



1. SB2カマド（北より）



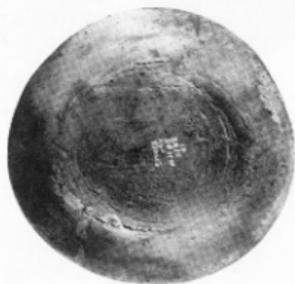
2. A区北側第Ⅺ層上面遺構（北より）



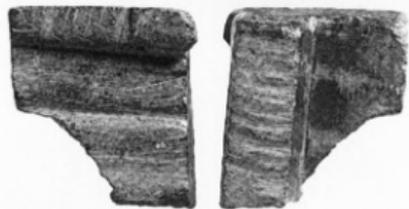
4



5



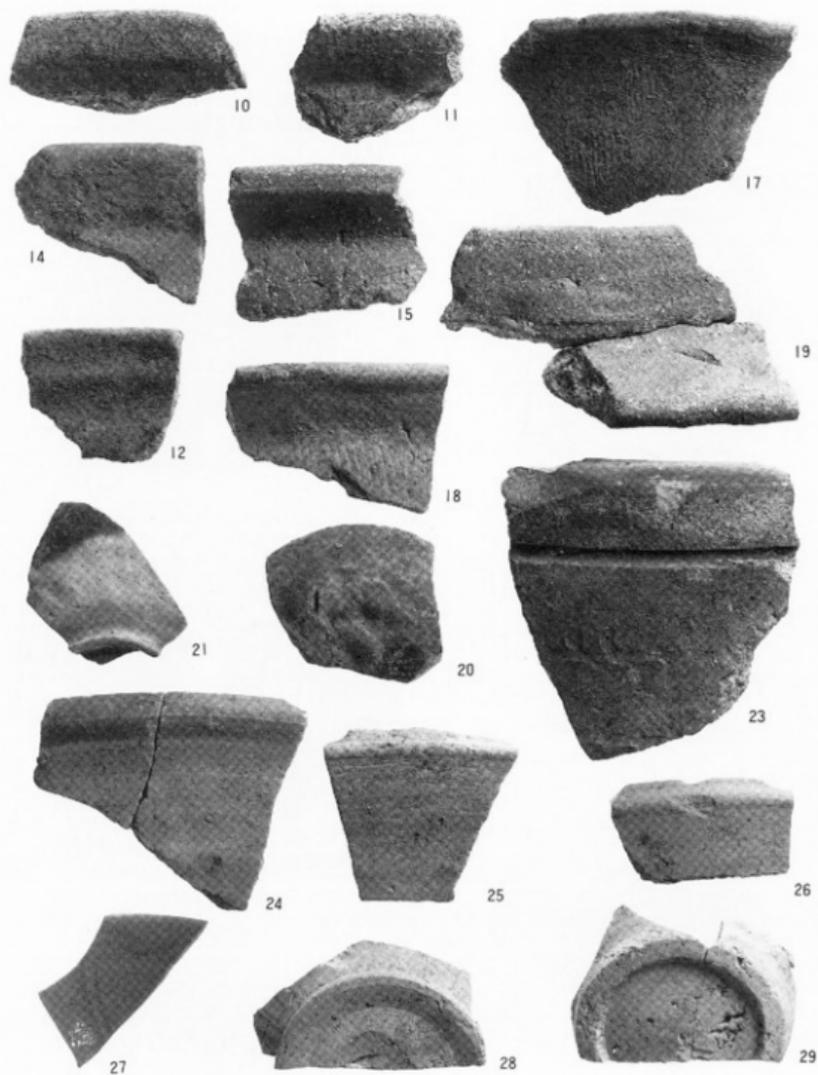
9



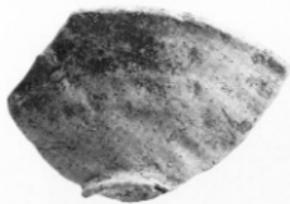
31



30



I. 第V層出土遺物②



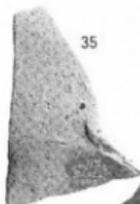
32



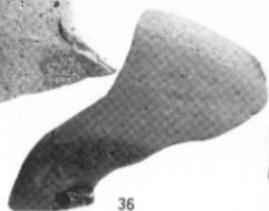
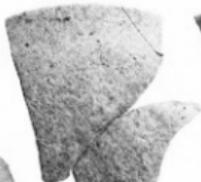
34



33



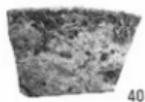
35



36



39



40

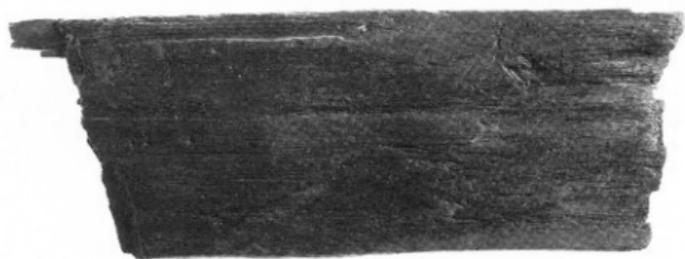


41

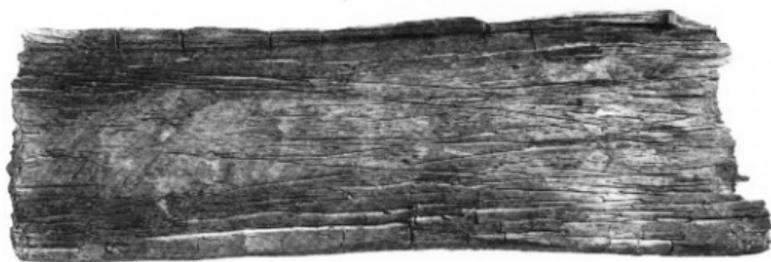


42

I. SB01 (32), SK01 (33, 34), SE01 (35~) 出土遺物



43



44



45

46

47



1. SXI 出土遺物① (集合)



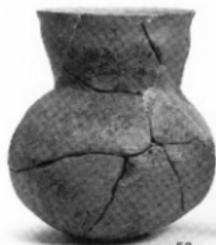
51



50



55



52



53



60



A

I. SXI 出土遺物② (A. タイ類上顎骨)



62



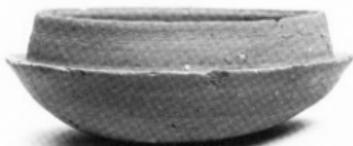
63



66



70



73



78



74



77



83



84



85



89



88



92



81



80



95



94



96



97



98



100



101



102



103



1. S X 2 出土遺物① (集合)



2. S X 2 出土遺物②



106



108



107



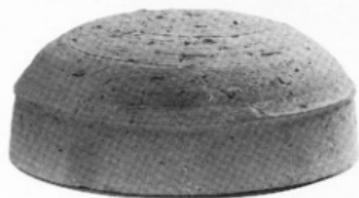
112



113



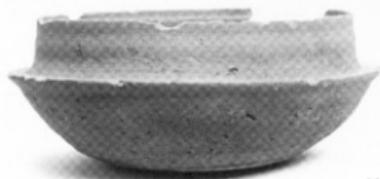
114



115



117

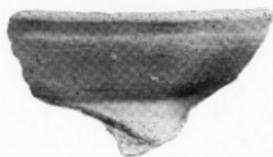


116

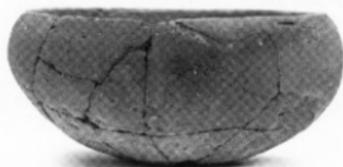




118



119



120



121



123



125



126



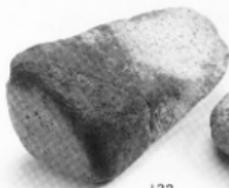
127



131



130



132



133



135



136



137



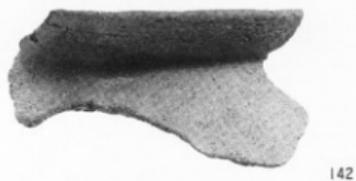
138



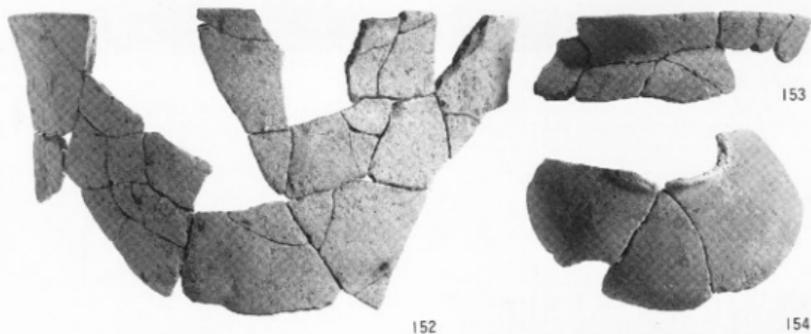
140



141



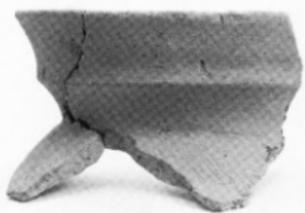
1. SX7出土遺物 2. SKI出土骨片(B)



1. 焼土 2 出土遺物 (152) 2. 焼土 4 出土遺物 (153~159)



160



161



166



163



168



176



175



177



179



180



182



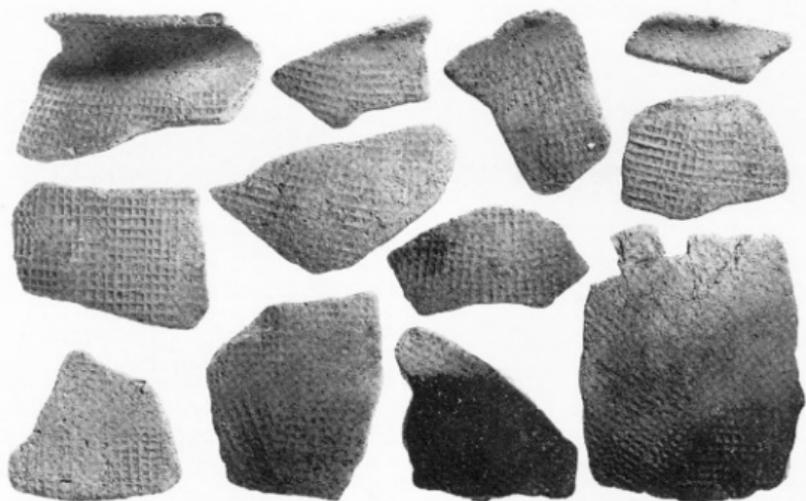
185



190



191



202



197



204



205



203



209



206



210



213



212



215



216



214



217





219



222



223



224



226



234





236



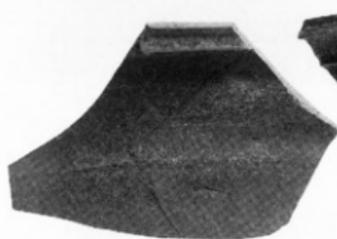
244



240



242



249



248



250



247



245



246



251



252



254



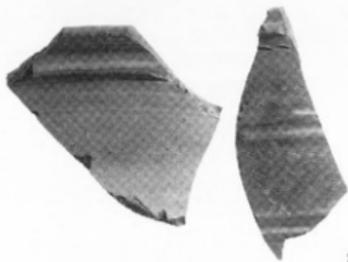
255



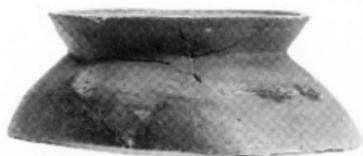
253



260



259



262



264



263



269



266



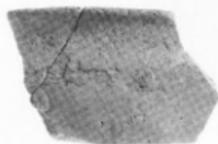
273



267



271



268



274



275



277



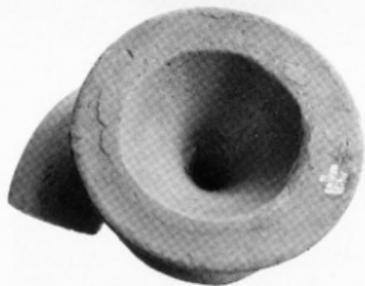
281



283



282



289



1. S B 1 カマド出土遺物 (275・277) 2. S B 2 出土遺物① (281・282・283・289)



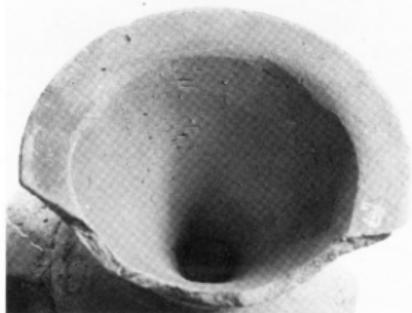
280



285



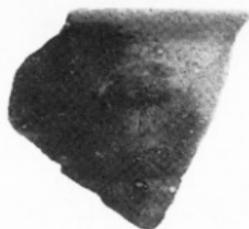
290



291



292



293

1. S B 2 出土遺物② (280・285・290)

2. S B 2 カマド出土遺物 (291・292・293)

抄 録

ふりがな	つじまちいせき							
書名	辻町遺跡2次調査地							
副書名								
巻次								
シリーズ名	松山市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第51集							
編著者名	相原浩二・河野史知							
編集機関	財団法人 松山市生涯学習振興財団 埋蔵文化財センター							
所在地	〒791 愛媛県松山市南斎院町乙67-6						TEL. (0899)23-6363	
発行年月日	1995年 11月 1日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東緯 °' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
辻町遺跡 2次調査地	愛媛県松山市 南江戸町	38201	-	33度 50分 16秒	132度 44分 58秒	19930412~ 19930806	900	民間建設業者による宅地開発に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
辻町遺跡 2次調査地	集落跡 祭祀 墓	古墳 中世	竪穴式住居 祭祀跡 竪 掘立柱建物 井戸		土師器 須恵器 刀子 石鍋 瓦器 勾玉		古墳時代中期後半の竪穴住居と後期初頭の祭祀跡。	

松山市文化財調査報告書 第51集

辻町遺跡 - 2次調査地 -

平成7年11月1日 発行

編
集
行
発

松山市教育委員会

〒790 松山市二番町4丁目7-2

TEL (0899) 4 8 - 6 6 0 5

財団法人 松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

〒791 松山市南斎院町乙67番地6

TEL (0899) 2 3 - 6 3 6 3

印
刷

岡田印刷株式会社

〒790 松山市湊町7丁目1-8

TEL (0899) 4 1 - 9 1 1 1
